賀

NATURE and RELIGION

特234
262

帝國圖書館藏

自然と宗教

ホワイト著

東京 極東福音社發行

昭和十三年 帝國圖書館藏

NATURE AND RELIGION

(CHRIST'S OBJECT LESSONS)

by
ELLEN G. WHITE

Author of
"Patriarchs and Prophets," "The Great Controversy"
"Steps to Christ," etc.

Printed and Published by
THE JAPAN SEVENTH-DAY ADVENTIST
PUBLISHING HOUSE
Tokyo, Japan.

PREFACE

The Creator has given man two wonderful books to read, one the Bible, and one the Book of Nature. Both are most enjoyable reading. In this volume these books are beautifully correlated. The precious teachings of the Bible concerning salvation, the love of God, and His constant care of those who have chosen Him as their Father are reinforced by lessons from the Book of Nature.

Christ, the great Teacher of the Bible, is a Lover of Nature. Much of His instruction, when He was here among men, was given as He walked with His disciples by lake or river or among the hills and valleys of Palestine. In His parable-teaching Christ linked divine truth with common things and incidents. Familiar objects were associated with thoughts true and beautiful—thoughts of God's loving interest in us, of the grateful homage that is His due, and of the care we should have for one another. Thus lessons of divine wisdom and practical truth were made forcible and impressive.

The author of "Christ's Object Lessons," or "Nature and Religion," as it is known in Japanese, is widely and favorably known; and this book like all her works is full of gems of truth which to many readers will give a new meaning to the surroundings of everyday life.

We are sure that "Nature and Religion" will be appreciated by all lovers of the true and the beautiful and that the book will make for itself a place in many hearts and homes.

序

自然は神の書であり、萬有は創造者の語である。

『諸々の天は神の榮光を顯し、穹蒼はその御手の業を示す。……語らず、言はず、その聲きこえざるに、その響は全地に普く、その言は地の極にまで及ぶ』往古の詩聖は大宇宙を仰いで神を讃美した。

『何事のおはしますかは知ねども、かたじけなさに涙こぼるゝ』と古代日本の詩人もまた自然に接して感激の涙をそゝいだ。

其他、山川草木に、花鳥風月に、或は顯微鏡下の細胞に、或は大洋の潮流に、苟くも敬虔の念と眞劍の態度を以て探究する者は皆な森羅萬象の中に、神の無限の叡智と大愛とを認むるであらう。

宗教を說き、眞理を語るものゝ屢々陷り易い過は、極めて明白に、しかも手近に自然界に顯るゝ眞理を、極めて難解に、しかも迂遠な語を以て表現せんと試み、其結果、パンを求むる者に石を與ふることである。

ナザレの聖者は天國の福音を語り、救の道を敎ふるに當り、この世の智者と全く其趣きを異にし、極めて平易に、日常耳目に觸るゝ自然界の事物をもて比喩の題材となし、何人にも解るやうに敎へ給うた。

本書は聖書中に記錄せられあるイエスの自然界の事物による比喩の說敎と實物の敎訓とを主題とし、靈感に基く親切丁寧なる解說を加へ、讀者をして容易にキリスト敎の眞髓を把握せしむるために、近代の豫言者E・Gホワイトが

導かるまゝに書いたものである。

今や世界歴史の一大轉換期に際し、八紘一宇の大方針を標榜し、興亞の使命に起ち上り、曠古の偉業に邁進する我が同胞が、確乎たる宗教的信念に立脚し底力ある人類愛の熱情に燃え、崇高なる品性と堅實なる道德の根本を培養することは急務中の急務である。

幸にして本書を通じて寸分だも人格の高上に資する所があり、一人たりとも多くの人類が創造の神を發見し、心靈の救を全ふし、心の平安と滿足と幸福を體驗することを得ば、本書の使命は果されたのである。

編者

目次

序

緒言……一

第一章　種播く者……一四

種播く者とその種——路傍に落ちたる種——礫地に播かれたる種——茨の中に播かれたる種——若き者の心の畑——心の準備——良き地に播かれし種

第二章　神の力による生長……四五

初に芽・次には穂

第三章　播かれたる毒麥……五三

第四章　一粒の芥種……五八

第五章　種播から學ぶ教訓……六二

第六章　天國はパン種の如し……七四
　自然と神の統御——神と偕に働くもの——子供の教育——相應したる收穫
　——水の邊りに——キリストの犧牲の型として——實物教訓
第七章　隱れたる寶……八一
　如何にして隱されたか——寶の價値——寶を無視せる結果——寶を探求せよ
　——探求の報賞
第八章　値たかき眞珠……九八
第九章　網……一〇六
第十章　新しきものと舊きもの……一一〇
第十一章　與へんがために求む……一一〇
第十二章　二人の禮拜者……一一四
第十三章　祈禱の能力……一五〇

第十四章　此人は罪人と食を共にす……一六七
　迷羊——失はれし銀貨
第十五章　放蕩息子の譬……一八二
第十六章　果を結ばぬ無花果樹……一九六
第十七章　「道や籬の邊にゆき」……二〇五
第十八章　赦の尺度……二二五
第十九章　損になる利益……二三五
　己のために財を貯ふる者
第二十章　富める人とラザロ……二四二
　譬の適用・ユダヤ國民に對し——譬の適用・終末時代に對し
第二十一章　「子よ往きて働け」……二五六
第二十二章　主の葡萄園……二七〇

現代の教會

第二十三章　禮服を着ざる者……二九七

第二十四章　主人の金を托されし僕……三一一

聖靈の賜物——其他のタラント——タラントの活用——智能の開發——言語——感化——時——健康——能力——金錢の正しい用ひ方——親切な行動と愛情——タラントの活用による增加——一タラント——還されたタラント——タラントの撤去

第二十五章　不義の富……三五八

第二十六章　隣人とは誰か……三六九

第二十七章　恩惠の報賞……三八四

第二十八章　十人の處女……三九九

挿繪目次

野の百合を見よ……三

大自然は神の榮光を語る……九

植物の生命は種子の中に眠る……一九

種子の生長に必要な土地の準備……三七

收獲……四九

學校の屋上農園……七一

古蹟發堀隊の試錐作業……八三

ガツラフ譯聖書……九三

眞珠製の鐘……九九

地曳網の大漁獲……一〇七

ゲツセマネの祈……一二一

パリサイ人の祈と稅吏の祈……一三五

幼兒サムエルの祈……一五五

迷へる羊を尋ぬる善き牧者……一六九

自然と宗教

放蕩息子の歸るを待つ親心……一八五
實らざる葡萄樹を憤る園主と今一年施肥を求める園丁……一九九
各人の心の戸を叩くキリスト……二一九
愛とあはれみの主キリストの溫容……二三一
東京の中心區域にある某銀行……二四九
眞の禮拜は神喜び給ふ……二六三
特撰の葡萄園……二七五
砂漠にも花咲き匂ふ……二八九
ユダヤ民族離散の哀しみ……二九九
正しい發音の練習……三二三
天與の健康を維持增進する爲に……三三五
富者は如何に貧者を助くべきか……三六三
隣人愛のナイチンゲール……三七七
赦罪を求むるインド人の苦行……三九一
救主の再臨も斯く油斷なく待たねばならない……四〇五

自然と宗教

緒言

キリストはその教を垂れ給ふに當つてさま〴〵の比喩を語り給うた。我らはそれらの比喩に此の世に對する彼の使命と同一の精神を發見する。もと〳〵キリストは神の子なりしが、我ら人類が彼の神性を知り得るため我らと同じ人性を有つて我らの間に生活し給うたのである。卽ち人性のうちに神性が顯され、見えざる榮光が人の見得べき肉體を通して輝き出でたのであつた。換言すれば人類が可見世界により不可見世界を知り得るため我らと同じ人となつて神が現れたのである。これと同一精神は垂訓中の比喩中にも現れてゐる。卽ち未知の事物が旣知の事物によつて證明せられ、天上の眞理が人々にとつて世上周知の出來事でもつて說明せられてゐるのである。

聖書に『イエスすべて此等のことを、譬にて群衆に語りたまふ……これ豫言者によりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く「われ譬を設けて口を開き、世の創より隱れたる事を言ひ出さん」』（マタイ傳一三ノ三四、三五）と

あるが、彼は自然界の事物を靈界を説明する媒介とし、聽者の日常經驗や自然的出來事を文字にて書き表されたる眞理と結びつけ給うたのである。つまりキリストの比喩は、自然界から靈界にと導くもの、例へば、人類を神に地を天に結合せしむる眞理てふ連鎖の一つ〳〵の環の如きものであつた。

キリストが天然自然を取材として教へ給うたのは、己が手をもて造り之に能力と特質とを賦與したる事物に就て語り給ふに他ならなかつた。凡ての受造物は、元始に於ける完全狀態のときには一つとして神の表現たらざるはなかつた。エデンの家鄉、卽ち樂園にありし日のアダムとエバにとつて、自然界は神に關する知識と教訓とに充ち溢るゝものであつた。彼らはそれらの受造物によつて神と交つてゐたから、眼に映ずるもの心に觸るゝもの一つとして知識とならざるものはなかつた。然るに人祖が至高き神の律法を犯すや否や、神の聖顏より發する榮光は自然の面から離れ遂に地上は汚され傷けられてしまつたのである。とは云へ斯の如く破壞された現在でも、尙多くの美が殘されてをり神の實物教訓も未だ消滅してゐない。若し自然界を正當に理解さへすれば、萬物は今も尙造物主に就て語つてゐることを聞くことができるのである。

然るにキリストの在世當時已に如上の意義は見失はれ、人々は殆ど神をその聖工なる自然界によつて認識し得なくなつてゐた。人類の邪惡があたら優美なる創造の面に黑布を覆ひかぶせたため、自然は神を顯さず却つて神を隱す障害物となつてしまつたのである。人は『造物主を措きて造られたる物を拜し、且これに事ふ』と（ロマ書一ノ二五）かくて神を知らざる民衆は『反てその思念を亂し其の愚なる心蒙昧となつて』（ロマ書一ノ二一）しまつた。神樣を信ずるイスラエルの國民すらも同樣、人の教が神の聖旨を誤り、たゞに自然界のみならず、特に神を顯すためにさゞ

野の百合を見よ

けられたる神殿内の犠牲や儀式又奉仕と聖經までが擾され、曲解され、神を掩ひ隠すものとなつてしまつた。

そこでキリストは斯眞理を暗からしめた暗雲を除かんとし給うた。彼は人間が自然の面を覆ふてしまつた罪の黒布を取除いて靈光を輝かし、以て本來萬有はかゝる美を反映すべく造られしものなることを示さんがために來り給うた故に彼の話には、聖書を教へる時も自然界の事を教ふる時にも、必ず新しき見解と新しき啓示とが見られたのである

イエスは優美なる百合の花を取つて子供達青年の手に持たせ、彼らが天父の聖顔の輝きに照された晴々しい顔ばせをしてじつとこれを眺めいつてゐる時、『野の百合の花はいかにしてそだつ（純な自然の美しさに）かをおもへ、勞せず紡ざるなり、然れどこれ汝らに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一に及かざりき』（マタイ傳六ノ二八、二九）との教訓を垂れ、引續いて『今日野にあつて明日爐に投げ入れらるゝ野の草をも神はかくよそはせ給へば、況して汝らをや、あゝ信仰うすき者よ』（マタイ傳六ノ三〇）との肝要にしてしかも溫情に溢れたる勵ましを語り給うた。

更にキリストは山上の垂訓中に、子供や青年だけではなく、他の者に對しても次の如く語り給うた。この垂訓は群衆に向つて言はれたもので、彼らの多くが、心配と苦勞、失望と悲歎とに沈んでゐたことを看破せるイエスは『さらば何を食ひ何を飲み何をきんとて慮ひわづらふな。（これみな異邦人の切に求むる所なり。）汝らの天の父は凡てこれらのものゝ汝らに必要なるを知りたまふなり』と言はれ、その手をひろげ人々に向つて『まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらのものはなんぢらに加へらるべし』（マタイ傳六ノ三二、三三）と仰せ給うた。

斯樣にしてキリストは、自ら百合の花とか野の花とかに授け給うた使命を更に解釋して聞かせ給うたが、彼は我々

もまたこの種の百合の花の中に、あるひは種々の草花の中に、如上の意味を看取するに至らんことを切望し給ふのである。彼の語はいづれも確信に充ち、神への信頼を強めずしては措かぬものがある。

眞理に對するキリストの見解は實に深遠に廣汎にして、その教は多岐に亘り、自然界の凡ゆる事物を悉く眞理の證明として用ひ給うた。人々の日常見聞する凡ての風物と情景には、何かしら靈的眞理との關係があつたから、イエスは常に自然をかりて比喩を語りいで給うたのであつた。

傳道の初期に當つてキリストは、極めて平易な言葉で聽者が救に導く眞理を會得し得るやうに語り給うた。然るに人々の心にはかゝる眞理の根を下すに到らず直ぐに啄み去られた。そこでイエスは『この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聽かず、また悟らぬ故なり。……この民の心は鈍く、耳は聽くに懶く、目は閉ぢたればなり、これ目にて見、耳にて聽き、心にて悟り、飜りて、我に醫さるゝことなからんためなり』（マタイ傳一三ノ一三―一五）と仰せ給うた。

イエスは、聽衆が疑問を喚起することを切望せられ、不注意でゐる者を覺醒してその心中に眞理を扶植せんことを求め給うた。いつたい比喩を用ふることは、ユダヤ人にとつても、又他の國民にとつても、通俗向であると同時に敬意と注目とを惹くものであつたから、これ以上效果ある教へ方は他に見られなかつたのである。またイエスは常に眞面目な質問者には喜んで答へ給うたから、神のことに就て知りたいと欲ふ聽者は、何時にてもイエスの御話によつて理解することができたのである。

尙又キリストがある眞理を語らんとし給ふ時、そのことに人々が不用意且無理解な場合もあつたので、主は比喩に

よりて彼らに敎へ給うたのであつた。言はんとする敎訓を、世上のある場面とか經驗とか或は自然など〻關聯せしめて語り、彼らの注意を促すと共に心に感銘を與へんと努め給うた。後程彼らがはからずもイエスの比喩に用ひ給ひし事物に直面する時、イエスの敎を想起した。そして聖靈の感化に對し開かれた彼らの心意には、愈々イエスの敎訓が明瞭となり、以前に漠然としてゐたものが明白に、捕捉するにむづかしかつたものが確實に握りうるやうになつた。

イエスは凡ゆる人々と心の接觸を求め給うた。さまゞの實例を語り、たゞに眞理を多種多樣の形態を以て示すに止らず、直接に異なる階級の聽者に訴ふるところがあつた。しかもその實例なるものがいづれも彼らの日常見聞せる事象から捉へ來つたものであつたので、非常に聽者の興味を唆つた。また一度イエスの言葉を聽いたものは誰でも自分が決して看過・等閑に附せられてゐないことを知つた。故にいかに卑まれ如何に罪深き者であつても、イエスの敎には何かしら同情と柔しみのこもれることを感じた。

尙またイエスが比喩によつて語り給うたいま一つの理由は、彼を圍む群衆中にはイエスから何とかして訴への材料を得んとする俗惡・固陋・野心滿々たる祭司・ラビ・學者・長老・ヘロデの徒・宰などがゐる事であつた。彼らは密偵を遣して日々イエスに追從せしめ、何かの罪狀又は訴への言質を捉へ、かくまで世の中に强き感化を及ぼせる救主を永遠に葬り去らんと狙つたのである。如上の事實を知悉し給へるイエスは、眞理を傳ふるに當つても、彼らがサンヒードリム（ユダヤ最高議會）の前に何一つとして訴ふる由なきやう周到の注意を拂ひ給うた。而して譬により彼ら要路にあるもの〻僞善と惡行とを譴責し、比喩的言葉を以て利劍の如き眞理を裹み給うた。もし然らずしてこれを明らさまに告げ給はんか、彼らは必ずや主の言葉を聽かず、直ちに主の傳道を阻止する如き行動に出づるに相違なかつ

大自然は神の榮光を語る

たのである。斯様に主は一方には密偵達をして手を下すの餘地なからしむると共に、又他方に於ては誤謬が明らかになるやうに明瞭に眞理を闡明し給うたので、眞面目な心の所有者はその教訓により啓發さるゝところが多かつた。神の智慧、その測り知るべからざる恩寵は、創造せられたる自然界により明白である。彼らはこの自然と日常經驗とによつて、神に就て教へられた。『それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世の創より悟りえて明かに見るべければなり。』（ロマ書一ノ二〇）

イエスの比喩的教訓は、眞の「高等教育」とは如何なるものなるかを示す一例である。決してキリストは深遠なる科學の原理を人々に示すことができないのではなかつた。又人間が幾世紀にも亘つて考究を重ね、苦心の結果漸くにして解決し得る奥義に就ても語り得ない事はなかつた。又彼は終末期に到るまでの科學界に於ける凡ゆる發明に對する刺戟となり着想ともなる豐富なる暗示を提供することもできたのである。然るに彼はこれを敢てなし給はなかつた又彼は決して人間の世俗的野心と好奇を滿足せしめ、世間的尊大にまで導く如き言辭を弄し給はなかつた。その教訓の全部は、人間の心意を神の心意と接觸せしめる事にあつたのである。彼は、神とその言、その聖業に關して述べたる人間の理論に就ての研究を敢て人々に推奬し給はず、寧ろ神の聖業、聖言、攝理に現れたる神を見るやうに教へ給うたのである。

キリストは徒らに抽象的理論に據り給ふことなく、如何にせば人がその品性を向上し得るか、神を識るの能力と善を爲すの能力を增大し得るかの事實に就て留意し給うた。彼は人々に日常生活に密接なる關係を有し、且つ永遠を把持せしむるところの眞理を語り給うた。

往古イスラエルの教育を指導し給うた者はキリストであつた。彼はヱホバの誡命と法度に就て次の如く仰せ給うた『勤めて汝の子らに教へ、家に坐する時も路を歩む時も、寢ぬる時も起くる時もこれを語るべし、汝またこれを汝の手に結びてしるしとなし、汝の目の間におきて誌となし、また汝の家の柱と汝の門に書き記すべし』（シンメイ記六ノ七―九）と。而してイエス御自身がその教に於て、如何にこの命令を實際化すべきか――如何にせば神の國の法度と誡命の貴さ、美しさが現し得らるゝかを明示し給うた。

古昔ヱホバはイスラエル民族を己の代表として特に訓練し給うた時、彼等の住居として山地或は谿谷を與へ給うて彼等の家庭生活並びに靈的訓練により、自然と神の言とに接觸せしめ給うた。同じくキリストもその弟子達を、或は湖邊に、山腹に、野に森にと伴ひ行き、彼らの目の前にある自然界によりて教へ給うた。それで弟子達は、この世の學校で學ぶことの出來ない多くの事を學ぶと同時に、受けたる知識を更にイエスと協力して働く場合に應用した。

同樣に我々も亦、創造界を通して造物主に近づかねばならぬ。實に自然は神聖な絶好の教科書であるから、文字となつて現れたる聖言――卽ち聖書と併用し、人々に神の御品性を教へ、迷へる羊を神の群に歸すことに努めなくてはならない。誰でも神の聖業の研究に從事するなら必ず聖靈は强く心中に働き給ふのである。而も斯る感銘は所謂理論的推理より生ずるものではなく、その心意が神を認め得ざるまでに蒙昧になり、又その眼は神が見へないやうに育み又その耳が神の聲を聽くべく聾してゐない限り、その人は深遠なる意味を了解し得ると共に、崇高にして靈的なる聖言の眞理に强い感銘を受けずには居られないのである。

斯の如く自然界より直接學び得る教訓は、單純平易にして最高價値のものであるから、凡ての者はかゝる源泉より

教へられなければならない。元來自然より發露する優美そのものは人心を罪と俗念より離れしめ、純潔・平和・神へと導くに有效なものである。世上には徒らに哲學科學などに心醉して人間的幻想推理にのみ捉はれてゐるものが少くないが、そうした人等は自然との密接なる接觸が必要である。創造は獨一の神によつて行はれた事、キリスト教は實にその獨一の神の宗教なること、自然界と靈界とには調和のあることを學ばしむる必要がある。彼らの目に見手に觸るゝ一切は品性の向上に資すべきものなる事を學ばねばならない。斯樣にするならば必ず彼らの心意は强められ、品性は向上しその全生涯は神化さるゝに相違ない。

キリストの比喩的教訓の目的も安息日制定の目的も結局同一である。神は安息日を創造力の記念として人に與へ給うたが、それは人類が神をその聖手の工によつて認め得んがためであつた。事實安息日は受造物によつて創造主の榮光を認むるやうに我らを促すものであつて、これは神ののぞみ給ふところのものである。以上の理由によりイエス御自身もその貴重なる教訓を自然の美と結合し給うたのである。されば我儕はこの聖日には何れの日よりも自然界に刻印されたる神聖な使命に就て學ばねばならない。我らはキリストの比喩をかゝる環境——即ち野とか森とか蒼空の下花卉の間にあつて學ぶべきである。そうして我らが自然の心に近づくとき、キリストは必ず我らにその臨在を示し、心中に彼の平和と愛とを注ぎ給ふのである。

キリストはたゞ如上の教訓を安息日にのみでなく、平日勤務に從事せる時にも學ぶやうに望み給ふのである。例へばキリストは田を耕し種播をなす時にも、我らのために智慧を與へ給ふのである。彼は人の心に働く恩惠を實驗するやう欲み給ふのである。主は我らがいろ〳〵な業務に從ひながら、凡ゆる社交的事柄の中に何らか眞理の教訓を發見

せしめんと感銘を與へ給ふのである。もしかゝる心懸で生活するなら、日常の業務は我らの神に向ふ心眼を奪ふことなく、寧ろ絶えず神と救主のことを熟思するに至らしむるに相違ない。斯して神の想は金絲の如く妙に奇しく我らの家庭生活に於ける凡ゆる勞苦・業務の中に織り込まれ行き、我らは再び自然界に神の榮光の宿れる事實を認むるであらう。而して我らは絶えず天上の眞理を新しく學び、神の純潔なるみ像に化するものである。そうして『エホバより教を受け』（イザヤ書五四ノ一三）その置かれたる立場に於て『神と偕に居る』（コリント前書七ノ一四）の特權が與へられるのである。

第一章　種播く者

種播く者とその種

キリストは種播の譬により天國の事を説明すると共に、神なる農夫のその民に對する働に就て語り給うた。彼は恰も農夫が畑に種播く如く天上なる眞理の種を人の心に扶植するために臨り給うた。イエスの語り給へる比喩そのものは種々なる貴重な恩惠にて充てる眞理であり、又播かれたる種そのものである。この譬は誰にも分り易く語られたがために、人々は却つに比喩そのものゝ中に暗示する眞理を充分解されないが、キリストは農夫が畑に播く種のことによつて一度叛逆した人等を再び神に復歸せしむる福音の種のことを想起させるやうにと希望し給うてゐる。このさゝやかなる種播の比喩を語り給うたキリストこそは榮光の君諸王の王であつた。畑の種播も心の中に播く種も齊しく同一法則によつて發生し且つ成長するのである。

ガリラヤ湖畔に蝟集せる一團の群衆はキリストから何事かを聽かんとして熱心に期待してゐた。其中には呉蓮の上に臥つて己が病狀をイエスに訴へんものと待つ病者もゐた。罪深き人類の呻吟に應ふることはキリストの此の世に降り給ひし使命であつたから、彼はすぐ凡ての疾患を癒し、その周圍に生命・健康・平和を漲らせ給うた。

民衆が四方八方から詰めかけて來て、忽ち立錐の餘地もなきまでになつた。そこでキリストは、向岸に渡らんとて用意してあつた漁船に乘り、弟子達をして少しく岸より漕ぎ出さしめ、陸上の群衆に向つて語り給うたのであつた。

湖邊一帶は美しいゲネサレの平原であつた。その時平野にも遙か起伏せる丘陵山腹にも農夫は耕作してゐた。あるものは播種に、ある者は收穫のため忙しく働いてゐた。イエスは斯樣な光景を眺めつゝ、次の如く語り給うた。

『視よ、種播くもの播かんとて出づ、播くとき路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりて啄ばむ。土うすき礫地に落ちし種あり、土深からぬにより、速かに萠出でたれど日の昇りし時灼けて根なきが故に枯る、茨の地に落ちし種あり、茨そだちて之を塞ぐ、良き地に落ちし種あり、或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍の實を結べり』（マタイ傳一三ノ三—八）

キリストの使命は當時の人々に理解されなかつた。彼の態度は彼らの期待に添ふものではなかつた。元來主イエスは、ユダヤの祭儀及び諸制度の基礎であり、莊重なる神殿の奉仕は神の啓示によるもので、時到るときこれら一切の儀式・禮典を完うする者の現るゝことを國民に教示するところのものであつたのである。然るにユダヤ人は、それらの形式・儀式を過重視したるため肝心な主旨を忘れ、神の教示し給へる教訓を、人間の傳説・教誡・教條によつて全然掩蔽してしまつた。卽ち人間的の傳説や教誡なるものによつて眞の宗教に對する理解と實行とが阻まれたために、

彼らは神が人なるキリストとして現れたときに、之を一切の型・影の成就者として仰ぐことができなくなつてゐた。彼らは肝心の實體をおろそかにして既に無用となれる儀式・型典を固執した。豫言と律法に錄されし如く救主が臨り給ひしに拘らず、執拗く徵を求めてやまず『汝ら悔改めよ天國は近づきたり』（マタイ傳三ノ二）との音信に接しながら徒らに、奇蹟の行爲のみを要求した。彼らは豫期に反したので福音に躓いてしまつた。彼等の欲望は征服的大覇業を遂行して己の權力を示し且つ地上王國の覇業の上に新王國を建設するメシヤであつたのである。そこでキリストは彼らの期待に對し種播きの譬を以て答となし、神の國は武力によらず、强制的干涉によらず、たゞ人心に新原則を扶植することによつて成立するものなることを示し給うたのである。

『良き種を播くものは人の子なり』（マタイ傳一三ノ三七）と。キリストは王としてゞはなく種播く者として、臨り給うた。國々の顚覆を企つるためでなく、種を散布するため三十三年餘の人生を送られたのである。己に從ふ者を國家的權力・地上的勝利に向はしめんがためでなく、寧ろ損失と失望の經驗をなし辛苦を嘗めた後に得らるゝ收穫を目標たらしむるために模範を示し給うたのである。

キリストの語り給へる比喩の意味はパリサイ人たちには諒知された。然しそれらの教訓は彼等に取つて好ましいものではなかつたので、彼らはそれの理解にわざと心を外らしてしまつた。群衆はこの新進の教師が如何なる目的で斯くも神秘を語るか解するに苦しんだ。イエスの言葉は不思議なほど彼らの心に感動を與へ、かつ彼らの野心を根底から覆へしてしまつた。また弟子達にはその比喩が解し得られなかつたものゝ、著るしく興味を喚起して、秘かにイエスの許に來つてそれらの解說を求めるに至つた。

キリストは先づ彼らに如上の感念を起さしめ然る後一層明かに教示せんと欲み給うたから、彼の許に來り眞面目に聖言の眞意をたづぬる者には快よく說明し給うた。弟子達にも同樣に比喩の意味を說明し給うた。人もし心を聖靈の導くがまゝに廣く開いて神の言の研究に從事するならば、聖言の意味を覺り得ずして暗黑の中にとゞまると云ふが如きことは決してない。キリストは『人もし御意を行はんと欲せば、此の敎の神よりか、我が己より語るかを知らん』（ヨハネ傳七ノ一七）と仰せ給うた。眞理を更に明瞭に理解せんとてキリストに來る者は、必ずその目的を達することができるのである。斯る者にはキリストは即座に天國の奧義を開示し給ふから、眞心より眞理を慕ふ者には必ずその奧義が理解し得られるのである。天來の光は彼の心を照し、延いては人々のために彼自身が暗路を照す光となるやうになるのである。

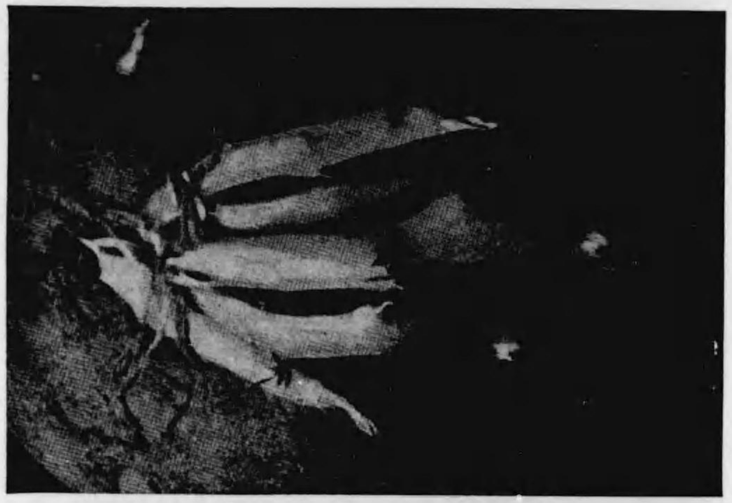
『種播くもの播かんとて出づ。』（英改譯參照）と東方アジアでは擾亂の絕ゆる間とてはなく、危難のおそれがあつたので、一般の人々は城壁內に居住し、農夫は日々その城壁の外に出て働くのが普通となつてゐたが、天上の種播く者なるキリストもその如く、平和と安全の家鄕を後にし、世のあらざりし先より父と偕に保ちし榮光を棄て、宇宙を宰ぶる寶座を離れて、地上に降り、苦しみ試みらるゝ一個の人間となり給うたのである。孤獨の裡に出で往き失はれし世界のために涙を流して生命の種を播き、己が血をもて之を潤し給うた。

彼に從ふ者もこれと同樣の決心を有つて種播きのために出で往かねばならない。往昔アブラハムは眞理の種を播くべしとの召を蒙つた際『汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我汝に示さんその地に至れ』（サウセイ記一二ノ一）との命を受けたが、彼は直ちに『その往くところを知らずして出で』（ヘブル書一一ノ八）往いた。使徒

パウロもさうであつた。彼はエルサレムの神殿にて祈つてゐるとき『往け、我なんぢを遠く異邦人に遣すなり』（シトギヤウ傳二二ノ二一）との神命に接した。斯の如く何人にしてもキリストと合體するの召を蒙つたる者は、一切を棄てゝ彼に從はねばならない。己が舊友・知己と別れ、從來の計畫を放棄し、所謂地上の望みなるものを放棄せねばならぬ。涙を流し辛苦しつゝ孤獨の裡に犧牲的態度をもつて播種に從事すべきである。

『種播く者聖言を播く』と。キリストはこの世界に於ける眞理の播種者であつた。それに反してサタンは人類の墮落以來絶えず誤謬の種を播きつゝある。最初彼が人類を己が手中に陷れたのは僞滿であつた。爾來今日に到るまで彼は僞滿をもつて地上に於ける神の國を顚覆し、人類を己が權威の下に屈服せしめんと活動したのである。キリストは、眞理の種を播かんがために天上から降下し給うた。彼は神の帷幄の裡にあつて奥深い永遠の聖所に在し給ひし方であつたから、人類の前に純粹の眞理の原則を表示し給ふことができたのである。人類の墮落以來この世に對する眞理の啓示者であるキリストによつてのみ朽ちざる種卽ち『神の活ける限りなく保つ言』（ペテロ前書一ノ二三）が人類の心に播かれるのである。げにかのエデンの樂園に於て人祖に與へられたる最初の聖約束に託し福音の種は人類の心に播かれたが、地上にて行はれしキリストの個人的奉仕とその働こそは特にこの種播きの比喩に適用さるべきものである。

神の言は種である。凡そいづれかの種子にも萠芽力がある。植物の生命は種の中に眠つてゐる。同樣に神の言にも生命がある。キリストは『我がなんぢらに語りし言は靈なり生命なり』（ヨハネ傳六ノ六三）『我が言をきゝて、我を遣しゝ者を信ずる人は永生を有ち』（ヨハネ傳五ノ二四）と仰せられた。誠に神の語り給ひし凡ての聖約束と



る眼に中の子鶴は命生の物植

御命令には能力即ち神の生命が存在してゐるから、それによつて凡ての御命令は實現し聖約束は成就するのである。故に何人にしても信仰により眞理の聖言を信受するとき、神の御品性と生命そのものを受けるやうになるのである。

抑も種子は各々その類にしたがつて實を結ぶものである。正しく種を播きさへすれば、その中にある生命は必ず一つの植物となつて現れて出るのである。その如くに信仰によつて朽ちざる聖言の種を心中に受け容れるとき、必ずや神に似たる品性はその人の生涯に實現するものである。

イスラエルの教師達は斯様な聖言の種を播いてゐなかつた。彼等の態度と眞理を語るキリストの行爲は全然正反對であつた。彼等は傳說又は理論或は思索に拘泥して、聖言の代りに憶說推理又は人間的解釋を用ひたのである。だから彼らの教には、毫も心靈を生かす些かの能力がなかつた。然れどキリストの教の主題は聖言そのものであつた。彼は常に質問者に對し『斯く錄されたり』『聖書に何と言へるか』『汝いかに讀むか』等の直截なる反問をなし、凡ゆる機會を捉へて、反對者にも歡迎者にも、彼等の興味を喚起させるや否や直ちに時を移さず聖言の種を播き給うた。『途・眞理・生命』にして『活ける神の言』に在せしイエスは、聖書に就て『この聖書は我に就て證するものなり』（ヨハネ傳五ノ三九）と仰せられ、尙『モーセを始め凡ての豫言者は己に就きて凡ての聖書に錄したる所を說き示し給うた』（ルカ傳二四ノ二七）

キリストの僕たるものは主と同一態度に出づべきである。今日も同樣に神の力ある眞理の言は、所謂神學のために閑却せられてゐる。即ち福音宣傳者を以て任ずる者すら、全聖書を靈感による聖言として容認せず、學者と稱するものは部分的に之を否定し又疑問として取扱つてゐる。彼らは自己の判斷と見解を聖言以上のものとなし、聖言に對す

る解釋の如きも自己の觀念推理に由るため、聖言の絶對確實性を失つて、不信の種子を播きちらすので、多くのものは果して自分は何を信じてよいかその去就に迷うてゐる狀態である。そこで教派宗派が續出し種々なる工作的の信仰者が夥しくなつたのである。キリストの御在世當時にあつてもラビ達は聖言の大部分に牽强附會なる解釋を下し、聖言の簡明なる教が彼らの實生活を責めかつ苦しむるため聖言の力を殺ぐことに努力してゐた。今日も變つたことはない。同樣のことが行はれてゐる。聖言は律法を犯す人には都合よき口實となるやう神秘的に書かれてある。又祈禱なしには分らないやうに語られてゐる。キリストは當時の迷信傳說の暗雲を散らして權威ある聖言には毫も疑念をさしはさむ餘地のないやうに語り給うたが、キリストの宣傳者は皆同一態度に出づべきである。聖書を全能の神の聖言として又一切の爭論の解決、一切の信仰の基礎として提示すべきである。

以上の如きことによつて聖書の力の殺がれたる結果、人類の靈的生活はます〳〵低下してしまつた。今日講壇より語られる多くの說教は人間の良心と生活と心靈とに覺醒を促す權威がない。『途にて我らと語り聖書を說き明たまへる時我らの心、內に燃しならずや』（ルカ傳二四ノ三二）との感極まつての叫は聽衆の口から殆ど叫ばれないのである。世上には、活ける神を求めその臨在を渴望してゐる者は少くないが、いかなる哲學的理論も文學的論辯も彼らに滿足を與へることができない。所謂人間の主義觀念・思考などはつまらないものである。飢渴を癒すには先づ神の言を語らねばならない。今迄人の心の理論とか訓諭とか傳說とかにのみ耳を傾けてゐた者には心靈を甦らしめ永遠の生命に到らしむるところの神の聲卽ち聖言を聞かせねばならない。

キリストは何時も神の溢るゝ恩寵と慈愛を主題として語り給うた。彼は神の品性と律法とが如何に神聖なるもので

あるかに就て懇々と說き給うた。また自己の人生に於て『途・眞理・生命』であることを表し給うた。同樣キリストを宣べ傳ふる者は敎へる所と行ふ所と一致することを主眼にせねばならない。卽ち基督者はキリストの眞理を提示してキリストの克己と犧牲・謙遜と死・復活と昇天・天上に於ける執成及び『又きたりて汝らを我が許に迎へん』（ヨハネ傳一四ノ三）との聖約束を人々に敎へねばならない。

徒らに議論をしたり福音を非難する者と爭ふたからとて益はない。キリストの態度に倣ふことが肝要である。天上の寶庫より取出せる淸新にして生命に漲る眞理を傳へ、常に『御言を宣べ傳へよ』『もろ〳〵の水のほとりに種を下し』（イザヤ書三二ノ二〇）『時を得るも得ざるも』語ることを止めてはならない。『我言を受けし者は誠實をもて我言を語るべし、糠いかで麥にたぐふことを得んや』（エレミヤ記二三ノ二八）『神の言はみな潔よし、……汝その言に加ふること勿れ恐らく彼なんぢをせめ、又なんぢをいつはる者となしたまはん。』（シンゲン三〇ノ五、六）

『種播く者聖言を播く』と。玆に一切の敎育に於ける基礎的原則が提示せられてゐる。又『種は神の言なり』と言はれてゐるが、今日多くの學校に於ては神の言は殆ど顧みられない、却つて聖言以外の學說が重大視されてゐる。不信的なる著書が殆ど敎授科目の大部分を占め、且又その敎科書中に記載せられてゐる事柄は、懷疑的色彩が濃厚である。しかのみならず科學もその所謂發見なるものが第一歩を誤つてゐるため研究の方法まで歪められてゐる。にも拘らず神の言が斯る假想的科學說と比較せられ、何だか確實性に缺乏し、信を措くに足らぬものゝ如くに思惟せられてゐる。斯樣にして疑惑の種が靑年の頭腦中に播かれた結果、彼等は一朝誘惑に遭遇するや、忽ち疑惑の種子が發芽して更に暗黑の中に葬られるのである。誰でも神の言を信ずる信仰が失はれたら、心靈を掩護し指導するものが無いの

であるから永生――天國さへも見失ひ、全く神より離るゝの他はないやうになる。

今日全世界に瀰漫した罪惡の浸潤は、聖言に對する誘惑が原因である。人生の光である神の言を閑却さるゝに至らんか、性來の惡しき慾念を抑ふる能力も失はれ、その結果人々は肉の種を播き墮落てふ實を刈取るに至るのである。

尙又身體にも不健康と衰頽を來す原因となるのである。卽ち神の言を無視して靈感に由らざる著書に培はるゝ時、腦力も次第に萎靡低下して、迚も高遠かつ無限の眞理に觸れられなくなつてしまふのである。元來人間の理解力と云ふものは平素それを用ふる對象物の如何によつて影響さるゝところ多大である。從つて極限された世俗的事物のみを對象とするの結果は、認識理解能力を薄弱にし、遂には智能の萎縮減退を來すに至るのである。

故に斯くの如き結果を招致するところの教育は僞宗教と云はねばならない。凡て教育家なるものは靑少年の心意を確と靈感によるところの聖言の一大眞理に結びつけねばならぬ。これぞこの生涯並びに來らんとする生涯に對する教育の一大眼目である。

如上の態度に出づることが科學研究を妨げ、或は教育上の標準を低下せしむるものであると考へてはならない。神の知識は恰も天の高きが如く、宇宙の廣大無邊なるが如きものであるから、永生に關する問題の研究ほど我らを高めかつ强くするものは他にない。故に靑少年には是非共神より與へられたる眞理の把握に努力せしめねばならない。然せば必ずや彼らの智能は發達し、研究する每に强めらるゝに相違ない。その結果として聖言の實踐に努むる者は、更に又廣大なる思索の分野に伴はれ、朽ちざる智識の富を獲得することができるのである。

以上述べたるが如き聖言の追求によつて得らるゝ教育は、神が人類を救ふ救の計畫に對する體驗的なる知識を會得

せしむるところのものである。斯の如き教育は、人心に神の像を恢復せしめ、誘惑に際してはそれの抵抗防禦力となり、彼等をしてキリストの共勞者たらしめ、滅びゆく世界に恩惠の使命を傳達せしむるやうになる。又斯の如き教育は彼らを天の家族の一員たらしめ、光明の聖徒たるの嗣業を繼がしむるものである。

とは言へ眞理を敎ふるものは、彼自身の經驗したることによつて知りたる所しか敎ふることのできぬ事實を知らねばならない。種播く者は『彼自らの種』を播くのである。キリストが眞理を敎へ給うたのも、彼自らが眞理にて在したからであつた。イエス自らの思想・人格・體驗は一つとしてその敎へたまひしところと合致せぬ點はなかつた。彼の僕たる者もこれと同樣でなければならない。その敎ふるところが彼らの個人的經驗と合致するものでなければならない。先づ彼らはキリストが彼らにとつて、智慧・義・聖・贖となり給ひし眞意の那邊にあるかを充分に知ると共に、神の言を人々に傳ふるに際しては、一つの曖昧をも許してはならない。彼らは使徒ペテロと同樣『我らは我らの主イエス・キリストの能力と來り給ふことを汝らに告ぐるに、巧みなる造り話を用ひざりき、我らは親しくその稜威を見しものなり』（ペテロ後書一ノ一六）と言明し得るものたるべく、又愛弟子ヨハネと共に『この生命すでに顯れ我らこれを見て證をなす、その曾て父と偕に在して、今我らに顯れたまへる永遠の生命を汝らに告ぐ』（ヨハネ第一書一ノ二）と言ひ得るものでなければならぬのである。

路傍に落ちたる種

この種の種播きの譬に於て主として扱はれてゐる問題は、播かれし地が如何に種の發生と生長とに影響を與へるか

である。この比喩によつてキリストは實際に斯う言つて居られるのである。諸君が單に私の爲ることを批評眼でもつて眺めたり、又それが諸君の考へに合致しないからと云つて失望することはよくない。諸君にとつて一番肝要なる問題はこれである。いつたい諸君は私の使命を如何に取扱つて居られるか、實際のところ諸君の運命はこれを受けるか拒むかによつて永遠に定まるのであると。

この路傍に落ちたる種に就て彼は次の如く解說し給うた。『誰にても天國の言を聞きて悟らぬときは、惡しき者きたりて其の心に播かれたるものを奪ふ、路の傍に播かれしとは斯る人なり』と。

路傍に播かれし種とは不注意なる者の心に落ちたる神の言を表してゐる。恰も人や牛馬によつて踏まれ堅くなつた道の如く、彼らの心は世の商賣——快樂、罪——の行きかひに忙しき大路である。而して我慾極まる目的と放縱事に心は奪はれ『罪の誘惑によりて頑固』（ヘブル書三ノ一三）になつてゐるのである。故に彼らの靈的機能は麻痺して人々は神の聖言を耳にしても解し難い。彼らはその警が自分達のことに就て語られたるものであることを認めず、自己の缺陷と危險狀態に就て自覺しないのである。それのみか彼らはキリストの愛に氣附かずして、斯る恩惠の音づれを彼らに關りなきものゝ如くにあしらつてゐるのである。

鳥が路傍の種を啄み去つたやうに、サタンは即座に人心から眞理の種を奪ひ取る。彼は神の聖言が今迄不注意であつたものに自覺を生ぜしめ、頑强であつた心に影響を與ふることを恐れてゐる。サタンとその部下は福音の傳へらるる集會に列してゐる。天使が神の言によつて人々の心を動かさんとしてゐるとき、彼らは拔目なくそれを無効に終らしむるために立ち働く。同樣の熱心を以て、惡意から、御靈の働を妨害する。キリストが人々の心を己の愛にまで

牽きつけ給ふとき、サタンは、キリストを求めて心を動かせる者を叛かしめんとして奔走する。而して種々と奸策・手段を弄して、批評・非難せしめ疑惑と不信の念を懷かしむる。說教者の用語とか態度とかが聽衆には快よくないものであるとき、徒らに斯樣な缺點にこだはつて彼等は自分達にとつて必要な而も神より格別の思召を以て遣られたる眞理に意を用ひず永持のする印象としてその腦裡に印することをしない。

サタンには部下が多い。クリスチヤンと稱しながら人の心より眞理の種を奪ひ去る惡魔の助けをするものが多い。說教を聞いて歸つて後、それを家庭のうちに批評の材料とするものが多い。彼等はさうした說教を世上の政談演說か何かに對すると同じに扱ふ。當然神の言として受取るべき音信を、揶揄的に冷かし半分に批評し去る。それのみか牧師の人格とか動機とか行動とか教會員の素行とかが、雜作もなく論評され、手酷しき判斷が下され、又雜談、誹毀が繰り返され、信仰しない人達の耳にまで入れる。更にまた子供達の耳にまで聽せて、彼らより神の使者とその使命に對する畏敬の念を失はしめ、遂には神の言までが輕んぜらるゝに到るのである。

斯うしたことでもつて信者の家庭に無神的教育が施さるゝことゝなるのである。そんなことゝは知らず彼らの兩親は、何故自分の子供達は福音の話に興味を有たぬのであるか、何故こんなに聖書の眞理に疑惑をさしはさむのであるかと訝る。何故またこんなに宗教的道德的感化が彼らに及ばないのであるかと怪しむが、飜へつて、子供達の心をこれほど頑固にしたのは自分達であることに氣附かない。折角のよき種がその根を下すべき場所を見出し得ないでゐる間に、サタンはこれを奪ひ去るのである。

磽地に播かたれる種

『磽地に播かれしとは、御言を聽きて直ちに喜び受くれども、己に根なければ暫し耐ふるのみにて、御言の爲に艱難、あるひは迫害の起る時は、直に躓く者なり。』

磽地に播かれたる種は、極めて淺い土壤の中に培はれた。すぐ芽が出たけれども、それの根が岩を貫いてまで所要の養素を吸收することができず枯死してしまふ。世に口先だけの宗教を有つものは此の種で磽地の聽問者に等しい。譬ではすぐ地下に岩が横はつてゐたやうに、彼らの良き願望と渴仰の地下には性來の我慾が横はつてゐる。彼らの自己愛は征服されず、罪の如何に甚だしきものであるかを認めず、その心は罪を自覺することによつて卑めらるゝまでには到つてゐない。この種の傾向を有するものは、直ぐ感動し一見如何にも良好な悔改者の如くに思はせる。然し乍ら事實のところ彼らは唯皮相なる宗教の持主に過ぎないのである。

然しすぐ道を受け容れ之を喜ぶやうになつたからと言つて直ちに躓き倒れるものと一概に定められない。これはマタイの例に徴しても解る。彼がイエスより召を受けた時一切を棄て即座に起ち上り主の後に從つた。又私達に聖言が臨む場合にも即刻これを容認することを神は希望し給ふ。又さうして喜び受諾することは正しいのである。『一人の罪ある人悔改めなば天に於て喜びあらん』（ルカ傳一五ノ七）と。同時にキリストを受くるものゝ心にも喜びがあるのである。しかしこの磽地に播かれたる種の譬によつて指摘せられてゐるところのものは、聖言を即刻受けはするがその値を算へないところのものである。彼らは神の言が如何なることを彼らに要求するものであるかに就ては考慮しない。彼らは己が人生經驗の一切を通じて聖言の全き支配に自己を委ぬることをしないものである。

植物の根は深く土壤中に喰入つてゐる。而も表面からはかくれて幹や葉に榮養を送るのである。同樣に基督者も信仰を通しその心靈がキリストとの見えざる結合狀態を保つことにより彼の靈的生涯は保育せられて行くのである。然し玆に表示せられてゐるところの磽地の如き者は、キリストの代りに自己に賴り、己が善行或は衝動に賴り、己を義とする念が强い。彼らは主にありて又その能力によつて堂固になつてゐない。彼らはキリストに屬かざるもの卽ち根なき者である。

灼きつく如き夏の陽は、穀物を成熟せしめはするが、根の深くないものを枯らしてしまふ。『根なきものは』暫時のほどは堪ふるが『御言のために艱難あるひは迫害の起る時は直に躓く』ものである。多くのものは福音を罪より救ひ出すものとはせず、苦難より逃るゝ方便として受け容れる。宗教を信じたがために困難と試練より逃れたと言つて暫くの間は喜ぶ。萬事が圓滑に滯ほりなく行く間に如何にも堅實なる基督者の如くに見える。然し彼らは燃ゆる火の如き誘惑による試みには躓き倒れる。彼らはキリストのために受くるそしりには堪へ得ない。又神の言が彼等の執着せる罪を指摘し、克己と犧牲とを要求する場合、彼らは躓き倒れる。彼らは己の生涯に徹底的變化を來らす努力を惜み之を敢てなし得ない。彼らは現在の不便或は試練をかこち永遠を忘れる。イエスを棄てゝ離れ往ける弟子達の如く『此は甚だしき言なるかな、誰かよく聽き得べき』（ヨハネ傳六ノ六〇）と彼らは叫ぶ。

神に仕ふると表明しながらその實何ら神に對する體驗的知識を所有せぬものが多い。神の聖言を行はんとする彼らの願は單なる自己の願望に過ぎず、聖靈の深刻なる感銘に缺如してゐる。その行爲は神の律法と調和してゐない。彼らはキリストを救主として受けたと公言するが、罪に打勝つ力をキリストが彼らに與へ給ふものとは信じない。又イ

エスとの生ける關係を有つてゐないため、彼らの人格は先天的後天的に缺陷が多い。

聖靈の働きを凡てに於て認め、悔改めを促し給ふ方として受け容るゝことが我らには必要である。多くのものは自分が神より離れてゐることを知悉し、自己と罪そのものに對しては奴隷に等しきものであることを意識してゐる。彼らは之の改善には努力するが、自己を全然十字架に釘けることをしない。又彼らは自己を全くキリストの聖手に委ね神の力によつて聖意を果すことを求めない。彼らは神に似たるものに形造らるゝことを欲まない。概して彼らは自分の缺陷に就ては知つてゐるが、自分の特殊なる罪を放擲することをしない。故に彼らの邪なる行爲はいづれも舊き我慾が頭を擡げ、勢力を恣にしてゐるのである。

彼らにとつて唯一の望みは、ニコデモに對するキリストの言――『汝新に生るべし』（ヨハネ傳三ノ七）『人もし新に生れずば神の國を見ること能はず』（ヨハネ傳三ノ三）――との眞意を自覺するにある。

神への奉仕に一切を投ずることが眞の聖めであつて、これは眞正なるキリスト者としての生涯を送るに必要なる條件である。キリストは何一つとして保留するところなき獻身、全き奉仕を求め給ふ。彼は全心・全靈・全生・全力を以て爲すことを求め給ふ。自己なるものが出てはならない。未だ自己のために生活するやうでは基督者と呼ぶことが出來ない。

愛こそは行爲の主調でなければならない。この愛こそは天地間に懸けられたる神の政府の根底であり、基督者の人格の基礎である。この愛のみが我らを嚴然として立たしむるものであり、この愛のみが我らを試みと誘惑に對抗せしむるものである。又愛は犧牲を通して現される。贖罪の計畫はこの犧牲の裡に立案されたるもので、この犧牲は我ら

の到底測る能はざる程深刻にして高遠なるものである。既にキリストは我らのために一切を捨て給うたのであるからキリストを信受したものはその凡てを贖主のために犧牲とするの用意がなければならぬ。我らはその想ひの凡てを彼への崇めと榮のために傾倒しなければならない。

我らにしてイエスを愛するならば、彼と偕に住み彼と偕に働き、事毎に彼に感謝を捧ぐることを悦びとするであらう。彼のためには、苦痛・辛勞・犧牲をも意としないであらう。我々は彼と偕に人類の救はれんことを熱望し、靈魂に對し彼が感じたと同一の柔しき懇情に動かさるゝであらう。

これがキリストの宗教であつて、こゝまで到達しないものは凡ていつはりである。單なる教理とか弟子たることの表明とかが一つの靈魂すら救はない。我らが全く彼のものとならない限りキリストに屬するものではないのである。信仰生活に於ける中途半端な態度が、彼らを意志薄弱の徒とするのであつて、自己とキリストとの兩道に仕ふることが彼らを磽地に播かれたる種の如き運命に陷らしめ、一朝試みが襲來するとひとたまりもなく之を倒すのである。

茨の中に播かれたる種

『茨の中に播かれしとは御言を聽けども世の心勞と貨財の惑とに御言をふさがれて實らぬものなり。』

屢々福音の種は茨又は有害なる雜草の中に落ちる。人々の心に未だ道德的變化が現れず、舊來の習慣と行爲、罪になづめる前生涯が未だ捨て去られてないとき、種の發芽は阻まれ、荊棘は芽を出し、遂に種を枯死させてしまふ。

故に貴重なる眞理の種を不斷に迎ふる準備をする心にのみ恩寵の生育することを私達は知らねばならない。罪の

荊棘は如何なる土地に於ても格別の手入なくして生長する。一方恩寵に育つためには注意深き手入が肝要である。荊棘はすぐにも延びるものであるから油斷なくこれを取除かねばならない。心が神の支配の下になく、人格の向上と陶冶のため聖靈の絶えざる働がないならば、その者の生涯には必ず奮き習慣が現れて來るものである。口ではいくら福音を信ずると云つたところで、斯く口にする當人が福音によつて潔められてないならば何もならないのである。彼らが罪に勝利しないならば、罪は必ず彼らを征服するのである。一度刈取られた荊棘もその根が引拔かれてゐないならば、迅速にはえ出でゝそのものゝ心を塞ぐのである。

斯くの如くキリストは心靈を危くする事柄に就て注意を與へ給うた。マコの錄したるところによれば、この世の思慮と貨財の惑に關する危險に就て、ルカの記錄によれば、この世の憂慮・富・快樂に就て、注意が與へられてゐる。これらは聖言をさまたげたり、その靈的種の生長を塞ぐのである、榮養をキリストより吸收することを休止するときその心は靈的に死滅するのである。

『此の世の思慮』種々の生活苦と憂慮による試みを受けないものは殆ど稀である。貧しき者にとつて辛勞と喪失又は窮迫に對する恐怖は彼らにとりて當惑であり重荷である。又富める者には富める者で損失・破産の恐怖等々樣々の不安がつきまとうてゐる。又信者は信者で、その多くが野の花を見て學べと仰せ給ひし主の教訓を忘れ勝である。彼らは不斷に主の保護のあることを信じようとはせず、キリストも彼らの重荷を負ひ給はないのである。要する援けと慰めとを求むべく我らをキリストに追ひやるべき苦のこれらの人生の思ひわづらひが、却つてキリストより離らすものとなつてゐる。

當然効果ある奉仕を神になし得べき筈のものが、金儲けのために沒頭してゐる。その結果彼らの全精力は業務上のことに奪はれ、靈的事物には怠り勝となる。聖書に『勤めて怠らず』（ロマ書一二ノ一一）とある如く、我らは我らの助けを要するものゝために應分の働を爲さねばならぬことは論ずる迄もない。基督者は救靈のため働かねばならない。實業に從事することも大切である。又罪を犯すことなくして商賣することもできる。然しともすればこれに從事するものゝ多くは、業務上のことに心奪はれ、祈禱をなし聖書研究をなす餘裕とては更になく、神を求め神に仕ふる時がないやうになる。時たまには心靈の渴きに促されて聖潔と天國とを求める。然し彼らは世俗の騷音より全く離れ得ず、莊嚴にして權威に充てる聖靈の聲を聞き洩して却つて永遠的事物が從屬視され、世俗のことを至上と看做すのである。こんな狀態では聖言の種も世俗的荊棘の榮養となつて生命の實を結びやうがない。

又前者とは全然異つた目的のもとに働きながら同じ禍ひに陷つてゐるものがある。それは精神的方面に働くもので重き責任を帶び繁忙なる生涯を送つてゐる。餘りに忙はしいために祈禱と聖言の研究による神との交りを怠る。彼らはキリストが『汝らわれを離るれば何事をもなし能はず』（ヨハネ傳一五ノ五）と仰せ給ひし事を忘れるのである。キリストを忘れた人生を送るため、彼らの生涯は神の恩寵に缺如し、利己的性癖に支配され、その奉仕は他を凌がんとの欲求によつて汚される。心の全部を全く神の御支配に任せるまでになつてゐないため、粗暴にして醜惡なる姿を現す。以上は基督者が働きに於て失敗する主なる原因であつて、又更に働の効果の擧らない原因でもある。

『貨財の惑』富を愛することには蠱惑的なる欺瞞の力を有つてゐるものである。富める者は彼らに富を得るの力を賜うたものは神であることを忘れる。而して『我が力とわが手の働作によりて我この資財を得たり』（シンメイ記八

ノ一七）と誇言する。その得たる富は毫も神への感謝の念を起さしめず、之を自己への崇めに使用する。彼らは、神に信頼することを忘れ、又同胞に對する義務を怠る。彼らは、その富を神への榮、人類の向上に資すべきタレントとして用ひず、これを私する。人性中に神の品性を發達せしむるの用となさず、惡魔の性質を助長するものとする。斯樣にして折角播かれた聖言の種も荊棘に塞がれて生長を見ることができない。

『世の宴樂』單に自己滿足を快樂中に求むることは危險である。凡て肉體を弱め心意を曇らし靈的知覺を痲痺せしむる習慣は『靈魂に逆らひて戰ふ肉の慾』（ペテロ前書二ノ一一）である。

『各樣の情慾』凡てのものが悉く不必要なもの且つは罪あるものであるといふ譯ではないが、何にても神より彼の心を奪ひ、キリストよりその愛を離らすところのものは心靈の敵なのである。

若き者の心の畑

發育盛りの元氣旺盛なる青年時代には、自己的野心に囚はれんとする强い誘惑がある。動もすると、俗世間的なる仕事の成功に良心を痲痺せしめ、優良なる人格の眞の評價を誤り、眞の道を離れる憂がある。そして環境がこれを助長する場合、神の聖言に逆らひて邪なる方向に趨るものである。

子供達の生涯の構成期に當つて、兩親たるものゝ責任は實に甚大であつて、彼らは、如何にせば青年子女の周圍に正しき感化—彼らに人生の正しき見方と實際の成功に到らしむるところの感化—を以て圍らすべきかに就て研究せねばならない。にも拘らず世上には、子供達の世間的な榮達を第一目的としてゐる親がどれだけあることであらう。そ

れがために選ばるゝ交友もかうした關係方面のものゝみである。多くの父兄は、彼らの家庭を恰も都市生活のそれの如くに營み、子供の前に流行社會を紹介したり、その周圍を俗化と驕慢を助長する感化をもつて包んでゐる。斯くの如き雰圍氣の中に生長せしめた結果は、心も精神も萎微し、人生の高貴なる目的を見失はしめてしまふ。神の子供等として永生の嗣子たるの特權は、俗世間的利害のために交易されてしまふのである。

又親達は、子女の享樂的方面に於ける嗜好に滿足を與ふることによつて彼らを幸福ならしめんとする。彼らが種々の競技に參加し、面白き演藝場に行くことを許し、又外見の虛飾と自己滿足のために金錢を浪費せしむる。然し乍ら斯樣な享樂の欲求はこれを滿せば滿す程强烈なるものとなるのであつて、興味がこの方面のみに集注され、果てはこれが人生の目的であるかの如く考ふるやうになる。遂には懶惰・放縱が習慣性となつて眞面目なるクリスチヤンになれる見込がなくなつてしまふ。

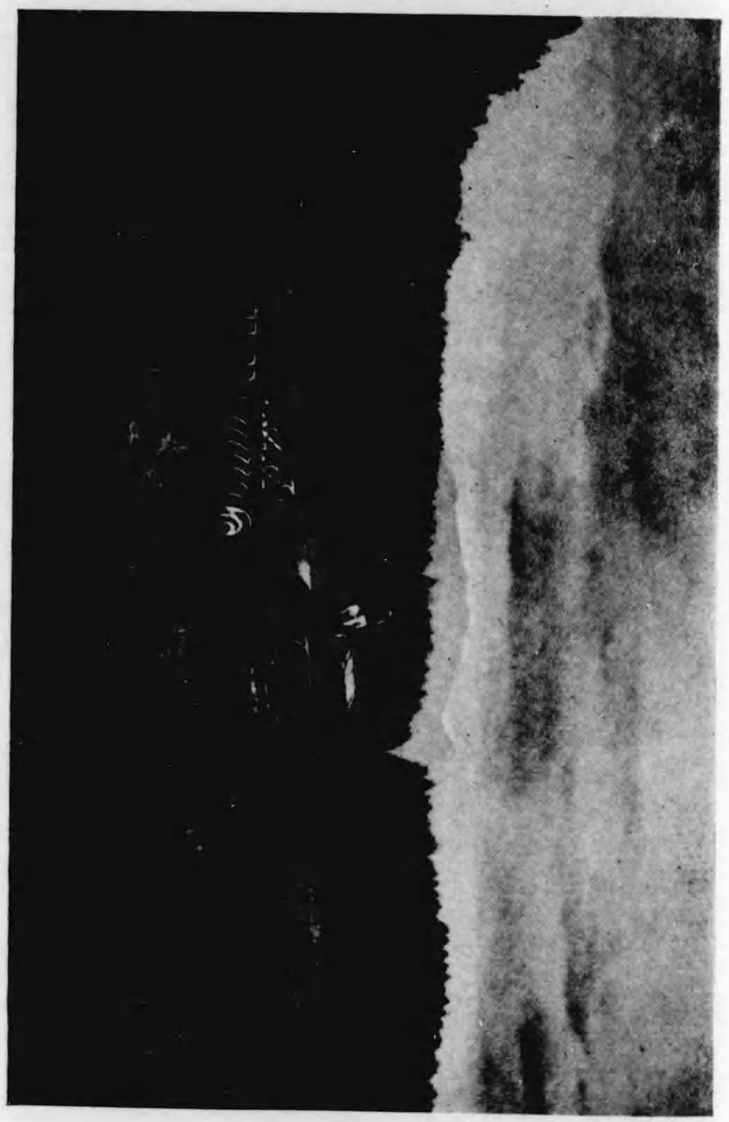
甚だしきに到つては、教會そのものが斯る我慾と享樂化の助長をしてゐる事實は往々にして見受けるところのことである。宗教的目的のために金錢を集める場合、果して今日の世上の諸教會は如何なる方面よりその資源を得てゐるであらうか？——それは云はずも知れたことで、バザー・晩餐會・小間物市・富籤的のことなどからである。それがため樣々の趣向が凝されてゐる。禮拜のために聖別せられたる會堂が、飲食・賣買・娯樂場として瀆されてゐる。その結果として青年子女の心から次第に神の家としての敬畏の念が失はれて行く。彼らの自制心は薄弱に、我儘に、食慾には溺れ、外見の虛飾を競ひ、ます〳〵恣なことを行ふやうになる。

今日の都會は享樂の中心となつてゐる。父兄の多くが子女の便宜のためにと都會生活を選ぶ。然しその結果は失敗

である。而して斯る怖ろしい過誤を改むるには手遅れとなつてしまふ。昨今の都市は愈々ソドム・ゴモラ化し、また休日は懶惰を助長する日とも云ふべく、刺戟の强烈なる競技――芝居・競馬・賭博・酔酒などが種々の慾情を昂進せしめてゐる。實に青年男女は斯る風潮に漂はされつゝある。自己の快樂のみを追求するの結果は、潮の如くに寄來る誘惑への門戸解放となる。彼らは社交上の樂しみ無分別なる宴樂に沒頭してゐる。此の種のことに日を過してゐる朋輩との交際は、彼らの心を陶醉狀態に陷れ、次第に彼らはそれからそれへと放蕩事に耽り、遂には有爲なる生涯を送り得べき良素質と欲求とを失ふに到るのである。ために彼らの宗教的渴仰は全く冷却し、その靈的生命は遲鈍となり、靈的交りをなし得る心靈上の高貴なる機能も低下する。

稀にはその愚を悟りて回心するものもある。神が彼らを赦し給ふには變りはないが、彼らの心靈には傷がつき生涯を通して危險なるものが伴ふのである。善惡を識別するに明敏なるべき彼らの知覺力の過半は害はれ、聖靈の導きを告ぐる聖聲とサタンの囁きとを判斷するに鈍感となつて、屢々危急に際して誘惑に打負け神より離れるのである。斯樣に彼らの享樂追求の生涯は、現世界並びに來るべき世界に於ける破滅となり果るのである。

人間の心中にて演ぜらるゝゲームに於て、サタンは樣々の憂慮・富・享樂などを以て相手方を陷れんとする。故に次の如く警告されてゐる。『なんぢら世をも世にあるものをも愛すな、人もし世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし、凡そ世に在るもの、卽ち肉の慾、眼の慾、所有の誇などは御父より出づるに非ず、世より出づるなり』（ヨハネ第一書二ノ一五、一六）又人の心を知り給ふイエスは『汝等みづから心せよ、恐らくは飲食に耽り、世の煩勞にまとはれて心鈍り、思ひがけぬ時、かの日罠の如く來らん』（ルカ傳二一ノ三四）と仰せ給うた。使徒パウロも聖靈



に感じて『然れど富まんと欲する者は誘惑とわなまた人を滅亡と沈淪とに溺らす愚にして害あるさま〳〵の慾に陷るなり、それ金を愛するはもろ〳〵の惡き事の根なり、或人々これを慕ひて信仰より迷ひ、さま〳〵の痛をもて自ら刺しとほせり』（テモテ前書六ノ九、一〇）と誡めてゐる。

心の準備

種播きの譬全部を通して、播かれし種にかくも相違した結果が生ずるのは、一に土地如何によることをキリストは示し給うた。いづれの場合にも種播く者と種そのものとには變りはないのである。故に神の言が、私達の心なり生涯の上に當然果し得べきことを果し得なかつたとするならば、その原因は我々の側に於て發見さるべきものである。とは云へさうしたことの結果は、私達の支配し得る限りにあらずと云ふ譯のものではない。私達が如何なるものになり變化せしめ得ないことは事實であるけれども、選擇能力は私達のものである。そして私達は自分で自分を得るかの決定は、私達の良心の運用次第である。よしそれが路傍・礫地・茨地そのものであつても、さうした狀態に何時までも止つてゐなければならぬと云ふ譯はない。絶えず神の聖靈は、人々の世俗的なる思ひと迷夢とを打破し永遠の富に對する欲求を喚起してゐる。もと〳〵人々が聖靈を拒んだことの結果として、彼らは神の言に冷淡・無關心となつたのである。故にその心を頑にし、良き種の根を下すことを障げ生長を阻むところの邪惡の發生に對する責任はその人にあるのである。

心の園は充分に耕されなければならない。罪に對する深刻なる痛悔によつて土地は碎かれ、惡魔的毒草は引拔かれ

る。一旦荊棘を一面に蔓らせた土地は、これを取戻すには餘程の努力を要する。と同様、性來なる心の惡しき傾向もイエスの聖名と聖力とによる熱心なる努力によらなければ、之を根絶することは六ケ敷い。神は豫言者によつて『汝らの新田を耕せ、荊棘の中に種く勿れ』（エレミヤ記四ノ三）『なんぢら義を生ずるために種をまき、憐憫にしたがひてかりとれ』（ホゼア書一〇ノ一二）と仰せ給うてゐる。神はこのことを我らの裏に成し遂げんがために招き、かつ私達の協力を求め給うてゐるのである。

種播く者には、彼の傳ふる福音の信受を容易ならしむるため爲すべき準備事業がある。聖言の奉仕に依て說教のみに主力を盡すことは、却つて人心に觸れざらしむるおそれがある。迷ひ出でたる靈魂に對する個人的努力が肝要である。キリストの有ち給ひしと同じ同情の念を以て個人的に人々に近づき、永生の大事業に對する彼らの興味を喚起することに努力しなければならない。よしんば彼らの心が踏み堅められたる道路の如くであつても、一見救主を彼らに紹介することは無駄である如くに感ぜらるゝ場合にも、理論を以てしては彼らを動かす能はず、彼らに感銘を與ふる力なき時にも、個人的奉仕に現れたるキリストの愛は、如上の如き人々の心を和げ、眞理の種はその根を下し得るのである。

種播く者は、自分の播いた種が荊棘に蔽はれ、或は地淺きために忽ち枯死する如きことなきやうに十分に手入をせねばならない。信仰生活の出發に於て、彼らに根本原則を明かにさるゝと共に、單にキリストの犧牲によつて救はれたと云ふだけではなく、キリストの生涯を己の生涯となし、キリストの品性を己の品性となすべき召を蒙つてゐることを知らしめなければならない。又彼らには責任を擔ふの傍ら、己が性來の傾向を拒否することを學ばしめ、彼らを

してキリストのために働くことの如何に幸あるものであるかを經驗せしむると共に、克己の道を歩み、キリストの精兵卒として樣々の苦難を忍ばしめねばならない。又キリストの愛に賴ること、凡ての思ひ煩ひを彼に委ねることを實驗せしむると共に、救靈の喜びを味はしめ、迷へる者を探ぬるの愛心に自己を忘れしむるに到らしめねばならない。さうするならば、此の世の享樂に對する愛念は頓に力を失ひ、思ひ煩ひは消え、眞理の鋤は從來放置されたる土地を掘り返し、たゞに荊棘の上部を切取るのみでなく、根元よりこれを引拔き去るに到るのである。

良き地に播かれし種

種播く者もあながち失望することばかりではない。良き地に播かれたる種に就てイエスは仰せ給うた。『良き地に播かれしとは、御言を聽きて悟り、實を結びて、或は百倍、或は六十倍、或は三十倍に至るものなり。』『良き地におちしは正しくかつ善き心にて道を聽きこれを守り忍びて實を結ぶものなり』と。

『正しくかつ善き心』と言つても、福音は失はれし者に宣傳へられるのであるから、何も罪のない心を指すものではない。キリストも『我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて來れり』（マルコ傳二ノ一七）之は聖靈に信服する正しき心の持主を指し、己の罪を告白し、神の慈悲と愛とを必要とする心である。又眞理に接し、これに服從したいとの眞面目な願望を抱いてゐるものである。よき心とは聖言に信を措く信仰心を指すものであつて、信仰なくして聖言を受け容れることはできないのである。『そは神に來る者は神の在すことゝ神の己を求むる者に報ひ給ふことを必ず信ずべければなり』（ヘブル書一一ノ六）

『これ教を聽きて悟るもの』である。キリスト時代に於けるパリサイ人は、故意に眼あれど見ず、耳あれど聽かずとの態度を取つたので、折角の眞理も彼らの心には觸れなかつた。實に彼らは頑迷固陋でそのため却つて自家撞着に陷つてゐた。キリストは心を啓き教を受け、直ちに之を信じたる弟子達に對し、汝らの眼は見、汝らの耳は聽くが故に福なりと仰せ給うた。

このよき地なる心の持主は、聖言を『人の道とせず神の道』（テサロニケ前書二ノ一三）として承認するもので、この如く聖言を神の御聲として受くる者のみが眞に學ぶものである。彼は聖言の眞實さに打たれ、己の悟を啓き之を心に受け容れる。斯くの如き人々の好實例としては、使徒ペテロに『いま我等はみな主のなんぢに命じ給ひし凡てのことを聽かんとて神の前に在り』（シトギヤウ傳一〇ノ三三）と述べたるコルネリオと彼の友人などはそれである。

眞理の理解如何は、推理能力の多寡と云ふよりも寧ろ純眞なる目的の有無・單純・熱切なる信仰の有無に依るものである。謙虛なる心でもつて神の指導を求むるものに對して天使はいと近くに來り奉仕するのである。而して聖靈は凡ての人に對して盡きざる眞理の富を與へ給ふのである。

又よき地の持主とは、聖言を聽くのみならず之を守るものであつて、斯るものにはサタンと其の部下は如何ともすることができないのである。

故にたゞ聖書を讀み之を聽くだけが能ではない。聖言から何か手答のあるものを見出すまで熟讀研究して、啓示されたる眞理を充分に瞑想し、熱心に之を記憶し、祈り深き考へを抱きつゝ聖言の眞意を探り、その眞意のあるところを充分に摑まねばならない。神は我らがその心を雄大・純眞なる思想でもつて溢らすことを要求し給うてゐる。且彼

の愛と慈悲とを瞑想することにより、偉大なる贖罪の業に就て深く學ぶことを欲み給うてゐる。然爲すときに眞理に對する認識は愈々明瞭となる。又心の思ひを潔く明かにせんとの我らの欲求も愈々聖化せられる。斯樣に聖く且つ純なる思想の雰圍氣中に育つ靈魂は、聖言の研究・神との交りによつて愈々更新されるのである。

『實を結ぶ』聖言をきゝこれを守るものは服從の實を結ぶ。聖言が心中に宿るとき、それは必然と善き行となつて現れる。その結果は、キリストの如き芳しき品性が生涯となつて現される。キリストは『わが神よわれは聖意にしたがふことを樂しむ、なんぢの法はわが心のうちにあり』（シヘン四〇ノ八）『わが意を求めずして、我れを遣し給ひし者の御意を求むるに因る』（ヨハネ傳五ノ三〇）と仰せ給うた。又『彼に居ると云ふ者は彼の歩み給ひし如く自ら歩むべき也』（ヨハネ第一書二ノ一六）と言つてゐる。

屢々神の言は、所謂人間の遺傳・性行・習慣と衝突することがある。然しその心がよき畑となつてゐるものは聖言を受くるに當つても、啓示された一切の要求條件を承認する。習慣と行爲の凡てを擧げて聖言の命ずるまゝに行ひ、人には限りがあり過ち易きものとして、無限の神の聖言に凡てを委ね、一筋に永生を求め、よし如何なる犧牲――迫害・死に出會つても、これを怖れずこれを意とせず眞理に從ふものである。

『堪へ忍びて』實を結ぶ。聖言を信受したからと云つて、必ずしも困難と試探から免れ得る譯ではないが、然し艱難が臨んだからと云つて、眞のクリスチヤンは心を動搖したり疑惑を抱いたり落膽したりはしない。前途に對し確たる見込を附くる能はず、神の御攝理御目的の那邊にあるかを認め得るに到らぬ場合にも、敢て神に對する信賴を放棄するが如きことをしない。柔しき慈愛の主を憶え、凡ての思ひ煩ひを委ね、忍耐しつゝ彼の救を待つ。

斯くの如き闘を通して我らの靈性は强められ、襲ひ來る樣々の試練に堪ふるとき、我らの性格は一層堅實に一層優雅にせられる。而して全き信仰の實とも云ふべき愛と柔和の德は樣々の試練と逆境を經て鍛練せられるのである。

『兄弟よ主の來り給ふまで耐忍べ、視よ農夫は地の貴き實を前と後の雨を得るまで耐忍びて待つなり』（ヤコブ書五ノ七）これと同じくクリスチヤンも、聖言が彼の生涯の裡に實現するの日を忍び待つべきである。屢々聖靈による樣々の恩惠を祈り求める場合、之に神が答へて如上の實を生ぜしむべき境遇に置き給ふとき、彼の御目的を悟らず、我らは周章狼狽するものである。然し如上の過程を經、結實なくしては何人もかゝる德性を具有することができないのである。我らのなすべき分はこれである。卽ち聖言を信受し、確く保ち、全くそれの御支配に仕せることである。その時神の目的は我らの裡に成就するのである。

『人若しわれを愛せば我が言を守らん、わが父之を愛し、且我等その許にきたりて住處を之とともにせん』（ヨハネ傳一四ノ二三）とキリストは仰せ給うた。斯くして我らは全能力と關係を有つに到るのである。其時、云ふべからざる强き魅力・完き意志が我々の上に臨み、我らの生涯は全然イエス・キリストの裡に同化したるものとなるのである。爾後我らは世俗の我慾なる生涯を送ることなく、キリスト我に在りて生くるに到るのである。而して主キリストの品性は我らの裡に實現し『或は百倍、或は六十倍、或は三十倍』の聖靈の實を結ぶやうになるのである。

第二章　神の力による生長

—マルコ傳四ノ二六—二九に基く—

初に苗、次には穗

種播の譬は樣々の疑惑を起さしめた。聽衆中にはキリストが地上的王國を建設し給はぬことを知り、奇異に思ふ者當惑する者も多かつた。キリストは彼等が當惑してゐることを知り、更に他の譬によりて彼等が世の王國に對する迷夢より醒め、心靈に働く神の恩惠を認むるに至らしめんと圖られた。

『また曰ひ給ふ「神の國は或人種を地に播くが如し、日夜起臥するほどに種はえいでて育てども其の故を知らず、地は自から實を結ぶものにして、初には苗、つぎに穗、つひに穗の中に充ち足れる穀なる、實、熟れば直ちに鎌を入る、收穫時の到れるなり」』（マルコ傳四ノ二六—二九）

『收穫時』に『鎌を入るゝ』農夫とは、勿論キリストに代りて働く人々を意味する。『種は育てども其の然る故を知はキリストである。然し此處の種播く者とはキリストをおいて他にない。最後の大なる日に地の收穫をなし給ふ者らず』とある點から見ても神の子キリストを指すものでないことが明かである。彼は決してその任務を等閑にして微睡み給ふ如き方ではない。彼は日夜看守り給うてゐるのであつて、種が如何に生長するかを知り給はぬ方ではない。

種播きの譬は自然界に於ける神の働きを說明するのである。種の中には神御自身の扶植し給うた發芽の要素があ

る。とは云へそのまゝに放置するならば發芽しない。種の發芽を促進するためには農夫としての分は盡さなければならない。之がため土地を準備して、之に施肥し、種を播かねばならぬ。彼は田畑を能く耕作しなくてはならない。それでも尙到底人力の及ばぬところがある。如何なる智慧と能力を以てしても人は種より生ける植物を發生せしむることはできない。人はありたけの努力をして後は、種を播いた時から收穫に到る迄驚くべき工をなし給ふ全能の力に依頼せねばならない。

成る程種の中には生命があり、土地には力がある。それにしても無限の力が日夜これに働かないならば種より實が發生しない。又乾ける地を霑すためには雨も必要であり、之に太陽の熱を與へ、地中に埋れた種には電氣が通じなければならない。造化の神が扶植し給へる生命に對しては唯神のみが之を呼び起こし給ふのである。種の萠芽、植物の生長、凡ては神の力による。

『地は芽を出だし畑は播けるものを生ずるが如く主ヱホバは義と譽とをもろ〳〵の國のまへに生ぜしめ給ふべし』（イザヤ書六一ノ一一）と。自然界に於けると同樣、靈界に於いて眞理を宣傳するものも、人々の心の大地を耕しそれに眞理の種を播かねばならない。とは云ふものゝ生命を發生せしむる力は神より來るものであつて人力を以てしては如何ともなし得ない。人々に聖言を傳へても、人の心を更へ、之を義とし、讃美の聲を出さしむるのは人ではない聖言を傳ふるに當つても人力以上の働きが必要である。聖靈の能力によつてのみ宣べ傳へらるゝ聖言は活ける力あるものとなり、人心を新にし永生に到らしむる。この事實をキリストは弟子達に明かにし給うた。彼等の所有する能力が働きを成功せしめるものでなく、神の不思議な能力が聖言の上に力を現すのである。

種を播くことは一の信仰行爲である。一般農夫は種の發芽・成長の奧義に就ては理解し得ぬながらも、神がこれらの作物を種々の方法によつて繁茂せしめ給ふことを信ずるのである。農夫が種を畠の中に播くのは恰もその家族の食料となるべき貴重なる穀物を投げ棄てるにも等しいものである。然し乍ら彼はやがてそれが多くのものとなつて歸り來ることを信じて、最もよく實つた種を投げ棄てるのである。即ち後日その幾十倍ともなるべき豐かな收穫を見込んで種を投げ棄てるのである。同樣キリストに從ふものは外見無駄働きのやうに見えても、人の心に播きたる種の收穫を期待しつゝ働くべきである。

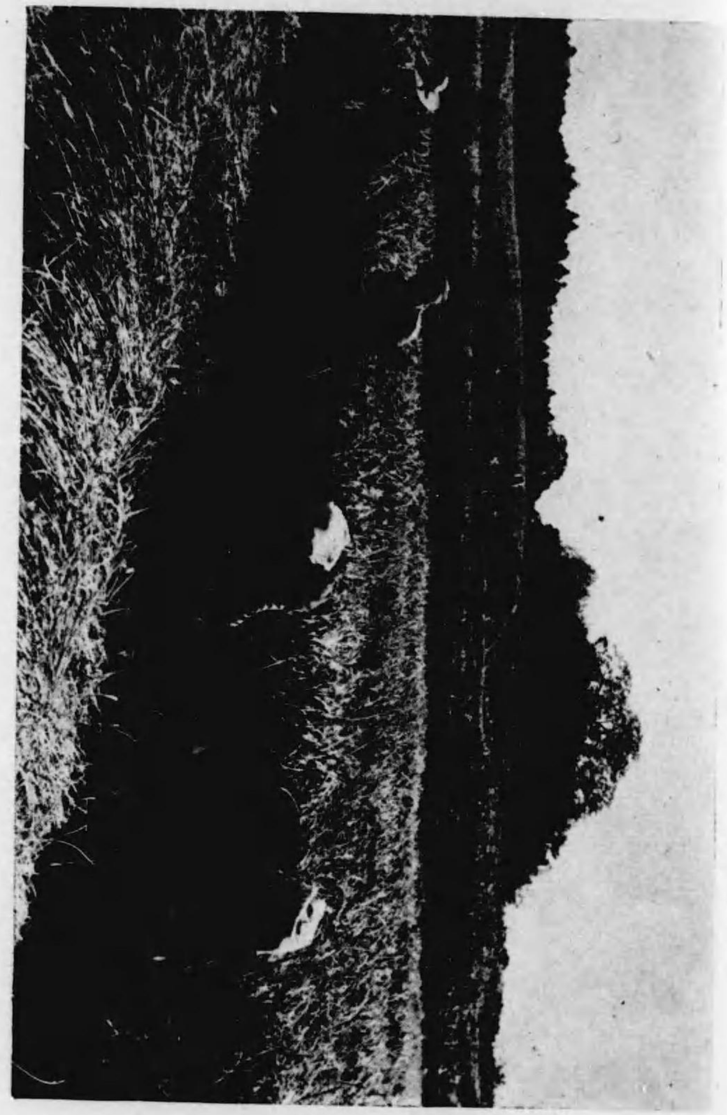
播かれし良き種も暫時の間は世俗的にして、冷淡・我慾なる者の心の中に置かれ、一向に根を下した模樣も見せない事があるが、やがて神の靈が彼の心中に働くや、埋れし種は萠芽し、遂に神の榮のために實を結ぶに至るのである播きたる種の中よくなるものは此であるか彼であるか解らない。元來さうしたことは我々の判斷すべき問題ではないのである。我々としては己が分を盡しその結果を神に委ぬればよいのである。聖書には『汝朝に種を播け夕にも手を休むる勿れ』（傳道の書一一ノ六）とある。又『地のあらん限りは播種時、收穫時……やむことあらじ』（創世記八ノ二二）と神は契約を爲し給うてゐる。斯る約束を信じて農夫は田を耕し種を播くのである。靈的の種播きも之と同じ道理で『かくわが口よりいづる言もむなしくは我に歸らず、わが命じ遣りしことを果さん』（イザヤ書五五ノ一一）『その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど束をたづさへ喜びて歸り來らん』（ンヘン一二六ノ六）との約束を信じて働くべきである。

種の發芽は靈的生活の開始を示めし、作物の成長は信仰生涯に於ける美しき發達狀態を表す。自然界に於けると同

様恩惠界に於いても成長なくして生命はあり得ない。默々の裡に草木は氣づかぬ間に成長して往くが如く、人の信仰發達もこれと同じ理に據るのである。即ち成長の階程に於いて次第に我々の生涯は完うせられ、神の御目的は成就し不斷の發達が見れらるのである。聖別は畢生の事業である。樣々の事物に面接する毎に、經驗は擴大され知識は增大する。而して次第に重き責任を荷ひ得るものとなり、老成圓熟する。

草木はその生命を支ふるために天與の榮養を受けて成長するのである。又根を下し日光と雨露に浴し、空中よりも生命維持に要するものを攝取する。基督者も同樣で、神の備へ給ふものとの協力によつて成長するのである。自己の無力を感じつゝより完き經驗に至り、凡ゆる機會を捉へて進步發達しなければならない。恰も草木が地下に根を下すと同樣、我々もキリストの中に深く〳〵信仰の根を下さねばならない。草木が日光と雨露に浴しつゝ育つと同樣、我〻も聖靈をうくるため心を廣く開かねばならない。而もこの事は『權勢に由らず能力に由らず我靈により』（ゼカリヤ書四ノ六）て行はれるのである。心を全くキリストに傾注するとき彼は『雨のごとくわれらにのぞみ、後の雨のごとく地をうるほす』（ホゼヤ書六ノ三）義の太陽の如く『翼には醫す力をそなへ』（マラキ書四ノ二）て我等の上に臨み『百合の如く育ち』『穀物の如く活きかへり葡萄の樹の如く花さく』（ホゼヤ書一四ノ五、七）に至るのである個人的救主としてのキリストを我等が絶えず仰ぐ事により、凡ての事に育ちて首なる彼と同じ像に變るのである。

『初に苗、つぎに穗いで、穗の中に熟したる穀結ぶ』と。凡ての作物はこの順序で成長する。一般農夫が種を播き作物の手入れするのも、要するに穀物の收穫を期待するからである。彼等は飢を充たすためにパンを求め、前途の收穫を豫期して種を播く。眞の農夫に在す神も己が犧牲・勞苦に對する收穫を期待し給ふ。キリストは凡ての人々の心



收穫

の中に己が像の再生せんことを求め給ふのみならず、凡て信ずる者の中に之を實現し給うてゐるのである。信仰生涯にとつて主眼とするところは實を結ぶことである。即ち信徒の生涯にキリストの品性が再現することであつて、更にまたこれがそのものから他の者にまで及ぶのである。

草木それ自體では發芽も結實も不可能であるが、『播く者に種を與へ、食ふ者に糧をあたふる』（イザヤ書五五ノ一〇）事は可能である。同様基督者も世にありては基督の代表として人々の救のために働かねばならない。

自己中心の生涯には生命も結實もあり得ない。我々はキリストを個人的救主として信受するとき、我を忘れて人々を助ける様になる。我等はキリストの愛と慈悲とに就て語り、各自に負はせられたる凡ての責務を果し、心中には救靈の重荷を感じ、亡び往く人々のために力の及ぶ限り働かねばならない。我々が他人の爲に働くと云ふ精神、即ちキリストの精神に生るならば自然に成長して實を結ぶのである。さうして我等の品性に聖靈の實が實り、信仰は擴大せられ靈感的となり、その愛は全うせられるのである。而して凡ての潔よきこと貴ぶべきこと愛すべことに於いて次第にキリストに似るに到るのである。

『靈の果は、愛・喜悅・平和・寛容・仁慈・善良・忠信・柔和・節制』（ガラテヤ書五ノ二二、二三）である。これらの實は決して滅び失することなく、夫々永生に到る收穫を見るのである。

『實れば直に鎌を入る、收穫時の到れるなり』と。現にキリストは教會内に自己を顯さんと熱望し給うてゐる。キリストの人格が全く其の民の裡に實現するに到つた時、彼等を己がものとして享けんが爲に主は來り給ふのである。

基督者にとつて主を待望するのみならず、再臨を速かにするため働くことは此上もない特權である。（ペテロ後書

三ノ一二）信徒が擧つてキリストの御榮のために實を結ぶとき、如何に速かに全世界に福音の種が播かれ、最後の大收穫が得られることであらう。かゝる貴き實を聚めんとしてキリストはまもなく再臨し給ふのである。

第三章　播かれたる毒麥

—マタイ傳一三ノ二四—三〇、三七—四三に基く—

『また他の譬を示して言ひたまふ、「天國は良き種を畑にまく人々の如し、人々の眠れる間に仇きたりて麥のなかに毒麥を播きて去りぬ。苗はえ出でゝ實りたるとき毒麥もあらはる……」』（マタイ傳一三ノ二四—二六）

『畑は世界なり』と、これは全世界に於けるキリストの教會を意味するものなることを知らねばならない。この譬は神の國と人類の救に關する記述であり、從つて教會を通して成就するものである。全世界何處でも聖靈は人々の心中に活躍し給うてゐる。然しこれが神の庫に收められるゝために成長ち熟るのは教會に於てである。

『良き種を播く者は人の子なり……良き種は天國の子どもなり、毒麥は惡しき者の子どもなり』（マタイ傳一三ノ三八）と。この良き種は神の言——眞理によりて生るゝものを代表し、毒麥は誤謬と虛僞より生じたるものゝ一群である。

『之を播きし仇は惡魔なり』と言はれてゐる。毒麥を發生するやうな種の播き手は神でも天使でもない。毒麥は常に神と人との仇なるサタンによつて播かれるのである。

昔東方に於ては時折そつと人々が敵の畑に復讐のため毒麥の種を播き散らした。それが發芽成長中は小麥に酷似してゐるが、生え出づると、收穫を害ひ畑の持主に迷惑をかけ損失を蒙らせるのであつた。同樣にサタンはキリストに對する怨恨から天國の良き穀物の間に惡き種を播き散す。彼は自分で播いて置きながら其の結果を神の子キリストに

負はせるのである。惡魔は教會内に、キリストの名を呼びながら内實その品性によつて之を拒むものを入れ込ませ、之によつて神の聖名を汚し、救の計畫を誤解し、多くの心靈を危地に陷れてゐるのである。

キリストの誠實なる僕達は教會内に眞實と僞りの信者の混入せるを見て憂へる。彼等は教會を潔めるために何事かを爲さねばならぬと考へる。譬にある家主の僕の如く毒麥を根絶せんとして焦慮する。然るにキリストは彼等に『いなおそらくは毒麥を拔き集めんとて、麥をもともに拔かん、兩つながら收穫まで育つにまかせよ』（マタイ傳一三ノ二九、三〇上句）と仰せ給ふのである。

キリストは公然罪を固執するものを教會より分てと教へ給うた。然し人々の品性と動機まで審けとは命じ給はなかつた。我々の眼に僞信者と見ゆるものを教會より根絶せんと試むる如きことがあるならば、必ずや失策を仕でかすに相違ない。往々にして我々は、キリストが自分に惹き寄せ給うてゐるものをば見込のないもの丶如く見做すことがある。我々の不完全なる判斷を以て彼等を處置する場合、或は彼等の最後の望を滅却するかも知れぬのである。如何にも自分では基督者であると自信しながら、最後の審判の日に己の足らぬことを發見するものが多いであらう。人は外見を審き神は内心を審く。毒麥と小麥何れも收穫の時まで成長させる。而して收穫とは最後の時卽ち恩惠の期間の終りを意味するものである。

イエスの聖言の中には尙一つの教訓――卽ち驚くべき忍びと柔しき愛の教訓とがある。毒麥が根のところでしつかり良き麥と絡みあつてゐた如く、教會内の僞兄弟も確と他の兄弟達とつながつてゐる。僞兄弟の正體は未だ顯る丶に到つてゐない。か丶る者が教會から除外せらる丶時は、最後まで信仰に踏み止り得るものが、たゞこの一事のために

躓くかも知れないのである。

人と天使達に對する神御自身のあしらひがこの譬でもつてよく說明されてゐる。サタンは僞り者である。天上で罪を犯した時、天使達ですら彼の眞相を看破することができなかつた。神が立所にサタンを滅し給はなかつたのは斯うした意味からである。萬一神が斯くの如きことを斷行し給うたならば、天使達は神の義と愛とを認め得ずに終つたであらう。神の恩惠を疑ふことは罪と悲しみの果を結ぶ惡の種にも等しい。この理由から惡の創造者なるサタンは或る時期の間容赦され、充分にその本性を發揮するの機會を與へられた。神は永き歲月に亘り罪惡の展開を眺め聖旨を痛め給うた。遂にカルバリーに於ける無限の賜を與へ給ふことになり、被造物がサタンの誤表に瞞着さるゝことなからしめんと欲まれた。それは毒麥の根絶には貴重なる穀物を引拔くの危險を冒さずしては仲々六ケ敷いからであつた故に我々も天地の主がサタンに對し給うた如くに僞兄弟に對して忍耐を持たねばならない。

教會内につまらない信者があるからと云つてキリスト教の眞理そのものまで疑ふ必要はないのである。例へば初代教會はどうであつたらうか？　アナニヤとサツピラとは弟子達の仲間に加はつてゐた。シモン・メガスもバプテスマを受け、パウロを捨てたデマスも信者の中に數へられてゐた。イスカリオテのユダは十二使徒の一人であつた。イエスは唯一つの靈魂すらこれを失ふことを望み給はぬのであつて、彼對ユダの經驗はねぢくれた人間性に對する永き忍びを表示し、彼の忍びし如く忍べと我等に命ずるものである。彼は世の終まで教會内に僞兄弟の混入は免れ難いことを教へ給うたのである。

然るにキリストの斯る警告にも拘らず、人々は毒麥を根こそぎにせんとし、教會は、一見惡を爲す如く思惟さる丶

ものを處斷せんとて遂に教會が政權を用ふるやうになつた。斯くて既定の教理と異つたる見解を抱くものはキリストの是認し給へることを行つたまでゝあると揚言せる厚顏無恥なる輩のため獄に投ぜられ、或は拷問、死に處せられ、宗教裁判に附せられた。斯る行動に出しめたる精神はサタンより出たものでキリストの精神ではない。卽ち世を己の支配の下に置かんとするサタンに動かされて行はれたるものである。而も教會が異端者と看做せる者達に對する斯くの如き措置を執りたるために神は誤解されるに至つたのである。

この譬によつてキリストは他人を審いたり非議したりせず、己を卑うし自己信賴に陷らぬやう戒め給うた。畑に播かれた凡てが良き種とは云へないやうに、教會に籍のあることが必ずしも基督者の證明とはなり得ない。

莖の青い間は毒麥も殆ど他の小麥と見まがふ程である。然し乍ら愈々收穫が近づき畑一面が黃金色になつたとき、この無用な雜草は、熟した穗の重みで垂れ下つてゐる小麥の如く裝ふことは六ケ敷い。敬虔そのものゝ如く裝ふ罪人も、暫時の間は眞實なる基督者の群に伍し、キリスト教の假面を冠つて多くのものを欺いてゐるが、收穫の時—この世の終りには善惡間の區別と差異が判然となり、教會に加はつてゐながらキリストと一致しなかつた人々が暴露するのである。

毒麥も小麥の間に生長し、小麥と同じく太陽や雨に浴することを容された。然し收穫の時には『なんぢらは更にまた義しき者と惡しき者と神に服事ふる者と事へざる者との區別を知らん』（マラキ書三ノ一八）とのことが事實となる。天の家族と偕に住むの價値ある者を決定し給ふは主御自身であり、主は各々の言行によつて審き給ふのである。單なる告白だけでは何ら役に立たない。人の運命を定むるものは其の者の人格卽ち品性である。

キリストは毒麥が悉く小麥と化する時に就ては豫表し給うてゐない。毒麥と小麥とは收穫まで卽ち世の終まで共共成長する。然る後毒麥は束ねて火に焚かれ、麥は神の庫に收められる。『義人は父の御國にて日のごとく輝かん』（マタイ傳一三ノ四三）が、惡しき者に對しては『人の子、その使たちを遣さん、彼ら御國の中より凡ての顚躓となる物と不法をなす者とを集めて、火の爐に投げいるべし、そこにて哀哭、切齒することあらん』（マタイ傳一三ノ四一、四二）と仰せになつてゐる。

第四章　一粒の芥種

—マタイ傳一三ノ三一、三二、マルコ傳四ノ三〇—三二、ルカ傳一三ノ一八、一九に基く—

キリストの教に耳を傾けてゐた群衆中には多數のパリサイ人がゐた。彼等は群衆中イエスをメシヤと認むるものが極めて少ない樣を見て心秘かにイエスを侮蔑してゐた。彼等は見たところあまり見榮えのせぬ教師が如何にしてイスラエルを世界大になし得るか、又何ら權力・富・地位などを有たぬ彼が如何にして新しい王國を建設し得るであらうかとの疑念に包まれてゐた。キリストは彼等の心中を看破し、次の如く譬により答へ給うた。

『われら神の國を何に比へ如何なる譬をもて示さん?』と。如何なる地上の政府を以てしてもこれに比へ得るものなく、如何なる國家を以てしても彼を表徵し得るものはないのである。故に『一粒の芥種のごとし、地に播くときは世にある萬の種より小けれど、既に播きて生え出づれば萬の野菜よりは大きく、かつ大なる枝を出して空の鳥その蔭に棲み得るほどになるなり』（マタイ傳一三ノ三一、三二、マルコ傳四ノ三〇—三一、ルカ傳一三ノ一八、一九）とキリストは仰せ給うた。

種にある胚種は神より出でし生命力の展開につれて生長するが、その生長發達は何ら人間の能力に據らない。キリストが建て給はんとする聖國に於ても同一である。新創造そのものである。それの發展し行く原理は世上の國々を支配してゐる權力とは雲泥の差である。地上の諸政府は人によつて樹立せられ、いざと云へば戰爭となる。然し乍らこ

の新王國の創造者は平和の君である。聖書には地上の國々を樣々の猛き獸で象表してあるが、キリストのことは『世の罪を仕ふ神の羔』（ヨハネ傳一ノ二九）を以て表してゐる。又その國の施政方針には何ら良心を抑壓する如き暴力行爲を含まない。然るにユダヤ人は神の國が世上の國々と同一の方法で樹立せらるゝものと考へ、正義を助長せんとして却つて極端に走り種々と手段を弄した。これに反しキリストは、先づ唯一つの原則——卽ち眞理と正義とを扶植することによつて誤謬と罪惡とを斥け給うた。

イエスが此の比喩を語り給うてゐるとき、其處此處に芥種が草や穀物などよりはずつと高く延び、枝が風に輕く搖れてゐた。鳥は枝から枝に飛び移りその茂みの中で囀つてゐた。斯樣にまで大きなものにした種も因をたゞせば凡ゆる種の中で一番小さい種である。最初それから柔かい嫩芽が出る。その强い活力は之を成長・繁茂せしめ遂に巨大なものにするのである。キリストが建て給ふ國も、その當初は實に卑小な微々たるもので、之を地上の國々と比較するならばその中でも一番弱小なものとしか思はれず、世上の支配者達にはキリストの王權の主張の如きは笑ふべきことにしか考へられないであらうが、この福音的王國に於てキリストを信ずるものに與へらるゝ偉大なる眞理には生命がある。而して如何に急速にそれが發達・成長し、如何に廣汎なる範圍にまでそれの感化が及んだことであらう。

キリストが此の比喩を語り給うてゐたとき、その新王國を代表するものは、ほんの數名のガリラヤ生れの賤民であつた。彼等の貧困であることその數が少いことなどが、イエスに從へる質朴なる漁民達と行動を共にすべからざる理由とせられた。然るに芥種は生長發達して遂にその枝は世界の四方に擴がるに至つた。暫時の間榮華を競ひ人の誇となれる地上の國々も、遂には滅ぶべき運命にあるが、キリストの王國は之等と到底比較すべからざる權威と偉大さと

を以て樹立し、かつ永遠に續くのである。

人の心中に於て行はるゝ福音の働きも最初は實に微々たるものである。たつた一言葉、一條の微かなる眞理の輝き新生の開始となるべきほんの些々たる感化が心中に投ぜらるゝに過ぎない。然しそれの及ぶ感化は到底測り得べくもない。

以上述べたる如き神の國の生長が芥種の譬によつて說明せられてゐるのみならず、それの生長に伴ふ凡ての過程並びに段階がこの同じ譬で繰返されてゐる。神は各時代の教會に對して夫々特殊の眞理と使命とを與へ給うた。世の智きもの慧きものに秘められたる眞理が嬰兒の如き謙遜なるものに顯された。然し乍ら彼等には自己犧牲が要求せられ苦鬪と勝利とが必要とされた。斯る特種眞理の宣布と發表に當るものは極めて小數であつた。世上の勢力ある人物又は俗化せる教會は之に侮蔑と迫害とを加へた。例へばかのキリストの先驅者たるバプテスマのヨハネが唯獨り立ちてユダヤ國民の倨傲と形式化を譴責したる如き、二人の天幕職工パウロとシラスが他の一行と偕にトロアスよりピリピを指して船出したる如き、一見それはかゝる見込のない人氣に乏しい門出であつたらう。又『老年のパウロ』が鐵鎖につながれつゝカイザルの營内にてキリストを傳へたる時の如き、少數の農民と奴隸とが羅馬帝國の異教主義と戰ひたる時の如き、マルチン・ルーテルが、當時この世の智慧にかけては比類なき勢力ある教會に對抗し神の言を堅く保ち、帝王と法王に對し『我玆に立てり、我このほか何をも爲す能はず神はわが助け也』と斷言せし時の如き、又ジョン・ウエスレーが當時の形式主義、感覺主義、無神主義の瀰蔓せる只中にあつてキリストと其の義とを斷々乎と高調せし時の如き、異教國の悲慘なる狀態に痛く責任を感じたる一人が、愛によるキリストの使命傳達に對する特權の與

へられんことを請願したる時、『若者よ坐せ、神が異教徒の回心を希望し給ふ場合、汝等如きものゝ助けを要し給はない』と教權主義者より冷然と遇せられし時の如きはそれである。

現代の勢力ある宗教家達が、眞理の種播きに從事せる宗祖を記念し之を崇むることには熱心であるが、この同一種子より生じたるものを蹂躙するの矛盾に陷つてはゐないか。『モーセに神の語り給ひしことを知れど此の人（神より遣されたる使命者）の何處よりかを知らず』（ヨハネ傳九ノ二九）と云つた樣な叫びが依然繰り返されてゐる。昔時と同じく現代に對する特殊眞理も、教權の中には見出されずして、さしたる知識なきも聖言を熱烈に信受するものゝ中に見出さるゝのも同じ理由からである。

『兄弟よ、召を蒙れる汝らを視よ、肉によれる智きもの多からず、能あるものおほからず、貴きもの多からず、されど神は智き者を辱しめんとて世の愚なるものを選び、强き者を辱かしめんとて弱き者を選び、有る者を滅さんとて世の卑しきもの輕んぜらるゝもの卽ち無きが如き者を選び給へり』（コリント前書一ノ二六—二八）『これなんぢらの信仰の人の智慧に由らず、神の能に賴らん爲なり』（コリント前書二ノ五）と使徒も言つてゐる。

事實この終末時代に於て芥種の比喩は素晴しきまでの勝利ある成就を見た。遂に小さき種が一本の木となつてしまつた。最終の警告使命は『聖名を負ふべき民を取るべく』（シトギヤウ傳一五ノ一四）諸々の『國・族・國語・民』に傳へられ、地はその榮光によりて照されるに到つたのである。

第五章　種播きより學ぶ教訓

この種播きと種の生長を通して貴重なる多くの教訓を、學校でも家庭でも教へることができる。若き者は斯様な自然的事象から神の働きを學ぶ時は、信仰によつて見えざるあるものを握り稗益され得るのである。斯くの如くにして一大人類家族の要求を滿し給ふ驚くべき神の御業と之に對する人間側の協力とを理解するとき、彼等の信仰は一段と助長せしめられ、日々の生涯に於て一層神の力を自覺するに到るのである。

神は聖言によつてこの地上を創造し給うたが、種子も同じく彼の創造にかゝるものである。而してこの同じ聖言によつて種に發生、增大するの能力を賦與し給うてゐるのである。『神言ひたまひけるは地には青草と種を生ずる草蔬と其類に從ひ果を結びみづから核をもつ所の果を結ぶ樹を地に發生すべしと、即ち斯なりぬ……神これを善と觀たまへり』（サウセイ記一ノ一一、一二）と。今日もこの聖言は同じやうに種の生長を行はせてゐるのである。故に種より生ずる青葉は快き陽の光に浴しつゝ『言たまへば成りおほせたまへば立てる』（シヘン三三ノ九）神の驚くべき聖言の御力を語つてゐる。

キリストは弟子達に『我儕の日用の糧を今日も與へ給へ』（マタイ傳六ノ一一）と祈ることを教へ、野の花を指し

つゝ『今日ありて明日爐に投げ入れらるる野の草をも神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや』（マタイ傳六ノ三〇）と保證せられた。キリストは今もこの祈に答へ、この約束を實現せんと努め給ひつゝある。我々が仔細に自然の面を眺めるとき、其處には見えざるある力が人間への奉仕の爲働き、之によつて我々の衣食が充たされてゐる事實を知るであらう。一見無雜作に投下せられる種も、神は之を生ける植物と爲すため樣々の方法と手段とを盡し給ふし、夫々の發生狀態に應じ、これに陽を照し水そゝぎて完き收穫にいたらしめ給ふのである。詩篇記者はこの事實を次の如く美しく謳つてゐる。

『なんぢ地にのぞみて漑そぎ
大いに之をゆたかにしたまへり
神のかはに水みちたり
なんぢかくそなへをして
穀物をかれらにあたへたまへり
なんぢ畎をおほいにうるほし
畝をたひらかにし
白雨にてこれをやはらかにし
その萠芽るを祝し

また惠恩をもて年の冕辨としたまへり
なんぢの途には膏したゝれり』と。（シヘン六五ノ九―一一）

自然と神の統御

物質界は神の支配の許にあるし、自然界も亦神の自然法則に從つてゐる。萬有は齊しく創造主の意志を語り又行つてゐるのである。雲・日光・露・雨・風・嵐――何れとして神の指揮の許にあり、その命令に服從せざるはない。穀物も同じく神の法則に服從することにより、その芽を地に出し『初めには苗、つぎに穗、つひに穗の中に充ち足れる穀なる』（マルコ傳四ノ二八）のである。彼等は神の御働を拒むことをしないからその時期々々に應じた生長を遂げしめ給うてゐる。然るに神に像られて創造られ、理性と言葉とを與へられたる人間のみ斯の如き神の賜物を認め得ずして、御旨に不從順であるとは果して正しいことであらうか。理智を賦與せられた人間のみがこの世界を禍してよいであらうか。

神と偕に働くもの

人間の生命を維持する一切の事に於て、其處には必ず神と人との協力の行はれてゐる事實を見逃してはならない。人間が手を働かせて種播きをやらない限り刈ることはない。一方神の側に於て日光・雨露・雲などを送り給はない限り、繁殖を見ることは出來ないのである。これはすべての職業又は學術方面に於ても同じであり、又靈的方面――人格

の養成や信仰行爲に於ても同一原理に基くものである。其處には必ず我々の果すべき分があるが、之に伴ふ神の力を必要とし、これなくしては折角の我々の努力も空に歸するのである。

物質に於けると靈的に於けるとを問はず、何事を行ふにしても常に神との協力による事實を閑却してはならない。何事を爲すにも神に依頼む必要がある。今日は餘りにも人間の力とか人間の創案とかに依頼し過ぎる傾向がある。直にも受けらるゝ神の力を餘りにも無視し過ぎてゐる。『我らは神とともに働く者なり』（コリント前書三ノ九）と。人間の分擔するところは神のそれとは遙か劣つたものであり、ただ我等がキリストの神性に全く結合するとき、其の凡てをキリストの賦け給ふ力によつて爲すことができるのである。

子供の教育

種が次第に成長して行く有樣は子供の教育に於ける一個の實物教訓である。『初めに苗、次に穗、つひに穗の中に充ち足れる穀なる』と。この比喩を語り給うたイエスはこの小さな種を造り、之に活力を與へ之の生長法則を定め給うた方であり、而も彼はこの豐が教ふる所の眞理を身を以て實現し給うた。彼は肉體に於ても精神に於ても、斯る植物によつて實證せらるゝ法則に準じ給うたのである。同じく彼は世の凡ての若き者に對しおのれに倣はんことを希望し給うてゐるのである。

抑もイエスは、天の君榮光の王に在し給うたが、ベツレヘムに嬰兒として生れ給うた。暫時の程母の手に護らるゝ無力の嬰兒となり、長じては柔順なる一少年として働き、子供に相應した智慧を働かせ給うた。が何もこの時は大人

の智慧ではなかつたのである。父母を崇めその命に從ひ家業を助け子供として能力相應のことを爲し給うたのである成長發達するにつれ、次第に完成せしめられ、單純にして罪なき御生涯を發揮せられたのである。彼の少年時代に關する記錄に『幼兒は漸に成長して健かになり、智慧みち、かつ神の惠その上にありき』（ルカ傳二ノ四〇）とあるのは此のことである。又その青年時代に關して『イエス智慧も身のたけも彌增さり神と人とに益々愛せられ給ふ』（ルカ傳二ノ五二）とある。

玆に父母及び教師の爲すべき仕事が暗示せられてゐる。彼等は若きものゝ傾向をよく觀取し、これを陶冶純化せしめ恰も園中の花が自然と開くが如くにその時期々々に相應して自然美を發揮せしめなければならない。

少年少女は何ら人工美を加へずともその儘にして美であるから、徒らに之に粉飾を加へ事更らしい言葉つかひを敎へ込む必要はない。無暗と彼等の外見や言語動作をほめそやして虛榮心を煽るが如きことがあつてはならない。萬一斯の如きことをするならば彼等に傲慢心を起さしむると共に友達の心にも嫉妬の念を喚起するものである。

子供は子供らしく單純に敎育し、その年齡に相應した仕事なり遊びなりを行はせ、これで彼等を滿足せしめなければならない。比喩中にも『初めには苗』とある如く苗には苗としての格別の美があるのである。故にあまり大人びてませたものにするよりも、能ふ限り子供として美しさ又純眞さを保たしめたいものである。

子供達も年齡相應の基督者となることができ、又これは神の求め給ふところである。父母たるものは彼等が靈的方面の敎育を受けキリストの如き品性に到り得るため凡ゆる機會を捉へその最善を爲さねばならない。

相應したる收穫

原因に對し必ず結果の生ずることは自然界に於ける神の法則である。收穫によつて種が如何に播かれたかゞ察知し得るのである。故に懶惰なる働人は己の働によつて咎を受ける。收穫そのものが彼の懶惰を證明するのである。靈的方面に於ても之と同樣で、働人の忠實如何はその働きの結果によつて量ることが出來る。彼が勤勉であつたか懶惰であつたか、その仕事振は收穫がこれを現すのであつて、斯る經過のもとに彼の永遠運命が決定するのである。

どの種でもそれが播かれるならばそれに應じた收獲を見るものである。人生に於ても同樣であつて凡て播くところのものは刈るところのものとなるのである。我々は哀憐と同情と愛の種を播かねばならない。一方又利己的にして尊大我慾にして我儘な行動も、悉くそれ相應の收穫があるのである。利己的な生涯を送り悉に肉の種を播くものはやがて滅亡を刈取らねばならない。

神は何人をも滅す如き方ではないが、滅びに陷るものは自分で自分を滅してゐるのである。何人にしても良心の叫びを蹂躙して顧みないものは不信の種を播くも同樣で、必ずそれの結果を刈取らずにはおかない。昔埃及の王パロが神より發せられたる最初の警告を無視する事に於て、强情の種を播きその結果剛情の實を刈取つた。勿論絕對に神は彼を不信的な態度に出でしめ給うたのではなく、寧ろ彼の播いた不信の種がそれに相應した實を結んだのである。幾度も幾度も頑强に神命を拒んだ結果、地は荒れ廢れ己が首子、全家の首子、全國の首子は悉く冷たき屍となりで横はり遂には彼の軍馬、兵車、將卒までが悉く紅海の底に溺沒するの憂き目を見たのである。王の經驗せるところは『人のまくところはその刈るところとならん』（ガラテヤ書六ノ七）との眞理の怖るべき實例である。本當に人々

がこの事實に眼醒たならば如何に彼等の種播に注意することであらう。

播かれたる種は遂に實となり刈取られるが、これは又播かれる。斯の如くにして次第に增殖してゆくのである。我〻の他の者に對する關係に於てもこの法則は適用せられる。一切の言行動作は巡て實となつて現るゝところの種である。凡ゆる同情心から出た行爲、柔順、克己などは他の人々の裡に再び發生し、彼等によつて更に他の者の裡に播かれるのである。同じく凡ゆる嫉妬、憎惡、不和なども『苦き根』（ヘブル書一二ノ一五）を生ずる怖るべき種である而もこれによつて多くのものが汚され毒されるのである。斯樣にしてよきも惡きも播かれたる種は現世並びに永劫に亘つて波及するものである。

水の邊りに

靈的たると物質的たるとを問はず何れの方面に於ても、惜みなく分つことが種播きの譬によつて敎へられてゐる。神は『水のほとりに種をおろす者はさいはひなり』（イザヤ書三二ノ二〇）『それ少く播く者は少く刈り、おほく播く者は多く刈るべし』（コリント後書九ノ六）と仰せ給うた。水の邊に播くとは神の賜物を惜みなく人々に分ち與ふる意味である。卽ちそれが神事であつても人事であつても助を求めらるゝ場合には與ふることである。之を實行することによつて決して貧しくなることはない。『おほく播く者は多く刈る』のである。種播く者もその種を地に投ずることによつて之を殖すが、神の賜物を忠實に分つ者も同じくその惠みが彌增すのである。神は絕えず惜みなく與ふる者に充分な惠を與へることを約束し給うてゐる。『人に與へよ、然らば汝らもあたへられん、人は量をよくし、押し

入れ搖りいれ、溢るゝ迄にして汝らの懷中に入れん、汝ら己が量にて量らるべし』（ルカ傳六ノ三八）と。

否、これ以上のことが播くことゝ刈ることゝに含まつてゐる。神より與へられたる物質上の惠みを人々に分つとき我〻の愛と同情とはそれを享くるものゝ心に神に對して讃美と感謝の心を喚起せしむる。斯して心の畑は靈的眞理を宿す備へができ神はこれを培ひ灌ぎ、種をして芽を出し遂には永生に到る實を結ばしめ給ふのである。

キリストの犧牲の型として

地中に種を投ずる事實を以てキリストは人類の贖罪に對する犧牲を表示し給うた。『誠に實に汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば唯一にて在らん、もし死なば多くの實を結ぶべし』（ヨハネ傳一二ノ二四）と彼は仰せ給うた。キリストの死はその御國に於ける實となつて現れた。生命は死の結果生ずるものであることが、凡て植物界の法則である。

キリストと協同して働き多くの實を結ばんとするものは先づ地に落ちて死なねばならない。彼の生命は世の益のために棄てられ、彼の自己に對する愛と興味とは碎かれなければならない。とは云へこの自己犧牲の原理は一面に於て自己保存の原理であることも忘れてはならない。地に葬られたる種は實を生じ更に又それは地に播かれる。斯の如くにして收穫の時には殖え增すのである。農夫はその種を播くことによつて之を保存する。同じく現在の人生に於ても與ふることは卽ち生きることである。保存せらるゝ生涯とは神と人とのために快よく獻ぐる生涯である。キリストのため此の世に於てその生涯を犧牲としたものは之を永遠に保有することができるのである。

種は新しき生命を出さんがために死する。玆に我等は復活の教訓を學ぶことができる。凡て神を愛するものは再び上なるエデンに於て生くることができる。墓中にその身を横へ眠れる者に對し、神は『死人の復活も亦かくの如し、朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦らせられ、卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦らせられ、弱きものにて播かれ、强きものに甦らせられん』（コリント前書一五ノ四二、四三）と約束し給うてゐるのである。

實物教訓

以上は自然界に於ける種播きと種の比喩より教へらるゝ數多の點からほんの二三を掲げたに過ぎない。如上の教訓を父兄や教師が子供に教ふる場合之を實際的のものとしたい。子供に自分で花床を準備せしめ、之に種を播かせ、父兄はその傍らにあつてよき種惡しき種の播かるゝ心の園に就きて語つた、花園にはよき種を播かねばならぬと同じく心の園にも眞理の種を播く用意が大切なる事を教へることができる。種を地に播くときはキリストの死に關する教訓を告げ、芽が生え出た場合は復活の眞理を語ることもできる。又次第に生長するにつれ、自然界と靈的世界とを對照して種播きの教課を繼續することができる。

一般の若き者に對しても同一方法を執ることができる。彼等にも土地を耕作することを教ふるがよい。何れの學校にも耕作の餘地ある農園を有たせたい。そして之を神御自身の教室と見做させたい。其の場所に於て觀察し得る自然的事物を神の子供等の用ふる教課書となしそれらによつて精神教育を受けしめたいものである。

土地を耕作したり地均ししたりする場合、絶えずよき教訓に接することができる。充分に開墾の行きとゞいてゐな

學校の屋上農園

い場所から收穫を得ようとしたところでそれは無理な註文である。種を播くまでには土地を開墾するために勞苦と熱心と忍耐とが必要である。人の心を扱ふ精神的事業に於ても同樣である。先づ神の惠みに浴したものが聖言を携へて出で往く。彼等は人々の心の畑が聖靈の感化のもとに和げられこなされてゐることに氣附く。土地のために烈しき勞苦が盡されなければ收穫が得られない如く、心の畑に於ても神の御靈の活動があり、充分なる手入れが行はれて後甫めて神の榮となるべき實を結ぶことができるのである。

時たまに思ひ出したやうに土地の手入れをしたところで收穫のあるものではない。日毎に充分なる注意を拂ひ、土地を度々深く掘り返し、作物の養分を奪ひ去る雜草を取除かねばならない。斯樣にしてこそ收穫の準備は完うせられるのである。さうすれば何人も畑に出て不出來をかこつ必要はない。

地を耕しつゝ自然界より靈的教訓を學ぶものは天與の祝福に浴することができる。彼等は地を耕しつゝも、如何なる寶が彼等に來るかを知り得ない。一方經驗あるもの、言葉を輕んずることなく、凡てを自己に對する教訓として受容れ、受くべき訓練の一部分となし以て精神教育のの資料とすることができるのである。

種を發芽成長せしめ日夜これの手入れをなし給ふ方は、云ふ迄もなく創造主なる神である。その神が人類の上に今日も尙依然としてそれに優るとも劣ることなき深き加護を垂れ給うてゐるのである。人なる種播く者は我らの肉體生活を支へるために働いてゐるが、一方神なる種播く者も我等に永生の實を結ばしめんがために休みなく我等の心中に働き給うてゐるのである。

第六章　天國はパン種の如し

——マタイ傳一三ノ三三、ルカ傳一三ノ二〇、二一に基く——

地位あり教養ある多くのものがガリラヤの豫言者の語るところを聽かんとしてつめかけて來てゐた。そのあるものは湖邊にて語り給ふキリストの周圍に蝟集せる群衆に眼を注ぎ、奇異なる感じを抱いた。群衆は社會的に視て各階級を網羅するものであつた。貧民・教養なきもの・乞食・顏面に印章のある前科者・不具者・道樂者・商人・遊民など、高きも低きも、富めるも貧しきも、所せまきまでに寄集つて、キリストの一語一語に耳を傾けてゐるのであつた教養ある人々が斯る奇異なる群集を眺めた時、果して神の國が斯る分子でもつて構成せらるゝものであらうかとの疑念を抱いたのも無理ならぬことである。

キリストはこの疑念に答へんため次の比喩を語り給うた。

『天國はパン種の如し、女これを取りて三斗の粉の中に入るれば悉く脹れいだすなり』（マタイ傳一三ノ三三）

ユダヤ人はパン種を時として罪の象徴に用ひたことがあつた。彼等は逾越のいはひの時に、家々からパン種を全部除き去ることを命ぜられてゐた。これは彼等の心中より罪を取除くことの意味であつた。キリストも弟子達に警告して『パリサイ人のパンダネに心せよ、是僞善なり』（ルカ傳一二ノ一）と仰せられた。使徒パウロも『惡と邪曲とのパン種』（コリント前書五ノ八）と云つてゐる。然しこのところの比喩ではイエスは麪酵を以て天國の原則を說明して居られる。卽ち神の恩惠による敏速なる同化能力を、之によつて表示し給うてゐるのである。

如何に汚れ果て墮落したるものにも神の能力の及ばぬものとてはない。自己を棄て聖靈に絕對服從をしたものには新しき生命原理が植ゑつけられ失はれたる神の像が恢復せられるのである。

人間は自分の意志をもつて自己を更改することはできない。人間には斯る變化を來らしむる能力がないのである。パン種——全く外部よりのもの——が、希望する變化の齎さるゝ前に粉の中に入れられなければならない。罪人が光榮ある神の國の民となるためには、先づ神の恩寵に浴するの必要がある。世上の凡ゆる教育と文化は、墮落せる罪の子を天國の子とすることはできない。是非とも神よりの更新能力が必要であるのであつて、斯る變化は唯聖靈を通して齎さるゝのである。凡て救はれん事を欲する者はその高きと低きと富めると貧しきとを問はず、聖靈の御力に斷然服從しなければならない。

粉の中にパン種が這入ると內部から作用する如く、心が神の惠みによつて一新せらるゝとき、其者の生涯に變化が現れる。我等を神と調和せしむるためには外部丈けの變化では充分ではない。世の中にはこの習慣あの習慣を改め、それで基督信者となれると思ふ者が多い。斯る者はその最初の出發からして誤つてゐるのであつて、先づ第一に心が變らなければならぬのである。

心中に眞理を保つことゝ單なる信仰の表明との間には大なる差異がある。眞理に關する所謂知識を振りまはすだけでは充分ではない。此の種の知識がいくらできてゐても、心の想ひの全然變つてゐないことが多いのであるから、先

心が改まり聖まらなければならない。

神の誡命を義務觀念から――卽ち斯樣に要求せられてゐるから守らんとするものは服從の悅びを味ふことができない。斯る者は何ら服從してゐないのである。神の要求が人間性來の傾向に反するからと云つて之を重荷に感ずるものは信仰生涯に這入つたとは云へない。元來眞正の服從と云ふものは內部的要素の活動に基くもので正義と神の律法を慕ふところの愛から出發するものである。凡ゆる正義の基本となるものはイエスに對する我等の忠誠さにある。救主への此忠誠が我等をして正義であるから――そして正義を行ふことは神を悅ばせまつるから――正義を行はしめるのである。

聖靈を通して行はるゝ回心の一大眞理は、ニコデモに對するイエスの御言葉によつて解る。『まことに誠に、汝に告ぐ、新に生れずば、神の國を見ること能はず……肉に由りて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり、なんぢら新に生るべしとわが汝に言ひしを怪しむな、風は己が好むところに吹く、なんぢ其の聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。凡て靈に由て生るゝ者も此の如し』（ヨハネ傳三ノ三―八）と。

使徒パウロも聖靈に動かされ『然れど神は憐憫に富み給ふが故に我らを愛する大なる愛をもて、咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活し（汝らの救はれしは恩惠によれり）共に甦らせ、共に天の處に坐せしめ給へり、これキリスト・イエスに由りて我らに施したまふ仁慈をもて、その恩惠の極めて大なる富を、來らんとする後の世々に顯さんとてなり、なんぢらは恩惠により、信仰によりて救はれたり、是おのれに由るにあらず、神の賜物なり』（エペソ書二ノ四―八）と云つてゐる。

粉の中に入れられたるパン種は人の知らない間に塊りを悉く脹らす。眞理の種も秘かに默々の裡に心靈に變化を起すのである。人間性來の傾向は和げられ、打從へられ、そこに新しき思想・感情・動機が植ゑつけられる。而して人格の新たなる標準が樹立せられる。卽ちキリストの生涯である。其の時そのものゝ精神は一變し彼の諸機能は新たなる方向に活動を開始する。勿論この場合別な機能が與へらるゝ譯ではないが、旣に賦けられてゐたところの機能が聖別を受けるのである。又良心の覺醒が起り、神事に奉仕するに應はしき品性が賦けられる。

屢々かうした疑問に接する。神の言を信ずると表明しながら、言葉に於て精神に於て品性に於て豪も變化を見ないものゝ多いのは何故であるか？　聖められざる荒々しき性癖を現し、鋭き言葉を出し、尊大に構へ、物事に怒り易いのは何故であるか？　殆ど俗世間のものと變りないまで傲慢・我慾・放縱・短氣であるのは何故であるか？　と。さうした事の理由は、彼等が未だ回心してゐないからである。未だ心中に眞理の麹酵を宿してゐないからである。然し匡正し得る機會がなかつた譯ではない。彼等の惡き性來の傾向が未だ徹底的に屈服されないために、更改能力の働く餘地がないのである。故に此の種のものゝ生涯はキリストの恩惠の缺如と心を更へて新にする神の力に對する不信を語るものである。

然し乍ら『斯く信仰は聞くにより、聞くはキリストの言によるなり』（ロマ書一〇ノ一七）とある如く、神の聖言は人の品性に變化を起すところの一大能力である。故に、キリストは『眞理にて彼等を潔め別ち給へ、汝の御言は眞理なり』（ヨハネ傳一七ノ一七）と祈り給うたのである。何人でも聖言を研究して之に服從するならば、神の靈は必ず心中に活動して、汚れたる性狀を悉く征服するのである。聖靈は先づ人の罪を示すのである。さうしてキリスト

の愛によつて働かさるゝ信仰が心中に湧き出る。さうして全身・全生・全靈が神の像に一致せしめられる。又神は我等を用ひてその聖旨を行はしめ給ふのである。心の裏に働く力は外部にも現れ、受けたる眞理を分つために働くことができるのである。

この聖言の中に表示せらるゝ眞理は、人類にとつて實際に必要であるところの信仰による回心にまで到らしめるのである。斯くの如き崇高なる要素を我々の日常生活に適用するには餘りにも純潔で餘りにも神聖なるものと考へてはならない。勿論之等の眞理は高邁にして永遠的なるものであるが、一面に於てそれの活ける感化は人間經驗にまで及ぶところのものである。人生の大より小に到るまで、如何なる事件の裡にも浸潤するところのものである。

人の心中に眞理の麪酵が這入ると、樣々の慾念は禁まり、性質は穩かに想は潔くなる。精神機能と諸能力の働も敏活となり愛と情緒も豐富にせられる。

斯る原理に生きる人々に對し世間は之を奇異な眼でもつて眺める。金儲のことに專念してゐる我慾な人々は此の世では金錢・名譽・快樂が得られさへすればよいのである。斯る打算的態度でもつて彼等は永遠世界を失つてゐるのである。キリストに從ふものにとつては斯る方面の欲求は問題ではないのであつて、彼等はキリストの爲に勞苦し克己するのである。之とても彼等は世にありてキリストなく望みなき人々を、一人にても多く救ひ得る大事業の一端を果したいからである。素々彼等の眼のつけどころは永遠世界であるから、斯樣な人達のことを世間では理解に苦しむのである。キリストの愛が贖罪能力と共に彼等の心を占め、斯る愛が他の凡ての動機を支配し、世上の腐敗・墮落せる感化より超然たらしむる。

聖言は我々人間社會に於ける交渉に於てその聖別能力を顯す。然し乍ら眞理の麪酵は野心滿々たる利己的な排他精神の中に生ずるものではない。眞の天上愛、所謂我儘にして變り易き種類のものではない。徒らに人の禮讃を必要としない。斯る神の恩みに浴したるものゝ心は必然神と人への愛となつて現れる。所謂自我の强制ではない。人々が彼を悅ばせ愛するから、その德を頌へるから愛すると云ふのではない。それとは全然反對である。彼等も齊しくキリストの血によつて購はれたるものであると認めるから之を愛するのである。自分の動機と言行とが誤表せられ誤解せらるゝ場合にも、別段これにこだはることなく益々所信を貫徹して行くのである。謙遜にして同情と親切の念に富むと共に如何なる場合にも希望に充され神の慈愛を信じて疑はぬのである。

使徒も『汝らを召し給ひし聖者に倣ひて自ら凡ての行狀に潔かれ、錄して「我聖なれば汝等も聖なるべし」と有ればなり』（ペテロ前書一ノ一五、一六）と勸告してゐる。キリストより來る惠みが我等の言葉と行ひとを支配するものであつて、人々に對しては慇懃・鄭重ならしめ、言葉遣ひまでも快活に親切にする。斯る家庭には天使も足をとどめる。神の御前にたち昇る芳しき香の如く、彼等の生涯よりは芳香が放たれ、愛は慈悲・溫柔・忍耐・寬容の美德となつて發揮される。

さうなると人相まで變る。彼等の心中にはキリストが內住する。主を愛しその誡命を守るものゝ顏は如何にも晴々と輝き、その面には眞理が溢れ、美しき天上の平和が宿るのである。斯樣にして人類愛以上の溫情が絕えず表示せらるゝやうになるのである。

眞理の麪酵は人を全く一變せしむる。下劣な點を高雅に、粗野なところを溫和に、我慾な心を宏量にする。不潔不

純な點は潔められ、羔の血を以て洗はれる。その全心・全靈・全生は聖められ、人にして神の性質を享くるものとなる。彼等の優美にして全き人格によつてキリストは崇められる。斯る變化が成就する曉には、天使は讃美の樂を奏し、神は聖子キリストと偕に、彼等が聖き御像に化せられたることを歡び給ふのである。

第七章　隱れたる寶

——マタイ傳一三ノ四四に基く——

『また天國は畑に隱れたる寶の如し、人みいださば之を隱しおきて喜びゆき、有てるものをことごとく賣りてその畑を買ふなり』（マタイ傳一三ノ四四）

昔は一般に寶を地中に埋藏して置くことが風習となつてゐた。屢々盜賊に襲はれたりすることがあり、主權者などが變ると、土地の富豪資産家などは苛しく徵稅せらるゝことがあり、その上にまた敵軍の侵入による掠奪の危險があつたので、資産家達は之を秘かに保有し置く必要上最も安全なる方法としては地中に寶を隱して置くことであると考へた。ところが往々にしてその隱し場所が見失はれてしまふことがあつた。その所有主が死ぬとか入牢追放などの處分を受け、寶の在所より引離されたりなどして折角苦心して匿まつて置いた寶も、幸運なる發見者の手に入る事があつたのである。キリストの時代には荒果てた顧見られぬ土地から思はぬ貨幣、金銀の裝飾品などの發見さるゝ場合が屢々あつたのである。

耕作に從事してゐる雇人などが牛を使つて地面をすき返してゐるとき、斯うした寶を掘當てる場合があつた。彼は寶を發見するなり、さては幸運は我手の中にあると、そつくりそのまゝ秘め置き、その足でもつてすぐ家に歸ると家

財道具を悉く賣り拂つて寶の埋沒されてある土地を買ひ取るのである。近所隣のもの家族のものは一樣に彼が狂氣したのではないかと心配する。その畑にした所で格別見込のある作地でもないのに、いつたいどうした事かと怪む。然し當人は萬事承知して居るので、愈々土地の登記も濟み彼の手の中に入ると、藏匿されて居る寶物を丹念に探すのである。この隱されし寶の譬は、天上の寶の價値と、それを得るため如何に行動すべきかを語つて居る。この譬によると、寶の發見者は隱れたる寶を自己の有にする爲には、すぐにも己が持物を手放し、如何なる障碍を排しても之を手に入れずには止まぬのである。これと同樣ひとたび天上の寶を發見したものは、その眞理の財物を手にする爲には如何なる犧牲、如何なる辛苦をも意としないのである。

この比喩中の寶の隱匿されてゐる畑とは聖書であり、寶とは福音のことである。聖書——聖書ほどに貴重なる鑛脈をもつてその內部が縱橫にめぐらされて居るものは他にないのである。

如何にして隱されたか

この福音てふ寶は隱されてあると云はれてゐる。自負心の强い、しかも空漠なる哲學思想によつて毒されてゐるのは、福音の力なり神秘を認めることができないのである。世には眼あれど見ず耳あれど聽かざる類のものが多いのである。彼らはあたら理智を有しながら隱れたる寶を認むることができないのである。

時として寶の隱されてある場所とも知らず何氣なく打過ぎることがあらう。又その下に寶の隱されてあることも氣附かず樹の根に腰を下して休息むこともあらう。恰度ユダヤ人の場合がそれであつた。彼らには寶とも云ふべき眞理

古蹟發掘隊の試鑿作業

が托されてゐた。もと〳〵ユダヤ人の神殿その他の制度そのものは特に主の制定し給うたところのものであつた。彼らの行ふ儀式禮典には型と象徴とをもつて贖罪の一大眞理が教へられてゐた。然るにキリストが現れ給うた時、ユダヤ人は彼こそはさうした型と象徴とが凡て指示してゐた當のメシヤであることを承認しなかつた。彼らは聖書を手にしてゐたけれども、先祖より次々に繼承し來れる傳説なり聖言の人間的な解釋などがイエスの説き給ひし如き眞理を蔽ひ隱してしまつたのである。斯樣にして聖言の靈的眞理は見失はれてしまつた。あたら知識と眞理の寶庫が彼らの前に開かれて居りながら、それを知らなかつたのである。

何も神が人から眞理を匿し給うた譯ではない。彼らは我と我手をもつてこれを曖昧にしてしまつたのである。キリストはユダヤ人に自分がメシヤであることの證據を判然と示し給うた。けれどもイエスの語るところには彼らの生涯に於て決定的變化を要求するものがあつた。彼らにしてイエスを信受するならば抱懷せる信條と傳説及び我慾にして不虞な行爲を放棄せねばならなかつた。不變にして永遠的なる眞理を承認する爲には犧牲を拂はねばならなかつた。斯うした理由から彼らは、折角神がイエスの信仰に確立せしめんとして與へ給へる歴然たる證據を否認してしまつた彼らは舊約聖書を信ずると表明しながら、現れたるキリストの人格とその生涯に就いての證言を承認しなかつたのである。彼らにはそれを信ずると悔改めなければならず、先入主となれる意見の拋棄を餘儀なくされることを恐れたのである。福音の寶――卽ち道、眞理、生命そのものが彼らの手近にあつたにも拘らず、この天與の最大の賜物を拒んでしまつた。

『然れど司等のなかにもイエスを信じたるもの多かりしが、パリサイ人の故によりて言ひ顯すことを爲さゞりき。

除名せられんことを恐れたるなり』（ヨハネ傳一二ノ四二）確に彼らは信服せしめられ、イエスの神の子たることを信じたのであるけれども、自己の野心とは一致せざりしため、イエスを告白しなかつた。彼らには天上の寶を求めるだけの信仰がなかつた。たゞ世上の寶を求むることに汲々であつた。

今日とても同じである。人々は地上の富を求むるに汲々として、その想ひは利己的な野心に充たされてゐる。世上の富と名譽・權力獲得のために人間の信條、傳說、要求を神の要求以上に重んじ、ために聖言の中にある寶は隱されてしまつてゐる。

『性來のまゝなる人は神の御靈のことを受けず、彼には愚なる者と見ゆればなり、又これを悟ること能はず、御靈のことは靈によりて辨ふべき者なるが故なり』（コリント前書二ノ一四）

『もし我らの福音おほはれ居らば、亡ぶるものに覆はれをるなり、この世の神は此等の不信者の心を暗まして神の像なるキリストの榮光の福音の光を照さゞらしめたり』（コリント後書四ノ三、四）

寶の價値

イエスは人々が利慾にはしり永遠世界を失へる狀態を眺め、斯の如き惡を矯正せんとして起ち、心靈を麻痺せしむる迷妄を打破せんとして、聲高く『人、全世界をまうくとも、己が生命を損せば何の益あらん、又その生命の代に何を與へんや』（マタイ傳一六ノ二六）と叫び給うた。彼は墮落せる人類に、その忘失せるより高き世界を示し、彼らがその永遠の實在を認めんことを冀ひ給うた。又彼は、彼らを榮光に輝く無限の門に導き、その奥にある寶を示さ

んとし給うた。

この寶は、黃金白銀にもまさり、地上の如何なる富も之と比較し得べくもないのである。

『淵は言ふ我の內に在らずと、
海は言ふ我と偕にあらずと
精金も之に換ふるに足らず
銀も秤りてその價となすを得ず
オフルの金にてもその價を量るべからず
貴き青玉も碧玉もまた然り
黃金も玻璃もこれに並ぶ能はず
精金の器皿もこれに換ふるに足らず
珊瑚も水晶も論ふにたらず
智慧を得るは眞珠を得るに勝る』（ヨブ記二八ノ一四—一八）

之が聖書の中に見出さるゝ寶である。實に聖書は神聖なる一大教科書であり、一大教育者である。眞正の科學の基礎となるものは悉く聖書の中に含まつてゐるのである。この聖言を探究することによつて、凡ゆる方面の知識を修得することが出來るのである。殊に之等とは到底比較にならぬところの科學中の科學なる救の科學がそれにあるので

ある。故に聖書はキリストの測るべからざる富を有する一大鑛山であると云つてもよいのである。

眞正の高等教育は斯る神の言を研究し服從することによつて得られるのである。之に反し斯の如き神の言が斥ぞけらるゝ場合、それは神と天來の知識に導くどころか却つて教育てふ名をはづかしむるものである。

自然界にも驚くべき眞理が包含されてゐる。大地、海、天空、之等は眞理を以て滿たされ、我らにとりて絶好の教師である。自然は天上の智慧又永遠眞理を語るものである。然るに墮落せる人類は之を悟らず、罪は彼らの視覺を曇らせ、斯の如き自然を神以上の地位に置いてゐる。聖言を拒めるものがその腦裡に正しき觀念を描き出すことは不可能であつて、折角自然が語るところの事柄も却つて彼らを創造主より引離すものとなつてゐるのである。

人間の知慧が神の遣し給へる教師のそれよりも高邁なるものゝ如く考へる者が多い。ために神のあてがひ給うた教科書が時勢遲れで既に陳腐と化した一向に面白くないものゝ如くに做看されてゐる。しかし乍ら聖靈によつて眼の開かれたる者は、斯る謬見に囚はれない。聖書の中に彼らは無上の寶を見出し、所有の一切を賣却して寶の有る土地を買ふのである。彼らは徒らに推論想像の產物とも云ふべき人氣作家の書物に賴らず、寧ろ古往今來最大教師最大著者たるイエスの聖言を選ぶのである。げにこのイエスこそ我らの爲にその生命を捨て給ひし方にて、彼を通して永生を享くことができるのである。

寶を無視せる結果

サタンは人々に格別神との交渉がなくとも驚くべき知識に到達し得るものゝ如く思はせる。斯る謬想をもつて彼は

アダムとエバに神の言を疑はせ遂に反逆を敢てせしむるに至つたのである。又彼は今日もエデンの昔と同樣の詭辯を弄してゐるのである。往々にして著述などより無神的感化を受けた教育家達が知らず〳〵の裡に青少年の思想上に影響を及ぼし、神を信ぜず、あまつさへその律法を犯して憚らぬ如き狀態に陷れる。然るに彼ら教育家達は之に氣附かず、それの結果に就いて留意するところがないのである。

今日如何程學生が大學なりその他の志す學校に於て所定の科目を修得し、如何程研學に專念したところで、神を認めず、己を支配する律法に不順であるならば自滅するの他はない。惡習慣に耽るの結果、自制、自尊の念を失ひ、自己に關しても物事を嚴密に批判することが不可能となり、己が心身を扱ふに不道理、無分別を敢てし、その渦れる習慣は遂に彼を人生の落伍者たらしむるのである。純潔にして健全なる狀態を保持することに留意せず、自己の平安を擾す惡習を恣にせる結果、幸福たること能はず、多年の研學も水泡に歸し、心身の能力を誤用し、神の宮の破壞となり、遂に現代世界及び來るべき世界の生命を失ふに至るのである。彼は地上の知識を修得することにより、望む寶をかち得るものと考へたが、神の聖言を無視せる結果、あたら無上の寶を失ふの結果に陷るのである。

寶を探究せよ

神の聖言は我らの研究題目である。我らは聖言に表示せられたる眞理によつて子女を教育せねばならない。實に比類なき寶であるにも拘らず探し當てるものゝ少いのは、彼らが之を己が手中のものとするまで探究を繼續しないからである。眞理に對し淺薄、皮相の意見を持しながら、自分ではそれの肝要なる點に悉く觸れたるものゝ如く誤認し

徒らに眞理に關する他のものゝ解說に依賴して、自ら隱れたる寶を掘るものゝ如くに精勵、刻苦することをしないものが多いのである。人間の考察は單に信賴すべからざるものであると言ふのみでなく、危險の伴ふところのものである。何故危險であるかといふに、それは神を主とすべきところに人を主とし、『エホバかく言ひ給へり』との語を以てすべきところに人の說を以てするからである。

キリストは眞理である。又その聖言も眞理であつて、それには表面に現れた以上の深い眞意がこめられてゐるのである。彼の說き給うたところは一見如何にも地味ではあつたが、外見とは比較にならぬ程の價値があつた。唯聖靈によつて啓化せられたものゝみが、それの眞價を認めその中に眞理の珠玉を見出すのである。而もこれこそ隱れたる寶である。

單に人間の理論或は思索のみによつて決して聖言の理解が得られるものではない。往々にして所謂哲學に對する理解が知識の寶庫を開き、敎會に襲ひ來る異端を阻み得るものゝ如くに考へらるゝことあるも、彼の爲したる解說が却つて誤れる理論と異端とを齎すに過ぎない場合があるのである。人間が必死の努力を以て、如何にも錯綜せるものゝ如く思惟せる聖句に對し註釋を附したる結果、却つてそれを明かにしないのみか、之を愈々晦澁難解なるものとする場合が多い。

祭司やパリサイ人は、神の聖言に己の解釋を加へ、如何にも敎師としての大事業に當りつゝあるものゝ如くに自任してゐたが、キリストは彼らに、『汝らの誤れるは、聖書をも、神の能力をも知らぬ故ならずや』（マルコ傳一二ノ二四）と喝破し給うた。又彼らに『人の訓誡を敎とし敎へて』（マルコ傳七ノ七）と責め給うたことがあつた。彼ら

は聖言の敎師でありそれに通曉せるものゝ如く自任してゐたけれども、聖言を行ふものではなかつたのである。サタンが彼らの眼をくらましてゐたがために、聖言の眞意を悟ることができなかつたのである。

今日も同樣のことが行はれてゐる。多くの敎會は前者と同樣な罪に陷つてしまつてゐる。今日所謂智者學者輩によつて昔時ユダヤの宗敎家達が陷つたと同樣の過ちを繰返す危險がある。彼らが聖言を誤つて解釋するの結果、多くのものは斯の如き眞理の誤認によつて混亂迷愚に陷れられてゐるのである。

聖言を讀むに當つても、所謂人間の傳說、思索などの薄暗き燈光の下にて殊更に不自由して讀む必要はないのである。斯の如きは太陽の前に松火をかざすの類で、人間の傳說と想像とを以て聖言を說くの愚をなすに過ぎないのである。聖き神の聖言は何ら地上の明滅する如き松火でもつて照さるゝの必要を見ない。寧ろそれ自體が光――燦然たる神の榮光そのものであるのであつて、他の如何なる光もこの前には光輝を失ふのである。

とは云ふものゝ聖言を熱心に研究、探索せねばならぬことは無論である。懶惰で一向に身を入れて研究しないものが眞理に對する明敏なる理解をもつて報いらるゝと云ふが如きことはあり得ぬのである。世上の幸福ですら、熱心なる努力、忍耐、辛苦なくしてはかち得らるゝものではない。如何なる業務に成功を望む者も、彼に對し成功の第一條件として要求せらるゝところのものは、堅固なる意志と確信の持續である。靈界に於ける知識の獲得にありても之と同樣で、並々ならぬ苦心が必要である。眞理の寶を見出さんとする者は、恰も坑夫が地中の寶を掘る如くに、深く深く掘下げなければならない。中途半端なことでは駄目である。若きと老たるとを問はず、聖言を讀むだけでなく、祈りつゝ全身をこれに傾け、恰も隱れたる寶を探すものゝ如くに、眞理を追求しなければならない。斯る態度で研究す

る者は必ず報いられる。又キリストは理解せしめ給ふに相違ない。

我らの救は一に聖書に含まれたる眞理の理解如何に懸つてゐる。我らが斯る知識に到達することは神の御旨である故に我らは飢渇くものゝ如くに聖言の探求に從はねばならない。恰も鑛夫が丹念に地を掘り金鑛脈を探し當る如くに我らも聖言を探り、神との關係が確められ、己に對する御旨が明瞭となるまでは止めてならないのである。キリストもこのことに就き『汝らが我が名によりて願ふことは、我みな之をなさん、父、子によりて榮光を受け給はん爲なり何事にても我が名によりて、我に願はゞ、我之を爲すべし』（ヨハネ傳一四ノ一三、一四）と仰せ給うた。

往々にして篤信、敬虔にして才幹、力量あるものも、永遠世界の光景を窺ふ機會を與へられながら、見ゆるものによつて、見えざる榮光の遮らるゝ場合がある。しかし乍ら隱れたる寶の探求に成功せんとするものは、世上の事物の追求以上に、熱心の追求を爲さねばならない。彼の性向、力量の一切が悉くこの目的のために捧げられなければならない。

不柔順なる態度を執ることは、聖言より得らるべき莫大なる知識を阻むことになる。抑々理解とは神の誡めに對する服從を意味する。聖書は徒らに人間の嫉視、偏見の用に供せらるべきものではない。

貴下は我救はれんがため何を爲すべきかと訊ねられるか。貴下として何をおいても第一に爲さるべきことは先入主を拋棄する事である。先入主となれる意見を維持せんがために聖言の探求に從事するならば、決して眞理に到達することはできない。神が如何に仰せ給ふかを知るため研究すべきである。研究を繼續して之に信服せしめらるゝ時は、よし貴下の意見と眞理とが合致しなくとも、徒らに自己の考へと一致させるために眞理を曲解する如きことを爲さず

支那服着用のガッラフ氏

一八三七年シンガポールに於て發行したるガッラフ譯の約翰福音之傳

示されたる光に從はねばならない。心靈を開き、聖言より出づる驚異に接しなければならない。

キリストを救主として認むる信仰は、その人の理智を開發、誘導し、心中に天來の寶を認識せしむる。斯の如き信仰は、回心及び人格の更新とは不可離のものである。抑も信仰するとは、この福音の寶を見出し、己が手中に收むるの謂であつて、このため課せられたる一切の責務を快よしとすることである。

『人新に生れずば神の國を見ること能はず』（ヨハネ傳三ノ三）と。よしんば種々と揣摩臆測したにしても、信仰の眼が開かれない限り、この寶を見出すことは不可能である。キリストは我らにこの無上の寶を掴ましむるため自己の生命を擲ち給うたのであるが、その贖を信ずる信仰に基き新生しない限り、凡ての滅び行く靈魂に對し、寶も罪の赦もあり得ぬのである。

故に我らには聖言の中に顯されたる眞理を認むるために、聖靈の啓化が必要である。恰も太陽が現るゝとき、その光輝は忽ちにして暗影を一掃し、自然美を顯す如く、聖言の中に隱されたる寶も、義の太陽の輝きによつて明かにせらるゝまでは之を認むるものはないのである。天にありて無限の慈悲を持ち給ふ神より遣さるゝ聖靈は、神のものをとりてキリストに絶對の信仰を抱く凡ての者に顯はすのである。その聖き力により靈魂の救に關する生ける眞理が彼らの心中に明瞭となり、生命の路が誤ることの出來ない程に明かに解るのである。故に我らは聖言の研究に從事するときは、研究せる聖言が聖靈の光によつて輝き、中なる寶を認めしめ得るやう恒に祈らなねばならない。

探究の報賞

何人と雖も最早これ以上探求すべき知識がないと考へてはならない。人間の理智には限界があり、その著作はこれに通曉し或は窮める事ができるであらうが、人が如何程高く深く廣く想像の翼を翔つたにしても神を見窮めることはできない。到底我らの認識し得る限りではないのである。我らは神の榮光、その無限の智慧、知識のほんの一閃に接するのみである。我らは鑛山の表面にて働くものにも等しいもので、豐富なる鑛脈は地下にあるのである。唯これを掘下げるものゝみ報いられ、深く〳〵坑脈を掘下げ行くことにより美事なる寶に觸れることができる。唯誤りなき信仰によつてのみ、神の智慧は人の智慧となるのである。

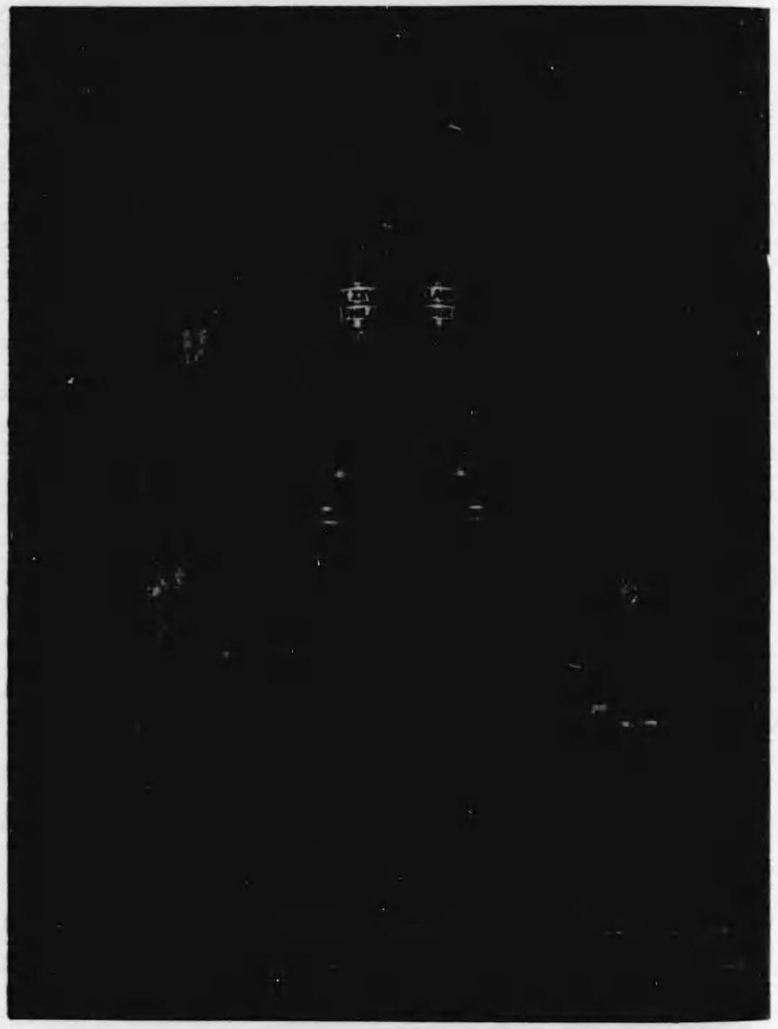
斯様にキリストの精神をもつて聖言を探究するものは必ずや報いられずにはゐない。何人にしても嬰兒の如き素直なる態度をもつて教を受け、神に絶對服從をするならば、聖言の眞理に接することができるのである。人は柔順となるとき、神の御計畫の何たるかを解することができる。探究者の前に天上の榮光と美の開かるゝことは疑ひなきことである。其の結果として必然的に現在の狀態とは異常なる懸隔を生じ、眞理の探究を通して一段と高められるのである。又現在では救の神秘、キリストの受肉、贖罪、犧牲の如き十分に解されてゐない狀態にあるが、これらも一層明確に理解せらるゝと共に、一層それの眞意に接することができるのである。

キリストの天父に對する祈禱中に我らの忘るべからざる教訓がある。『永遠の生命は、唯一の眞の神に在す汝と汝の遣し給ひしイエス・キリストを知るにあり』（ヨハネ傳一七ノ三）茲に眞正の教育が存在するのであつて、それによつて力を受けるのである。神とその遣し給へるイエスに對する體驗的知識は、人々を神の像に變化せしむるものである。それは人を自主たらしめる。低き衝動と慾情とは、より高き意志能力によつて支配せらるゝに至る。たゞにそ

れのみではない、彼を神の子、天國の嗣子とし、尙又無限なる神との交りに入らしめ宇宙の寶を見せしめる。

これこそ聖言の探究を通して知らるゝ知識である。これは誰にても自分の持てる一切を神に獻ぐるものゝ見出し得る寶である。

『若し知識を呼求め、聰明をえんと汝の聲をあげ、銀の如くこれを探り、秘れたる寶の如くこれを尋ねば、汝エホバを畏るゝことを曉り、神を知ることを得べし。』（シンゲン二ノ三—五）



御木本眞珠王の博覽會出品物　眞珠製の鐘

第八章　値たかき眞珠

――マタイ傳一三ノ四五、四六に基く――

贖罪による愛の至幸至福を、イエスは値たかき眞珠に比較し給うた。彼はこれを好き眞珠を求むる商人の譬により て說明し『値たかき眞珠一つを見出さば往きて有てる物をことごとく賣りて之を買ふなり』（マタイ傳一三ノ四五）と仰せられた。キリスト自身が『値たかき眞珠』である。彼の中に父の榮は悉く顯され、我等は神の充ち足れる御姿を拜するのである。彼は父なる神の榮光の輝き、その人格の表現である。光輝ある神の屬性はイエスの品性に於て現され、聖書の凡ての頁よりは燦然たる光輝が放たれてゐる。キリストの義は恰も雜りなき白眞珠の如く汚染なく瑕なきもので、如何なる人の巧みを以てしてもこの偉大にして貴き神の賜物に匹敵し得るものはない。又一として缺陷を見出さず、キリストの中には『智慧と知識との凡ての寶藏あり』（コロサイ書二ノ三）『汝等の智慧と義と聖と贖ひ』（コリント前書一ノ三〇）に在しますのである。この世のみならず來らんとする世までも人の魂の渴仰を滿すものは、悉くキリストの中に見出し得るのである。この救主こそ何ものをもつてしても比ぶべからざる貴き眞珠である。

『かれは（キリスト）己の國に來りしに己の民はこれをうけざりき』『光は（世の）暗に照る然して暗は之を悟ら

ざりき』（ヨハネ傳一ノ一一、五）と。とは云へ　悉くが天與の賜物に無關心であつた譯ではない。譬にある商人は誠實に眞理を求むる部類のものを代表するものである。異教の人々の中にも心靈の寶を見出すために熱心に一般宗教・科學・文學などの研究に從事せる識者もゐた。又猶太人中にもその有たざるものを渴仰するものがあつた。彼等は所謂形式化せる宗教に滿足し得ず、より靈的にして向上的なるものを求めてゐた。主の選びを蒙れる使徒達は後者に屬し、コルネリオ、エテオピヤの寺人などは前者に屬してゐた。彼等は久しく天來の光輝を懇求、渴望してゐたもので、キリストが現されたときこれを喜び信受したのである。

此の譬では眞珠を賜物として表示されてゐない。商人は所有一切を賣つて之を購つたのである。聖書にはキリストのことを賜物として現されてゐるに拘らず、これは何うしたことであるかと疑問を抱くものがあらう。勿論キリストが賜物であることには變りはないが、唯全心、全生、全靈を悉く獻ぐるものに對して然あり給ふのであるから、我々はその凡てをキリストに獻じ眞心より彼の要求し給ふ一切の命令に服從し得る生涯を送らねばならない。我々の一切……才能も力量も悉く主の屬であつて、當然これは彼の奉仕に供すべきものである。我々が全部を主に獻ぐるときキリストは凡ゆる天上の寶と偕に躬自らを我等に與へ給ふのである。斯樣にして値たかき眞珠は我々の所有となるのである。

無論救は賜物であり無償でもつて與へらるゝところのものであるが、またこれは賣買されるものであるとも云ひ得られる。例令ば慈愛の神の經營にかゝるマーケットに於て金なく値なくして購求し得らるゝ貴き眞珠が陳列せられてゐる如きである。このマーケットに於ては何人も天上の良品を手にすることができるのである。眞理の寶庫は凡てに

開かれ『視よ我なんぢの前に開けたる門を置く、これを閉ぢ得る者なし』（モクシロク三ノ八）と主は宣給うてゐる程である。而してその内部より戸口より來れとの聲は聞え、『われなんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金を買ひて富め』（モクシロク三ノ一八）と頻りに救主の優しき聖聲が響き來るのである。

キリストの福音は恩惠的のもので、何人も所有し得らるゝもので富めるも貧しきも我が所有とすることのできるものであるが、然し如何程世上の富を積んでも買へるものではない。唯眞心より神に服從し自己を全くキリストに獻げ主の購ひ給うた所有とならねばならぬのである。最高級の教育すら人を神に近づけることはできない。昔のパリサイ人は世間的にも靈的にも凡ゆる點に惠まれ『我は富めり、豐なり乏しき所なし』と傲語した程で（その實「惱めるもの憐むべきもの、貧しく、盲目なる者、裸」（モクシロク三ノ一七）なる者であつたが）あつた。然るにキリストが彼等に値たかき眞珠を提供し給うた時、之を侮り、受くることを肯ぜざりしためキリストは彼等に『取税人と遊女とは汝らに先立ちて神の國に入るなり』（マタイ傳二一ノ三一）と仰せ給うた。

救は買取り得るものではないが、我々はそのために世上の一切を擲つて求むる程の熱誠さ、辛棒强さを現さなければならない。

我々は價たかき眞珠を手に入れなければならぬが、世上の方法でもつて求め得るものでなく、又市場で買ひ求め得るものでない。これを所有するために支拂ふべき代價は金でも銀でもない。（金銀は神のものである）世間的に精神的に便宜を有することが救に到る條件であるかの如き考へを一掃しなければならない。神は衷心よりの服從と罪の放棄を求め給うのである。『勝をうる者には我さきに勝を得て我が父と偕に其の寶座に坐するが如く我と偕に我が寶座

に坐することを許さん』（モクシロク三ノ二一）とキリストは仰せ給ふ。

世には常に天上の眞珠を求めてゐるかに見えるが、己が惡習慣を全く擲ち得ないでゐる人々がある。彼らはキリストが彼等の裡に生き給はんが爲未だ自らに死することをしない。ために折角の貴き眞珠をも見出し得ない狀態であるのである。未だに彼等は世間的愛を斷ち得ず聖からざる野心に打負けてゐる。彼等は、十字架を執りて主に從ひ克己犧牲の道を歩むことを肯ぜず、殆どクリスチヤンではあるが完きクリスチヤンとは云ひ得ず、あたら天國の入口まで來てゐながら天國に這入り得ない輩である。殆ど救はれてゐるやうではあるが全く救はれてゐない、換言すれば、殆どでなく全く失はれてゐるのである。

良き眞珠を求むる商人の比喩には二樣の意義がある。それは天國を求むる人々に適用するだけでなく、失はれし嗣業を求め給ふキリストにも當て嵌まるのである。天より來りて良き眞珠を求め給ふ商人——キリストは、失はれし人類中に價たかき眞珠を認め給うたのである。罪のため汚され墮落せる人類に對し贖罪の可能性を認め給うたので、現に惡魔の戰場と化してはゐたが愛の力によつて救はれた魂は、未だ一度も墮落せしことなき者よりも一層貴いのである。神は決して人類を汚らはしき無價値のものとは思ひ給はず、寧ろ之をキリストの中に眺め贖罪愛を通して恢復の見込あるものと認め給うてゐるのである。神はこの眞珠を買ひ求めるために宇宙の富を悉く傾け給うた。『彼等は冠冕の玉の如くになりてその地に輝くべし』（ゼカリヤ書九ノ一六）『我が設くる日にかれらをもて我が寶となすべし』と。（マラキ書三ノ一七）

價たかき眞珠としてのキリスト、斯る天上の寶を所有し得る特權は、我等の絶えず瞑想すべき主題であらねばなら

ない。この良き眞珠の如何に貴重なるものであるかを啓示するものは聖靈である。今日の時代卽ち聖靈時代は別して斯る天上の賜物を探索、發見すべき時代である。キリストの時代に於ても福音に接したものは實に多數であつたが、彼等は當時流布せる僞妄なる敎に誤られ、一介のガリラヤ出の敎師と思はれたイエスが神より遣られたものであることを認め得なかつた。キリストが昇天後神と人間の仲保としての職に就き給うた時、その徵として聖靈の降下を見たペンテコステの日に聖靈が與へられ、キリストの證者達によつて復活の主の能力が稱へられたとき、天來の光は、曾てキリストに逆ふ者によつて欺かれたる者どもの暗黑なる思ひを照した。玆に彼らは『神は彼を君とし救主として己が右にあげ、悔改めと罪の赦とをイスラエルに與へしめ給ふ』（シトギヤウ傳五ノ三一）との事實を承認するに至り天上の輝きを以て圍まれ給へるイエスと、その聖手によつて凡て逆れるもの丶主に立歸るとき與へらる丶無上の寶のあることを認めたのである。

斯うして使徒達が父なる神の獨子の御榮を現すや、三千人の者が罪を認めた。彼等は自己の罪深きこと汚れたるものであることの眞相と、彼等の友にして救主たるキリストの眞相を見せしめられた。彼等にまさ〳〵とキリストは示された。彼等は次いで榮化のキリストを見た。遂に信仰により、このイエスこそ彼等が滅ぶることなくして永生を受けしめんがため、屈辱と苦難と死とを擔ひ給ひし方であることを知つた。聖靈によつて齎されたるキリストの啓示は、彼等をしてイエスの稜威と聖力とに觸れしめ、信仰の手をイエスにさしのべ『我信ず』と叫ばしむるに到つたのである。

玆に於てか復活の主を高揚する喜ばしき音づれは地の涯までも傳へられ、敎會は全地より集まる回心者の群でもつ

て充たされ、舊き信者は悔改めを新にし、罪あるものは悔いて信者と偕に價たかき眞珠を求めた。『弱きものもダビデの如くなるべし、またダビデの家は神の如く……なるべし』（ゼカリヤ書一二ノ八）との豫言は成就した。信者は悉く互の裡に聖き慈愛と慈悲のあふれを見、渾然一つ目的、一つ興味に化せられた。凡てのもの丶心には調和、一致を見、その唯一の野心は主と同じ品性を顯し聖國の擴張のために働くべく集中せられた。『信じたるものの群はおなじ心、おなじ思ひとなり、……使徒たちは大いなる能力をもて主イエスの復活の證をなし、みな大いなる恩惠を蒙れり』『主はすくはるゝ者を日々彼らの中に加へたまへり』（シトギヤウ傳四ノ三二、三三、二ノ四七）と。彼等は價たかき眞珠を見出した。玆にキリストの靈は全會衆を活氣づけ鼓舞したのである。

如上の場面は、より以上の能力を以て再び實現するのである。ペンテコステの時に於ける聖靈の降下は前の雨であつたが、後の雨はこれに倍する目覺ましきものである。今か〳〵と聖靈は我等がこれを懇求することを待ち給ひつゝある。これに應答するのその日こそ、聖靈の力によりキリストは再び全內容を以て示され、人々は貴き眞珠の眞價を認め使徒パウロと偕に『されどさきに我が益たりしことはキリストの爲に損と思ふに至れり、然り、我は我が主キリスト・イエスを識ることの優れたる爲に、凡ての物を損なりと思ひ、彼のために旣に凡てのものを損せしが、之を塵芥の如く思ふ』（ピリピ書三ノ七、八）と公言するに到るのである。

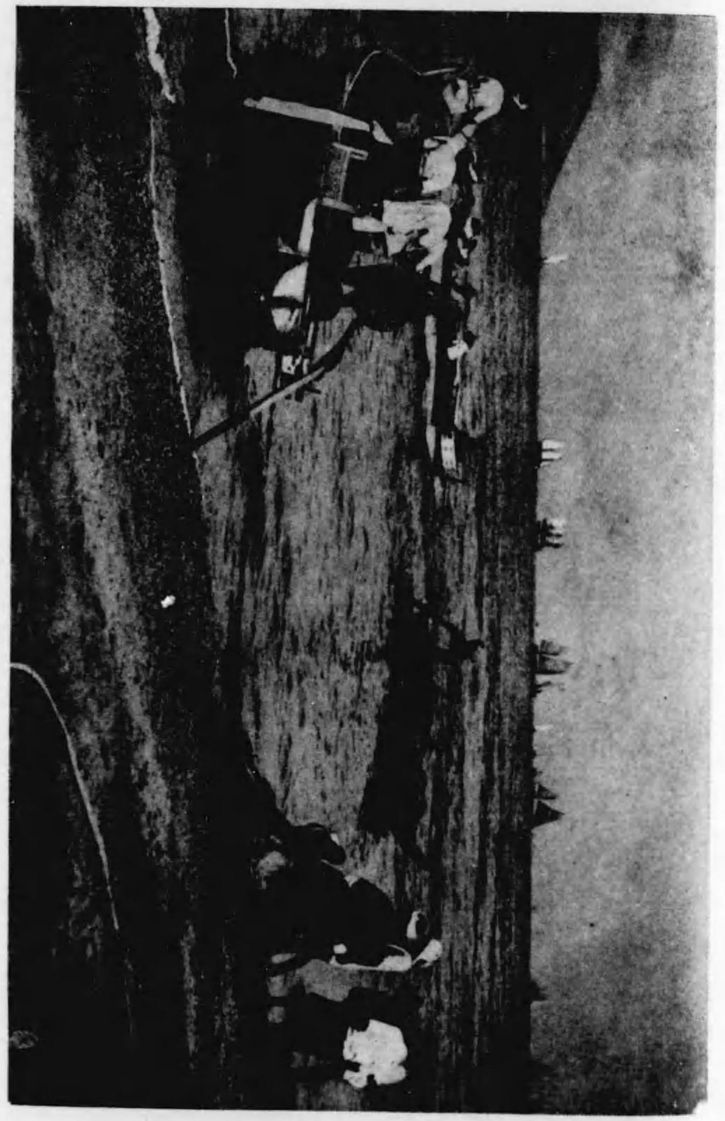
第九章　網

――マタイ傳一三ノ四七―五〇に基く――

『また天國は海におろして各樣のものを集むる網の如し、充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器にいれ惡しきものを棄つるなり、世の終りにも斯くあるべし、御使等いでゝ義人の中より惡人を分ちて、之を火の爐に投入るべし、其處にて哀哭・切齒すること有らん』（マタイ傳一三ノ四七―五〇）

茲では網を打つことは福音宣傳を意味する。斯樣にしてよきも惡しきも教會に聚められ、使命完結の曉に、彼等は擇り分けられ審かれるのである。キリストは教會内の僞兄弟が、如何ばかり眞理に非難の浴せかけらるゝ原因となつてゐるかを御存じであつて斯くは仰せられたのである。

人々は僞信者の矛盾した生活を見て罵り、基督者ですら、キリストの名を呼びながら聖靈の御支配を受けざるものゝ多きに躓く。斯樣な罪人が教會に存在することにより、人々はあるひは神が彼等の罪を是認し給うてゐるかの如く考ふる惧れがあつた。故にキリストは未來の幕をかゝげ、人の運命の決するはその地位・立場にあらで、人格・品性にある事實を知れと命じ給うたのである。曩の毒麥でもこの網の譬でも惡者が全部神に歸ると云ふ如き時期のない事實を明瞭に教示してゐる。よき麥も毒麥も一樣に收穫まで生長をつゞけるのであつて、よき魚も惡しき魚も、共に岸



網　流　大　の　網　現　地

に揚げられてから最後の撰り分が行はるゝのである。

同時に又この二つの比喩は、最早審判後に試練期のないことを示す。福音事業が完成するとき、直ちによき者と悪しき者との區分が行はれ、兩者の運命は永遠に決定するのである。

とは云へ神は何人の滅ぶるをも欲み給はない。『主ヱホバ言ひたまふ、我は活く、我惡人の死ぬるを悅ばず、惡人のその途を離れて生くるを悅ぶなり、汝ら飜へり飜へりてその途を離れよ、……汝等なんぞ死ぬべけんや』（エゼキエル書三三ノ一一）と。試練期を通して聖靈は人々に生命の賜物を受けよと訴へ給うてゐる。斯る訴へを拒んだもののみが滅さるゝのであつて、惡こそは宇宙を破壞するものであるから、罪を絶たざるべからずと神は仰せ給ふのである。罪に固執してゐるものゝみが罪と偕に滅さるゝのである。

第十章　新しきものと舊きもの

――マタイ傳一三ノ五一、五二に基く――

キリストは人々に敎ふる傍ら、弟子達の將來の働に對する準備敎育を施し給うた。彼の敎は、悉く一面に於て弟子達に對する敎訓であつた。網の譬を語り終へて後、イエスは『此事を皆悟りしや』と彼らに訊ね給うた。『主よ然り』と彼らは答へた。そこでイエスは今一つの比喩を以て、彼等の受けたる眞理に對する責任を明示し給うた。『この故に天國のことを敎へられたる凡ての學者は、新しき物と舊き物とを其の庫より出す家主の如し』

財寶をかち得たる家主は死藏することなく、人との交易によつて之を增殖するであらう、譬の中に現されたる家主は所有した凡る貴重なる新品・古品を出したのである、同樣にキリストから眞理を委ねられた弟子達は之を廣く世に傳達すべきであるといふ意味であつた。

心中に福音使命を受けたものにして、誰一人としてその宣傳を希はぬものはない。彼らはキリストによる天よりの愛を表現さなくては居られないのである。キリストを衣たるものは一歩々々と聖靈に導かるゝまゝに、自分の體驗を語るのである。――卽ち神とその遣し給へるイエス・キリストを知らんとして渴仰したことに就き、聖言の探究の結果につき、捧げた祈と經驗したる心靈の惱みに就き、又『汝の罪赦されたり』とのキリストの聖言に接した事實に

つき語るのである。誰でも斯る事柄を秘め置くことは不自然であつて、キリストの愛に充されたる者は、語らずには居られないのである。主が彼らに眞理を保有しめ給ふ多寡に應じて、人々も彼らと同じ祝福に與らせんと希望する。そして又神の豐かな惠みの富を人々に語るとき、語る本人はそれに倍する恩寵の注がるゝを覺ゆるのである。彼らが單純にして素直な童子の如き心の持主となるとき、彼らの心靈は愈々聖化を喘ぎ慕ふに至り、而して益々世に與ふべき恩寵と眞理とを豐かに啓示さるゝにいたるのである。

この眞理の一大寶庫とは、神の聖言――卽ち文字となつて表された聖書と自然てふ神自ら書き錄し給へる書、及び人生の經驗に顯るゝ攝理の書等――を指す。此處からキリストの僕等は寶を引出すのである。眞理の追求に際して徹頭徹尾彼らは人の智慧によらず、神の知識に賴らねばならない。此の世では偉人と呼ばるゝものゝ智慧すら神の前には愚と見らるゝ場合もあるからである。神は御自分の方法を用ひてその求むる者に眞理を賦與し給ふ。

我らが聖言を信じ之を實行するとき、如何なる自然科學も之を理解し得ぬといふことはない。何一つとして人々に眞理を示すに有用な材料とならざるはない。自然科學は親しくキリストの膝下に於て學ぶものにとつて、知識の寶庫であるとも言ふことが出來る。よく〳〵注意して自然の美を眺め、開墾・耕作・樹木の生長・天地間の萬象等から敎訓を學ぶ時は、眞理に對する新しき世界の開けゆく事情を實感せざるを得ないのである。同時に神の人間に對する措置と關聯した神秘、人生の實際に於て見らるゝ神の測り知ることの出來ない智慧と判斷――これらも悉く一箇の寶庫と認め得らるゝのである。

神の知識は極めて明瞭に聖書によつて、墮落人類に顯されてゐる。この聖書こそキリストの測り知るべからざる富

の寶庫である。

玆に神の言といふのは舊新約聖書を指すのである。新舊何れか一つだけで他を缺いでは完全とは言はれない。キリストは舊約聖書も新約聖書と同程度の價値を有するものであることを表明し給うた。キリストは現在救主でありまた世の始から救主であり給うた。彼の神性が人性をとつてこの世に現れ給ふ以前に、既に福音の使命は、アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノアに與へられてゐた。又アブラハムはカナンの地に、ロトはソドムに、この使命を傳へ、各時代に於る忠信なる神の使者達は、來るべきメシヤ卽ちキリストのことを宣傳した。ユダヤ國民の執り行へる儀式・禮典も、キリストの制定にかゝるものであつて、キリストは彼らの犧牲制度の基礎であり、その宗教的諸禮典の本體にて在し給うたのである。神殿にて獻られたる犧牲の血は、神の羔の犧牲を指し示すものであつた。故に凡ゆる型典的獻物はキリストによつて悉く成就したのである。

家長達に現れしキリスト、犧牲奉仕の象徴となれるキリスト、律法の中に描かれたキリスト、數ある豫言者によつて現されしキリストは、舊約聖書中に發見し得る寶であり、その生涯と死、復活及び聖靈を通して現された。又キリストは新約聖書中の寶である。父の榮光の輝きそのものに在すキリストは、舊新約兩聖書を通しての寶である。

使徒達は豫言者達の豫告したキリストの生涯と死と執成との證人として、出でゆかなければならなかつた。キリストの謙遜、その純潔と聖潔、その比類なき愛は、使徒達の傳へたる主題であつた。而も福音を完全に宣傳するためには、キリストの生涯とその教の中に現されたることを語るのみならず、既に舊約の豫言者達が豫告し、犧牲奉仕に由つて象徴されてゐた救主に就ても語らねばならないのである。

キリストが教を垂れ給うたとき、彼自身が曾て家長達と豫言者達に語り給うたところのもの、獨創にかゝる舊き眞理を啓示するに過ぎなかつたが、新しい光が放たれたので、聽者には全然相違つた意味のものゝやうに響いた。彼の説明には常に靈と光とが溢れてゐた。彼はまた聖靈によつて弟子達の靈眼が啓かれ、聖言が絶えず彼らの眼前に開かるゝと共に、新しき美を映出して眞理を人々に傳へ得ることを約束し給うた。

エデンの園に於て救の約束が初めて人類に告げられて以來、キリストの生涯とその品性及び執成に關する問題は絶えず人間の研究題目であつたが、しかし聖靈に感じた心の所有主は皆是等の題目を新鮮な光に照して説き明した。贖罪の眞理は絶えず擴大發展する能力があるのであつて、舊いとは言へ常に新しく、眞理の探究者に一層の榮光と一層の能力とを啓示するのである。

各時代を通じその時代々々の人々に對する使命、卽ち眞理に、新しき發展がある。舊き眞理は悉く本質的なものであり、新しき眞理は舊き眞理から切離されたものではなく、むしろこれが闡明である。舊き眞理を十分に辨へる事によつてのみ、新しき眞理を悟ることができるのである。キリストは弟子達に自己の復活に關する眞理を示し給うた時『モーセ及び凡ての豫言者を始め已に就きて凡ての聖書に錄したる所を説示』（ルカ傳二四ノ二七）し給うた。舊き眞理に格段の光を放たしめたものは、之を新しき眞理として闡明した光に外ならなかつた。新しきものを拒否し或は閑却するものは實際に於て舊きものを有つてゐないものである。斯樣な人々にとつては、それは力なき空しき形式に過ぎないのである。

世には、舊約聖書の眞理は信じ且つ教へるが新約を拒否するものがある。然し彼らがキリストの教を拒否してゐる

事實によつて族長等と豫言者の言葉を信じてゐないことが明かである。『もしモーセを信ぜしならば我を信ぜしならん、彼は我に就て記したればなり』（ヨハネ傳五ノ四六）とキリストは仰せ給うた。故に斯る輩は如何程舊約聖書を說いても力がないのである。

又これとは反對に福音を信じ且つ敎へると主張しながら前者と同じ意味の過ちに陷つてゐるものがある。彼らはキリストが『この聖書は我について證するものなり』（ヨハネ傳五ノ三九）と仰せ給ひし舊約聖書を無視してゐる。この兩者は全く切離すこと能はざる單一のものであるから、舊約を拒むことは事實上新約を拒むことになるのである。何人も福音なくして律法を正しく說き得ないとともに、律法なくして福音を說くことは出來ない。律法は福音の根であり、福音は律法の開く香ばしき花であり、その結ぶ果である。

舊約聖書は新約聖書に光を放ち、新約聖書は舊約聖書に光を投げかける。兩者は共にキリストに在る神の榮光を顯し、いづれも熱心なる探究者に絕えず新しい、深い意義を啓示するものである。

キリストに在り且つキリストによりて見出し得る眞理は、實に無盡藏である。聖書は、探れば探る程深まり廣がり行く原泉を凝視めるやうなものである。人間の罪の代償として聖子を與へ給ひし神の愛の神秘は、到底現生涯に於て會得し盡すことは出來ない。地上に於ける救主の聖業は、人間最高の想像力すら及ばない題目として常に殘されるであらう。人間が凡ゆる智力を傾けて、此の奧義を測らうと努めても、徒らに心意を疲らすにすぎないであらう。如何に勤勉なる探究者でも、遲てしもなく大洋を眺むる自己を見るであらう。

イエスに在る此眞理は、體驗することはできるが說明し盡すことはできない。その高さ廣さ深さは人間の知識を超

絕する。想像力のあらん限りを傾けてもたゞ言句に絕せる愛の朧げな輪廓を描き得るにとゞまる。天よりも高き此愛は、又全人類に神の像を刻印せずにはおかぬものである。

しかし、人間はその身に負ふだけの神の愛憐を見ることができる。碎けた、悔いくづほれた心の持主にはそれが示される。人間に對する神の犧牲を理解し得るだけ、それだけ、神の憐憫を覺ることができる。謙虛な心を以て聖言を探るとき、崇高なる贖罪の眞理が人間の視野に展開される、見れば見る程その光輝は增し、之を掴まうと熱求すれば する程その高さ深さは際限なく增し加はるのである。

人間の生涯はキリストの生涯に結付けられねばならない。人間は絕えずキリストを受け、天來の活けるパンなるキリストを食ひ、常に淸新に常に豐なる實を出す原泉から飲まなければならない。主を眼前に確保し、讃美と感謝を以て主に心を捧げるならば、我等の宗敎生活は絕えず新鮮味を有つことができる。斯くてその祈りは恰も友人と語るやうに、神との會話の形を執り、神は個人的にその奧義を我等に語り給ふ。我等は屢々美しい、樂しいイエスの御臨在を感じ、恰もエノクのやうに我等と語るために傍近く來り語り給ふとき、心の燃ゆるを憶えるのである。かうした事が基督者の體驗の上に眞實となれば、その生活には純粹・謙遜・柔和の德が現れ、心は謙讓になつて、接する人々に彼がイエスと偕にあり、イエスから學んでゐることを感ぜしむるに至るのである。

かうした體驗を有つものにとつてキリストの宗敎は活力あり、滲透力ある主義として、また活きた、働く、靈的精力として顯れるであらう。そこには永遠に若き新鮮味と能力と歡喜とが顯れるであらう。神の聖言を受納れる心は、涸渴する池、又漏れては用をなさぬ槽の如きものとはならない。常に絕ゆることなき谿水の如く、岩より岩へと泡沫

を飛ばしつゝ流れて、重荷に喘ぎて疲れ、渇ける者を元氣づけるのである。

斯る經驗は眞理を宣べ傳ふる者をして、悉くキリストの代表者たるの資格を有たしむるものである。キリストの教の精神が、かゝる眞理の宣傳者の語るところに、またその祈に力と率直さを與へる。かゝる宣傳者のキリストに關する證は狹隘な、生命のない證ではなく、その說は千篇一律的のものでない。その心は聖靈の間斷なき光に照らされてゐるであらう。

キリストは『わが肉を食ひ、わが血を飲む者は永遠の生命をもつ、……活ける父のわれを遣し、我の父に由りて活くる如く、我を食ふ者も我に由りて活くべし……活すものは靈なり……我がなんぢらに語りし言は靈なり生命なり』（ヨハネ傳六ノ五四—六三）と仰せ給うた。

キリストの肉を食ひ血を飲む者には、永生の素とも云ふべき力が働らきの上に現る。かゝる人からは氣の拔けた定まりきつた考へ、だら〳〵した勢ひのない說教の如きは藥にしたくとも聽かれず、舊き眞理も提示さるゝや新しき光を放ち、眞理に對する新なる認識、從來になき明快さと能力を聽者に喚起せしめる。而して斯る言に接するの特典に浴したるものは聖靈の働きに敏感である限り新生に入らしめずしてはおかぬ力を感ずるにいたるのである。裏には神の愛の焰が燃上り、知覺力が蘇り、眞理の壯絕にして優美なる事實に打たるゝのである。

青少年教育の任に當る教師は、譬にある忠實なる主人のそれと等しき立場にある。彼が聖言を己が寶とするとき、其處からは絕えず新なる美と新なる眞理を出すことができる。

教師の職にあるものが、神に賴り、祈りに努むるとき、キリストの靈は彼に宿り、神は彼を通し聖靈により人々の

腦裏に働き給ふのである。この聖靈は望と勇氣、聖書的感化を彼に與へ、更に之は彼の指導を受けつゝある青少年にまで傳はるのである。

天來の平和と歡びの泉は、教師の心中に湧き出で、靈感に充されたる言葉となつて現れ、更にまた一大感化の流れとなつて接觸する凡てのものを霑すにいたるのである。このとき最早聖書は生徒にとりて倦怠を催さしむる書とはならず、愈々慕はしき聖言となる。古びることなき生命のパンの如く、如何にも淸新にして優美なるもの、靑少年を惹きつけ魅せずしては止まぬものとなる。又恰も地上を照す太陽の如く、絕えず光輝を送り暖味を與へ、而も盡るところがないのである。

聖言の中には神聖にして敎化・啓發せずしては止まぬ靈が宿つてゐる。淸新にして貴重なる光が、その全頁から輝きいで、眞理が現され、その一句々々が、心中に語る聖聲として光輝を放つてゐる。

聖靈は若きものと語ることを好み、彼らがその中より聖言の美と己が寶とを發見することを望み給ふ。この偉大なる敎師の語れる樣々の約束は、彼らを恍惚たらしめ、その心靈を天與の靈力にて充し、神事に通曉せしむるの結果、誘惑に勝利せしむる。

聖言の眞理は益々重大性を帶び、深遠なる意義を生じ、優美にして高雅なる聖言は、人格の上に更新力を及ぼす。斯くの如く天與の愛より放たるゝ光輝は靈感の如く心中に臨むのである。

聖言の眞價はこれを究むるに從つて發揮せらるゝもので、何れの頁を飜へしても、其處に神の愛と無限の知識の現れが見られるのである。ユダヤ人の神殿の奉仕や犧牲制度の眞意は未だ充分に解されてゐない。その儀式と象徵中に

は深遠且崇高なる眞意が隱されてゐる。然し福音はその神秘を開く鍵である。贖罪の計畫に通曉することにより、その眞意を解することができるのである。現在以上の研究により斯る題目を解することは實に我らの特權である。我らは又神の深きことも解すべきである。悔いし心の持主が聖言を探り、神のみの與へ得る深遠なる知識を祈り求むる場合に現さるゝ眞理は天使達すら知らんことを希つてゐるものである。

愈々世界歴史の終の近づくに從ひ、末の日に關はる豫言を特別に研究する必要がある。又新約聖書の最後には是非とも我らの理解せねばならぬ眞理が數々ある。然るにサタンは多くのものゝ心を暗ましし、彼らに默示錄研究に從はしめざるやう樣々の口實を與へてゐる。これに反しキリストは、僕ヨハネを通して、末の日に如何なる事件の起るべきかを告げ『この豫言の言を讀む者と、之を聞きて其の中に記されたることを守る者等とは福なり、時近ければ也』（モクシロク一ノ三）と仰せ給うた。

『永遠の生命は、唯一の眞の神に在す汝と、汝の遣し給ひしイエス・キリストとを知るにあり』（ヨハネ傳一七ノ三）と。しかるに我々は何故かゝる眞の知識の自覺に乏しいのであらうか。斯くも榮ある眞理が、何故に我々の心を熱せしめ唇を震はせ、全身に深き感動を及ぼさないのであらうか。

我々が救に要する凡ての眞理を把握し得る事は、神が聖言を賦け給うたる事實によつて確め得られるのである。今日に至るも多數のものが間斷なく生命の泉を掬するけれどもついぞそれの涸れたことを聽かない。又無數のものは斯る主を己が前に置き、それを眺めて次第に同じ姿と化しつゝある。彼らはイエスの人格に就て語り、又キリストは如何なる關係のものであるかを語るとき、自らの心の中に燃ゆるを覺える。而も彼らは斯くの如き崇高且神聖なる題目

を究め盡すことができないでゐる。まだ無數のものが救の奧義を探り求めて差支へない。キリストの生涯とその使命を考察するときは、考察毎に層一層鮮かなる光が照り、從來啓示せられたる以上の興味津々たる事實が顯れ、研究課題は盡くるを知らぬのである。キリストの受肉、彼の死と仲保とは眞摯なる研究者の現世及び來世を通しての研究題目であり天を仰ぎつゝ『敬虔の奧義は大なる哉！』と感嘆せずにゐられぬであらう。

榮光の王國に於ては、我らに靈眼の開けたる場合、當然この地上に於て解し得られし筈の事實に就て學ぶ。贖罪問題は未來永劫を通じ凡て贖はれし者が、その心と念ひと言とを傾けて學ぶところの主題である。その時彼らは、曾てキリストが弟子達の信薄きために示す能はざりし眞理を學ぶに至り、愈々キリストの完全にして榮ある事を新に解し得るのである。忠實なる家主キリストは、永遠に亘りその庫より新しきもの舊きものを出し給ふのである。

ゲッセマネの祈り

第十一章　與へんがために求む

—ルカ傳一一ノ一—一三に基く—

キリストは絶えず天父より受け給うてゐたが、これは我々人類に授けたいとの願からであつた。『汝らが聞くところの言は、我が言に非ず、我を遣はし給父の言なり』（ヨハネ傳一四ノ二四）『斯の如く人の子の來れるも事へらるゝ爲に非ずかへつて事ふることをなし』（マタイ傳二〇ノ二八）と仰せ給うた如く、御自身のためではなく、人々のために生活し考慮し且つ祈禱し給うたのである。幾時間も幾時間も神との交りに時を過し給うた。然る後人々をして天與の光明に接せしめんがため毎朝毎朝出で來り給うたのである。日々彼は聖靈の新なるバプテスマを受け給うた。朝まだき父によつて目醒めしめられ、人々に頒ち得んためにその靈魂と唇に恩寵の膏を注がれ給うた。又世の倦み疲れ虐げられし者に機に適ひたる言を出し得んために天の使の聖言を賜はつた。『主ヱホバは敎をうけしものゝ舌をわれにあたへ、言をもて、疲れたるものを扶け支ふることを知り得しめ給ふ、また朝ごとに醒しわが耳をさまして敎をうけし者のごとく聞くことを得しめ給ふ』（イザヤ書五〇ノ四）と。

弟子達は、斯るキリストの祈禱と、絶えず神と交り給ふ習慣に對し異常なる感動を受けた。ある日彼らが暫時外出して歸つて見ると、祈禱に餘念なき主を見出した。主は彼らの歸つたことも氣附かず聲を擧げ祈り續け給うてゐた。

これを見て弟子達は非常に心動かされ、祈禱が終ると、一齊に『主よ我儕にも祈ることを敎へ給へ』と叫んだ。

これに答へてキリストは、さきに山上の垂訓中に於て語り給ひし主の祈りを再び繰返し、然る後次の譬を語り給うた。

『また言ひ給ふ。なんぢらの中たれか友あらんに、夜半にその許にゆきて「友よ、我に三つのパンを貸せ。わが友旅より來りしに、之に供ふべき物なし」と言ふ時、かれ內より答へて「われを煩はすな、戶ははや閉ぢ、子らは我と共に臥所にあり、起ちて與へ難し」といふことありとも、われ汝ら告ぐ、友なるによりては起ちて與へねど、求めの切なるにより、起きて其の要する程のものを與へん。』（ルカ傳一一ノ五―八）

玆ではキリストは與へんがために求むる哀願者として表示せられてゐる。どうしてもパンを得なければならない。それが得られなければ、行き暮れ疲れ果てし旅人の必要を充すことができないのである。その隣人は煩はさるゝことを好まぬながらその懇請を否む譯にはゆかぬであらう。朋輩なる旅人を救はねばならぬため、しつこく友人のせがんだ結果、懇請は聽かれ、終にその要求は充されるのである。

同樣弟子達も祝福を神に求めねばならなかつた。大衆を養ひ給うたことゝ天來のパンに關する說敎とによつて、キリストは己が代表者たる彼らの爲すべき働を示し給うた。彼らは生命のパンを人々に頒たねばならなかつたのである。彼らに斯樣な働を定め給うたイエスは、その信仰の屢々試みらるゝ事實を告げ給うたのである。時として彼らは豫期せざる立場に立たしめられ、自己の人間的無能を實感する場合がある。生命のパンに飢ゑた者が彼らの許に來り而も之を頒つべき當人がそれの缺乏と無力とを痛感することがある。彼ら自身が靈の糧を受けなければ分ち與へよ

うにも與へ得ぬ窮境に立到ることがある。この場合食はせずして去らしむる如きことをせずとも濟む。キリストはそれの在處を示し給うた。譬では時もあらうに夜半に朋輩の來訪を受けたが、彼はこれを却けなかつた。生にく客に差出す食物は何一つなかつた。けれども、食物ある隣人の許にゆき、懸命に求めて食物をえた。同樣飢ゑたるものに食を與ふるため僕を遣し給へる神が、聖事業上の要求を充し給はぬ如き道理があらうか。

譬にある不親切なる隣人は、何も神の御品性を表示するものではない。茲では比較としてさはなく對照として用ひられてゐるのである。不親切なる隣人は、あまりにせがまれるものであるから、己が休息を碍げられないため、渋々要求に應じた。然し乍ら神は與ふることを喜び給ふ方である。同情と理解に富み、信仰により聖許に來るもの、求めに喜んで應じ給ふ方である。ましてや人々に奉仕するために求むるのであるから、之を與ふるに吝ではないのである。斯くの如く我々も彼と同一態度を執ることができるのである。

故にキリストは『求めよ然らば與へられん、尋ねよ然らば見出さん、門を叩け然らば開かれん、すべて求むる者は得、たづねる者は見出し、門を叩く者は開かるゝなり』と仰せ給うたのである。

尚引續き主は『汝らのうち父たる者、誰か其の子魚を求めんに魚の代りに蛇を與へ、卵を求めんに蠍を與へんや、然らば汝ら惡しき者ながら善き賜物をその子らに與ふるを知る、まして天の父は求むる者に聖靈を賜はざらん乎』と宣給うた。

神に對する信頼を一層強むるため、キリストは神を新しき聖名――人の心に最も親しみを懐かしむるところのもの――を以て呼ぶべきことを教へ、無限の神を我らの父と稱ふるの特權を授け給うた。我らが神を父と呼ぶ場合、一面

これは神に對する愛と信頼の表示であるとともに、我らに對する神の眷顧及び關係を證據づけるものである。我々が惠みと祝福とを求むるために父と呼びかくるとき、神はこれを悅び給ふのである。我々が斯うした呼び方をすることは決して僭越・冒瀆ではない。この事に就ては神は再三仰せ給うてゐる。我々がかゝる名稱になじむことを神は希望し給うてゐるのである。

神は我々を自分の子供と見做し給うてゐる。冷かなる世より我らを贖ひ王家の一員となし、天上なる王の息子息女となし給うた。世上の父に對する子供の信頼以上の强き信頼を以て彼に縋ることを望み給うてゐるのである。成る程親達はその子供を愛する。然し神の愛は人間愛の到達し得る最高のものに比べても尚且偉大・宏量・深遠なるもので到底計量し得べくもないのである。世の親達がその子供によき賜物を與ふることを知つてゐるとするならば、ましてや天の父は求むるものに聖靈をさづけ給はぬ如きことがあらうか？

祈りに關するキリストの教訓は精密に考察しなければならない。それには祈禱の科學が示されてゐる。彼の語り給ひし例話の中には、何人も理解せなければならない原理が顯れてゐる。茲に彼は祈禱の眞精神の何たるかを示すとゝもに、いざ神に求むる場合には、辛抱强く求めねばならぬこと、同時に神は衷情から我らの祈禱を受け容れ、成就を希みて止み給はぬ事實を教へ給うたのである。

又我々が祈るとき、自分勝手な要求のみをしてはならない。我々は與へんがために之を求むべきである。キリストの生涯の主調となつたものは、同時にまた我々の生涯の主調とならねばならない。キリストは弟子達のことを述べて『また彼らのために我は己を潔めわかつ、これ眞理にて彼らも潔め別たれんためなり』（ヨハネ傳一七ノ一九）と仰

せ給うた。キリストに於て表示せられたる同一の熱心、同一の克己、同一の聖言に對する服從が彼の僕に顯されなければならない。世に對する我々の使命は、己を喜ばせ、己に仕へることでなく、寧ろ神と協力して罪人を救ふために働き神の榮を擧ぐることにある。故に我らは神に祝福を求むるとゝもに、之を人々に頒たねばならない。いつたい受容能力と云ふものは、之を分與することによつて平衡を保ち得るもので、天來の寶を絶えず受けながら之を周圍のものに頒たずしておくが如きことはあり得ないのである。

譬に於ける哀願者は再三再四斥けられたけれども、これにひるむことなく、敢て目的とするところを拋擲しなかつた。同樣我らがいくら祈つても些しも應驗なきかの如く思惟さるゝ場合にも祈ることを止めてはならぬとキリストは敎へ給ふのである。然し乍ら玆で心得ておかなければならぬことは、祈禱することが神の側に何らかの變化を來らせるものではなく、これによつて神との調和が我々の上に齎される事である。我々が神に願事をするとき、彼は我らが深く自らを省み罪を悔改むる必要を認め給ふが故に試練に遭遇せしめ、これによつて我らが謙遜となるに及んで、聖靈の働きを碍げるものゝ何たるかを解せしめ給ふのである。

神の約束の成就には條件がある。祈禱したからと云つてそれでそのものゝ責務が免ぜられた譯ではない。キリストは『汝ら若し我を愛せば我が誡命を守らん』『我が誡命を保ちて之を守る者は、卽ち我を愛する者なり、我を愛する者は我が父に愛せられん、我もこれを愛し、之に己を顯すべし』（ヨハネ傳一四ノ一五、二一）と仰せ給うた。神の約束を楯に祈願をしながら之が條件に應ずる事をしない者は、ヱホバを侮辱するものである。彼らはキリストの聖名を約束の成就に對する根據として迫るけれども、半面キリストに對する信仰と愛を示すことを肯ぜざるものである。

神に受け容れらるべき當の條件を無視してゐるものが多いのであるから、我々を神に近づけしむる信賴そのものを仔細に吟味する必要がある。不從順であることは丁度現金に替へるに必要であるところの條件を缺いた手形を持つて來て、現金の支拂を迫るやうなものである。

聖約束に曰く『汝らもし我に居り、我が言なんぢらに居らば、何にても望に隨ひて求めよ。さらば成らん』（ヨハネ傳一五ノ七）と。この點ヨハネも『われらその誡命を守らば、是によりて彼を知ることを自ら悟る。われ彼を知ると言ひて其の誡命を守らぬ者は僞者にして、眞理その裏になし。その御言を守る者は誠に神の愛其の裏に完うせらる、之によりて我等彼に在ることを悟る』（ヨハネ第一書二ノ三—五）と云つてゐる。

キリストの弟子達に對する最後の誡の中にも『我がなんぢらを愛せし如く、汝らも相愛すべし』（ヨハネ傳一三ノ三四）とある。果して我らは斯る誡を遵奉してゐるであらうか。それともキリスト者として應はしからぬ酷なる性癖を顯してゐはしないか？　斯る場合その過ちを懺悔し和解を求むる事は我々の當然爲すべきことである。之が信仰を通して聖前に出で祝福を求むるに缺くべからざる準備である。

尙この他にも主に祈るものゝとかく看過し易き事柄がある。果して我々は神の御前に正直な態度を執つてゐるであらうか、豫言者マラキを通して主は次の如く仰せ給うてゐる『なんぢら其の先祖等の日よりこのかたわが律例をはなれてこれを守らざりき、我にかへれ、われ亦なんぢらに歸らん、萬軍のヱホバこれを言ふ、然るに汝らはわれら何においてかへるべきやといへり、ひと神の物をぬすむことをせんや、されど汝らはわがものを盜めり、汝らは又何において汝の物をぬすみしやといへり、十分の一および獻物に於てなり』と。（マラキ書三ノ七、八）

凡ての祝福の賦與者として神は、我々の所有の幾部分を要求してゐ給ふ。彼は之を福音事業の維持に充てゝゐ給ふのである。之を神に返すことは賜はりたる祝福に對する感佩の發露に他ならない。我らが萬一神のものを私してゐる場合如何で神に祝福を求めることができよう？　地上の事物に不忠實であるものに如何で神は天上のことを委ね給ひ得ると考へることができよう！　祈禱の答へられざる理由を玆に見出すことができるのである。

とは云へ主は我らを快よく赦し次の如く仰せ給ふ『わが殿に食物あらしめんために汝ら什一をすべて我が倉にたづさへきたれ、而して是をもて我を試み、わが天の窓をひらきて容るべきところなきまでに恩澤を汝らにそゝぐや否やを見るべし、萬軍の主ヱホバこれを言ふ、我また噛食ふ者をなんぢらの爲に抑へて、なんぢらの地の產物をやぶらざらしめん、又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を圃におとさざらしめん、萬軍のヱホバこれをいふ、又萬國の人なんぢらを幸福なる者ととなへん、そは汝ら樂しき地となるべければなり、萬軍のヱホバこれをいふ』（マラキ書三ノ一〇―一二）と。

故に他の方面に於ける神の御要求と同じく、一切の賜物は、服從てふ條件の下に與へらるゝのである。天の御庫は神と協力して働く者の爲に祝福に充滿してゐるのであるが、服從するものゝみが確信をもつてこの聖約束の成就を求むることができるのである。

同時にまた神による確固不拔の信仰を表示しなければならない。屢々神は我らの求めに對しその答を遲らせ給ふことがあるが、これとても我らの信仰を驗しその欲求の純、不純を試むるためなのである。故に我らは聖言の示す所に從ひ、神に求めその聖約束を信じ、決して斥けらるゝものでないことを確信しつゝ押强く祈り求めねばならない。

神は一度だけ祈れば與へるとは仰せ給はなかつた。然し求めよと命じ給うてゐる。不撓不屈の祈禱、ひるむことなき祈は、祈る當人を次第に熱心ならしめ、その願事に對する欲求を益々熾烈ならしむるものである。ラザロの葬られてゐる墓の側で、キリストがマルタに仰せ給うたる『われ汝に、もし信ぜば神の榮光を見んと言ひしにあらずや』（ヨハネ傳一一ノ四〇）の言葉は意味深長である。

悲しき哉、多くのものは生きたる信仰を有つてゐない。之が神の大なる聖力に觸れ得ない理由である。不信の結果彼らは軟弱無力になつてゐるのである。神が彼らのために爲し給ふことは一向に考へず、みづから之を成就し自ら之を處置せんとして種々と計畫し考案するが、ともすれば祈ること、神に賴ることは忘れ勝である。自分では如何にも信仰あるものゝ如く考へるが、それは唯瞬間的なる衝動に過ぎない。己の必要を自覺せず、且神がよろこんで與へんとし給うてゐる事實も悟らず、聖前に求むるところを告ぐることも敢てしないのである。

我々の祈は、譬にある友人が夜半にパンを求めた時の如く、不撓不屈のものでなければならない。我々が屈することなく熱心に求むるだけ、キリストとの靈的結合も愈々緊密にせらるゝのである。信仰が、彌增すにつれ、與へらるゝ惠みも彌增すのである。

信じて祈ることが肝要である。警醒して祈り、祈りを聽き給ふ神と力を協すことが肝要である。『我等は神と共に働く者なり』（コリント前書三ノ九）との事を念頭におき、祈りとそれに一致したる言行動作をすることが肝要である。試練によつて我らの信仰の純眞なるものであつたことを證するのと、我らの祈禱が單なる形式に過ぎなかつたことを示すのとは、非常なる相違である。

種々の困難や當惑する如き事件に遭遇する場合、徒らに人間の助けを求めず、萬事神に頼らねばならぬ。自己の困難を他に語ることは、自分を弱めることであると共にそれは格別他には力とならず、却つて彼らに如何とも爲す能はざるところの精神的重荷を負はすことゝなるのである。謬つことなき無限なる神の力を仰ぎ得るにも拘らず、徒らに謬り多き有限なる人に縋ることゝなるのである。

近くに神が在すのであるから、無暗と地の涯まで智慧を探し廻る必要はないのである。我々の今迄に又現に所持してゐる能力が成功をかち得さするものではなく、神の我々になし給ふところによるのである。故に人間の力には頼らず、信仰する者に顯さるゝ神の能力に頼らねばならない。神は我らが信仰の手を伸ばして彼を捉へ、彼にありて大々的期待を懷くことを熱望して止み給はぬのである。神は物質界及び靈界の事物に對する理解を望み給ふと共にそれに必要なる知能を賦けてゐ給ふのである。自己の才能を働かせつゝ神に向ひ智慧を求むるとき、それは必ず與へらるゝのである。

この場合キリストの聖言を楯に堅く立たねばならない。既に彼は我に來れと招き給うてゐるのである。斷じて失望落膽したる如き語氣を洩してはならない。それでないと多くの點に損失を招くのである。困難に襲はるゝ場合事物の表面のみを見て呟く者は、その當人の信仰の病的にして薄弱なることを顯すものである。寧ろ言行を通して侵すべからざる信仰を思はすべきである。神は裕なる資源を有し給ふ御方である。全世界は彼のものである。故に信仰を以て天を眺め、光明と權威と能力を有し給ふ神を仰ぐべきである。

純正なる信仰とは、彈力性に富み、主義には忠實、目的とするところには堅忍不拔、如何なる辛苦もまた時日もこ

れを鈍らす能はざるものである。『年若きものはつかれてうみ、壯んなるものも衰へおとろふ、然はあれどヱホバを俟望むものは新なる力をえん、また鷲のごとく翼をはりてのぼらん、走れどもつかれず歩めども倦まざるべし』（イザヤ書四〇ノ三〇、三一）と。

人々を助けたいは山々であるが、飜つて自分はと云へば何一つ人に分け與へるだけの靈性上の力も光明も持ちあはさないと歎ずるものがある。斯樣な人々は惠みの御座に己が願を告げ、聖靈を哀願すべきである。凡ての約束を錄させ給ふ當の彼は其處に立ち給うてゐるのであるから、聖書を手にして『神よ私はあなたの仰せ通りいたしました。今あなたの「求めよ然らば與へられ、尋ねよ然らばあひ、門を叩けよ然らば啓かるゝを得ん」との聖約束を聖前に捧持して玆に跪づくものであります』と云ふべきである。

我らはキリストの聖名により祈るのみならず、聖靈の感動によつて祈るべきである。『聖靈みづから言ひがたき歎をもて執成し給ふ』（ロマ書八ノ二六）とはこのことである。斯くの如き祈りを神は喜んで聽き容れ給ふのであつて、我らがキリストの聖名により熱心に誠心誠意息づき祈るとき、斯る心境そのものに『我らの凡て求むるところ、凡て思ふところよりも甚く勝ることをなし得る者』（エペソ書三ノ二〇）の聖約束が加はるのである。

キリストは『凡て祈りて願ふ事は、すでに得たりと信ぜよさらば得べし』（マルコ傳一一ノ二四）『汝らが我が名によりて願ふ事は我みな之を爲さん、父、子によりて榮光を受け給はんためなり』（ヨハネ傳一四ノ一三）と仰せ給うた。主の愛弟子ヨハネも聖靈の感動のもとにこの事實を次の如く力强く明快に述べた。『我らが神に向ひて確信するところは是なり、卽ち御意にかなふ事を求めば、必ず聽き給ふ。斯く求むる所、何事にても聽き給ふと知れば、求

めし願を得たることをも知る』（ヨハネ第一書五ノ一四、一五）故に我らは求むるところを熱切に押強くイエスの聖名によつて父に乞ふべきである。必ずや神は斯る聖名を崇め給ふに相違ないのである。

御座を圍む虹は神の眞實なることの保證である。げに彼は變ることなく、回轉の影なき者である。我々人類は神に罪を犯し、その寵遇に浴するには適しからぬものではあるが、神はそれをも意とし給はず、我らの 唇 をして『汝の名のために我らを棄て給ふ勿れ、汝の榮の位を辱しめたまふ勿れ、汝のわれらに立てし契約をおぼえて毀り給ふなかれ』（エレミヤ記一四ノ二一）と叫ばしめ給ふのである。故に我々が神に告白と懺悔をなし聖前に出づるときその叫びを聽くと約束し給うてゐるのである。榮光に輝く御座も一に我ら人類の救のために賜けられてゐるのである。

キリストを象徴したるアロンの如く、救主イエスは神の民の名を胸間に錄しこれを懸けて聖所に奉仕し給ふのである。斯くの如き大祭司イエスは、我らを助け勵ますために語り給へる凡ての言を憶え、常にこれを思ひ居給ふのであつて、交せる契約を忘れ給ふ如き方ではないのである。

凡て尋ぬるものは之を得る。又叩くものゝ前に門は開かれる。我を煩すな最早戸は閉ぢ開くを好まずと云ふ如き遁辭は決して仰せ給はない。又爾を助くるを好まずと云ふ如き語を斷じて語り給はない、夜中に餓ゑたるたましひに食せしむべきパンを乞ふものには必ず與へらるゝのである。

譬の中で旅人のためにパンを求めたものが『必要なだけ』與へられたる如く、神は人々に願つべき量に應じ『キリストの賜物の量に隨ひて』（エペソ書四ノ七）我らに與へ給ふのである。天使達は我々が如何に同胞を遇するかを興味ある眼でもつて見てゐるのである。誰かがキリストの如き同情を誤てるものに顯すとき、天使達は彼の傍に寄り添

ひ、そのたましひにとりて生命のパンとも云ふべき忘るべからざる言を彼の口より語らしむるのである。『神は己の富に隨ひ、キリスト・イエスによりて、汝らの凡ての窮乏を榮光のうちに補ひ給』（ピリピ書四ノ一九）ふのである。若し我らの證する處が實際體驗上から來たものであるならば、神はそれを用ひて大なる働をなし給ふのである。この場合聖言は、義の言葉、眞理の言葉として我らの 唇 より 迸 り出づるのである。

救靈の科學には大なる智慧と大なる理解とが必要であるから、人々のため個人的働を開始する前に密室の祈りに努めねばならない。先づ以て天の惠みの御座に於て、奉仕に當る準備を完うしなければならない。

我々は心中神—を生ける神を絶えいるばかりに慕ひたいものである。キリストの御生涯は人間が神性を有する場合に如何なることを爲し得るかの好實驗である。キリストが神より受け給うたものは 悉 く我々も所有することができるのである。故に我々はこれを手に入れたいものである。ヤコブの如き不撓の信、エリヤの如き不拔の態度を以て聖約束の 悉 くを乞ひ求めたいものである。

その心が光輝ある神への觀念によつて充され、その生活がイエスの生涯との見えざる連鎖たらしめたいものである『光、暗より照り出でよと宣ひし神は』（コリント後書四ノ六）衷情より『我儕をしてイエス・キリストの面にある神の榮光を知る知識を輝かしめんために我らの心を照す』べく懇望して止み給はぬのである。聖靈は神のものをとりて我儕に示し、柔順なるものゝ心に之を活ける力として顯し給ふのである。又キリストは我らを導きて無限界の闕に立たしめ給ふ。之によつて我らは幕の彼方の榮光に接し、常に我らのために生き執成し給ふイエスを人々の前に十全に顯すことができるのである。

パリサイ人の祈と稅吏の祈

第十二章　二人の禮拜者

――ルカ傳一八ノ九―一四に基く――

己を義とし他人を輕しむる人々に對し、キリストはパリサイ人と稅吏の譬を語り給うた。譬にあるパリサイ人は禮拜のために宮にのぼつたが、それは罪の赦を得る必要からではなく、己を義と考ふるところから賞讃を博さんがためであつた。彼は禮拜そのものを、神に對し己の受けをよくするための吹聽行爲の如くなし、一方また人々に對しては如何にも敬虔振らんとした。實際彼は、神よりの寵遇と人よりの人氣を得んとして汲々としてゐたのである。彼の禮拜行爲は私利私慾より出でたるものであつた。

斯くて彼はあくまで自己稱揚の態度をもつて歩み來り祈禱した。『人に云ふ汝其處にたちて我に近づくなかれ、そは我汝よりも聖しと、彼らはわが鼻のけぶり終日もゆる火なり』（イザヤ書六五ノ五）とでも言ひたい樣子で遠く人々から離れ『たちて心の中にて祈』つた。自己滿足に溺惑した彼は、神も人も一樣に彼を見て滿足に思ふに相違ないと考へた。而して彼は『神よ我は他の人の、强奪、不義、姦淫するが如き者ならず、又この取稅人の如くならぬを感謝す』と言つた。彼は己が品性を神の聖き品性に照すことをせず、他人の品性に照して評價した。つまり彼は心の眼を神より離して人に注いでゐたのであつたが、彼の自己滿足はこのところから其の端を發してゐたのであつた。

尚又彼は己が善行を數へあげて言つた。『我は七日間に二次斷食し、すべて獲るものゝ十分の一を獻ぐ』と。元來このパリサイ人の宗教は、心靈とは何ら交渉をもたぬところのものであつた。彼は毫も品性の聖化卽ち心靈に愛と仁慈の溢れを求めず、所謂外的行爲に現るゝ宗教を以て滿足した。從つて彼の義は己が義――己が行爲の果であり人間を標準とせる義――に他ならなかつた。

誰にても己を義しとする人は必ず他の人を賤しめる。パリサイ人が他人を以て己を評價せし如く、他人を評價、批判する。卽ち人を以て己が義を評價するから、人がよくなければないほど之と比べて自分の義が見えて來る譯である斯樣なる己を義とする念から他を非難せずにはゐられなくなり『他の人』を恰も神の律法に背反するものであるか何かの如く宣言するやうになる。然し乍ら斯ることは兄弟を訴ふるところのサタンの精神から發するものであるから、之では到底神との交りに入ることはできない。結局何一つ神よりの祝福に與ることはできないで歸宅しなければならない。

一方稅吏も他の禮拜者に雜つて神殿に來たが、彼は人々と共に祈禱を捧ぐるの價値なきものと考へ、彼らから離れ退き、遙かに立ちて『天をも仰ぎ見ず』深き悲しみと自己嫌忌の念を懷きつゝ『胸を打』つた。彼は神の聖前に立ちて己は罪を犯せる穢れたるものであることを感じてゐた。又周圍のものも侮蔑の眼を彼に投げつけてゐたから、彼らからは些かの憐みすら期待することができなかつた。彼は神より稱揚を受くべき何ら資格なきものであることを感じつゝ絶望的に叫んだ『神よ、罪人なる我を憐み給へ』と。此の場合彼は決して自分と他とを比較しようとはしなかつた。己の罪深きことを認め懺きつゝ神の聖前にあるかの如き態度で立つてゐた。彼の望むところは赦と平安との他の

何ものでもなく、求むるところはたゞ神の憐憫のみであつた。このとき彼が祝福を蒙つたことは、キリストが『此の人は彼の人よりは義とせられて家に歸りたり』と宣給うたことに徵しても解る。

神に禮拜するために來るものを二區分するならば、パリサイ人型と稅吏型との二つにすることができる。既にこの兩者の代表的なるものを、この世界に生れ出でたる最初の二人の子供に於て見ることができる。アダムの長子カインは自己を義とし、神の前に感謝の捧物のみを携へて來た。彼は罪の告白をなさず、神の憐憫に縋る必要を認めなかつた。これに反しアベルは、神の羔を指示する血を携へて來た。このことによつて彼は、自分が罪人である事と、失はれし滅びの狀態にあることを告白した。彼にとつて唯一の希望は、神の絕對的なる愛に縋ることであつた。是故に神は彼の獻物を顧み給うたが、一方カインとその獻物とは顧み給はなかつた。缺乏感を懷くこと、自己の貧窮と罪を承認することは、神に受け容れらるゝ第一條件と云はねばならない。『幸福なるかな、心の貧しきもの、天國はその人のものなり。』（マタイ傳五ノ三）

我らはパリサイ人と稅吏とによつて表示せらるゝ二つの相をペテロの生涯に當嵌めて學ぶことができる。初期のペテロは、如何にも强きものであるかの如く自らを高く持し『我は他の人の如く有らざるを謝す』となす類であつた。彼は主を知らずと云つて拒む日の夕刻、キリストが弟子達に對し『今夜なんぢら皆躓かん』（マルコ傳一四ノ二七）と警告を發し給うた時、如何にも自信あるかの如き態度でもつて『假令みな礙くともわれは然らじ』（マルコ傳一四ノ二九）と答へた程であつた。此の場合ペテロは自分の危險狀態に就て知るところがなかつた。自負心が彼を誤らしたのである。彼は自分で誘惑に對抗し得ると過信してゐたが、それから數時間ならずして試みが臨んだとき、誓言ま

でして主を否認してしまつた。

鷄の鳴聲にふと我に立歸つた彼は、キリストの御言を憶ひ起した。自己の爲したることに就て戰慄恐怖しつゝ振返り主を見た。

時しもキリストはペテロを眺め給うた。主の悲しげなる御表情の奥には愛と同情との雜れるものがあつた。このときペテロは我に歸り外に出で激しく泣いた。キリストの御表情の裏に彼の心を打つものがあつたのである。遂にペテロには回轉期が臨んだ。悲痛の裡に彼は自己の罪を悔いた。稅吏と同樣の碎けたる心を以て悔悟せる彼は、稅吏と同樣神の憐憫に浴した。キリストの御顏には彼に對して赦を保證するところのものがあつた。

この時以來彼より自負の念は去つた。彼は再び自負傲慢の言を出さなかつた。

復活後、キリストはペテロを驗し『ヨハネの子シモンよ、汝このものどもに勝りて我を愛するか』と仰せ給うたとき、彼は自らを他の兄弟達よりも高くすることをしなかつた。唯彼は『わが汝を愛することは汝知り給ふ』（ヨハネ傳二一ノ一五、一七）と、自己の心を讀み給ふ主に訴へたのみであつた。この時彼は任命を受けた。それは彼が從來任ぜられしものより遙か廣大なそして困難なものであつた。卽ちキリストは彼に羊と羔を牧へと命じ給うたのである。救主がその生命を捐てゝまで贖ひ給ひし靈魂を牧せしめ給ふ事實により、キリストはペテロの復歸に對する最大の信任を裏づけ給うた。曾ては躁急にして自負・傲慢なりし弟子のペテロも、今では至極穩かにして碎けたる心の持主と化し、爾後主の御足跡を踏み、その克己・犧牲の道を辿り、キリストの苦難に與るものとなつた。最後にキリストが榮光の位に卽き給ふときその榮に與るものとなつた。

ペテロをして失敗せしめパリサイ人をして神との交りを絶たしめた同じ陷穽に今日多くのものが陷つてゐる。この自負傲慢ほど神の忌み給ふもの、人の魂を危險に陷らしむるものは他にない。之は凡ゆる罪の中にても極めて度し難きところの絶望的のものである。

ペテロの如上の失敗は突如として起つたものでなく、漸次的のものであつた。その自負心が彼を大丈夫と思はせ、次第々々に顚落せしめ、遂に主を拒むに到らしめたのである。天國に入るまで最早自分は試煉に對し大丈夫である如く自負するものは決して安全ではない。キリストを信受せる者に對し、たとひ如何程眞劍な信者であつても、自ら大丈夫である如く感ぜしめたり、言はしめてはならない。兎もすれば誤ちに陷り易いものである。勿論信仰と希望とを有たしむるため指導を怠つてはならないが、よし我々がキリストに全き獻身をなし、又キリストが我らを受け給ひしことを實感したにしても、それでもつて誘惑より免除され得たるものと考へてはならない。この點神の聖言の中にも『衆多の者淨められ潔よくせられ試みられん』（ダニエル書一二ノ一〇）とあるが、唯試練に堪ふるものゝみが生命の冠を手にすることができるのである。（ヤコブ書一ノ一二）故にキリストを信受はしてもその最初の信賴に於て自分は救はれたと云ふものは、屢々自己信賴に陷る危險があるのである。自分の弱いこと、絶えず神の聖力の必要なことを忘れ易い。不用意なためサタンの奸策に乘ぜられ、誘惑にかゝり、ペテロの如く罪の深みに陷り易いのである故に我々には『自ら立てりと意ふ者は倒れぬやうに心せよ』（コリント前書一〇ノ一二）との警告が發せられてゐるのである。寸刻、と雖も自らに賴ることなく、キリストに賴ることが我らにとつて唯一の安全策であることを知らねばならない。自分の品性の缺陷を知りキリストの恩寵と能力とを仰ぐことは、ペテロにとつて是非とも必要なことであ

つた。神は彼を試練から免れしめ給はなかつた、しかしペテロはその試練に負くるの必要はなかつたのである。あの場合ペテロがキリストの警告を重んじ覺醒と祈禱とに努め、躓き倒るゝ如きことなきやう畏れ慄きつゝ歩んでゐたならば神よりの援けによつてサタンに乘ぜらるゝ如きことはなかつたのである。

自負と自己滿足のためにペテロは遂に倒るゝに至つたが、一面また自己を卑下し悔改めたることによつて彼は再び立たしめられた。斯る體驗的なる記錄によつて、凡て悔い頽ほれし罪人も勇氣づけられるのである。ペテロは大なる罪を犯したがそのまゝ放置せらるゝことがなかつた。その前にキリストの仰せ給ひし『然れど我なんぢの爲にその信仰の失せぬやうに祈りたり』（ルカ傳二二ノ三二）との聖言が彼の心中には銘記せられてゐた。彼が激烈なる苦悶と痛恨とに打のめされてゐたとき、如上の祈禱と主の愛と憫れみに充ちたる聖顏に對する記憶が、彼に希望を與へた。復活後キリストは天使を通して婦に『されど往きて、弟子達とペテロとに告げよ、汝らに先だちてガリラヤに往き給ふ』（マルコ傳一六ノ七）と命じ給うてゐる。このことによつても彼の悔悟が罪を赦し給ふ救主によつて受け容れられたることは明かである。

ペテロを援きあげ救ひ給うたと同一の憐憫と同情とは誘惑に陷れる凡ゆる人々にまで延べられてゐる。人々に罪を犯さしめその儘に放置し、絶望と恐怖狀態に陷れ、到底赦を得るの見込なきものゝ如く思はしむるのはサタンの常套手段である。然し乍ら神は『寧ろわが力にたよりて我とやはらぎを結べ、我と平和をむすぶべし』（イザヤ書二七ノ五）と仰せ給うてゐるからには、敢て我らは怖るゝの必要はないのである。且つ我らの弱きを强くするため凡ゆる方法が準備され、キリストに到るために凡ゆる奬勵が發せられてゐるのである。

神の嗣業を購ひ戻さんがためキリストが己れのさかれし體を提供し給うたのもこれがためで、彼は人々に今一度機會を提供し給うてゐるのである。『是故に彼は己に頼て神にきたる者の爲に執成をなさんとて常に生くれば、之を全く救ふことを得給ふなり』（ヘブル書七ノ二五）と錄されてあるのである。その罪なき生涯と服從、十字架の死――によつてキリストは失はれし人類の執成を爲し給ふのである。而も救の君に在す彼は、單なる歎願者として之を行ひ給ふにあらず、勝利者として之を宣べ給ふのである。彼の獻げ給ふ獻物は全きものである。我らの執成者として彼は神の聖前に香爐を執り、之に彼の功績と民の祈りと告白と感謝とを盛り、彼の義の馨香を薰じつゝ芳ばしき香りとして聖前に騰らしめ給ふのである。斯る獻物は悉く嘉納せられ、赦は凡ゆる罪を蔽ふのである。

キリストは我らの代償・保證たることを自ら契り給うたのであつて、彼は何人をも疎んじ給ふ如きことがないのである。人類の永遠の滅亡に陷るを坐視するに忍びず、彼らのために己が靈魂を死に到るまで注ぎ出し給へる主は、自分で自分を救ひ得ないことを自覺する者に對し、愛憐と同情の眼を以て之を眺め、畏れ懼きつゝ祈り求むるものを親しく援け起さずしては止み給はぬのである。其の嚔によつて極まりなき道義的能力の基を据ゑ給へる彼のことであるから、我らは凡ゆる罪と悲しみを斯る慈愛溢るゝ主の御許に置くことができるのである。彼の言と表情は我らの信頼の念を喚び起し、その聖旨によつて我らの人格は洗練陶冶せしめられるのである。

如何にサタンがその全力を傾けても、單純にキリストに一切を委ねてゐる者に對しては如何ともなし得ないのである。神は『疲れたるものには力をあたへ勢力なきものには強きをまし加へ給ふ。』（イザヤ書四〇ノ二九）

『もし己の罪を言ひあらはさば、神は眞實にして正しければ我儕の罪を赦し、凡ての不義より我儕を潔め給はん』

（ヨハネ第一書一ノ九）『汝たゞ汝の罪を認はせ、そは汝の神エホバにそむきへめぐり』（エレミヤ記三ノ一三）『淸き水を汝等に灑ぎて汝等を淸くならしめ汝等の諸々の汚穢と諸々の偶像を除きて汝らを淸むべし』（エゼキエル書三六ノ二五）と。然し乍ら我らが罪の赦と神との和ぎを得る前に、先づ自己を知ること、悔悟とに到らしめる自覺が必要である。パリサイ人は一向に自分の罪を感じなかつた。故に折角の聖靈も彼の衷には働き給ひ得なかつたのである。彼の心靈は自己を義とする武具もてしかと鎧はれてゐたので、天使の手にせる神の矢も之を刺透すことができなかつた。たゞ自分が罪人であることを自覺するものをキリストは救ひ給ふことができるのである。彼は『囚人に赦を得ること、盲人に見ゆること、を告げしめ、壓へらるゝ者を放ちて自由を與へしめ』（ルカ傳四ノ一八）給ふのであつて、所謂『健强なる者は醫者の助けを』（ルカ傳五ノ三一）需むることをしないのである。

故に我らは先づ自己の眞相に就て知らねばならぬ。でないならば格別キリストを必要とは思はなくなるであらう。又自分が危險狀態にあることに就て知らねばならない。でないならば我らは避所に逃るゝの必要を感じなくなるであらう。又我らは自分の傷より生ずる痛みを感じなければならぬ。でないならば我らは醫しを求むることをしないであらう。神は『なんぢ、我は富めり、豐なり、乏しき所なしと言ひて、己が惱めるもの、憐れむべき者、貧しき者、盲目なる者、裸なる者たるを知らざれば、われなんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金を買ひて富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、なんぢの裸體の恥を露さざれ、目藥を買ひて汝の目に塗り、見ることを得よ』（モクシロク三ノ一七、一八）と仰せ給うてゐる。玆で火に燬きたる金と云はれてゐるのは愛によつて働くところの信仰のことであつて之のみが我らと神とを調和せしむるものである。よしんば我らが如何程奮闘努力しても、キリストの御心中に宿りた

る如き愛がないならば、天國の一員として數へらるゝことはできないのである。

何人も自分でもつて自分の過ちを知ることはできない。『心は萬物よりも僞る者にして甚だ惡しゝ誰かこれを知ることを得んや』（エレミヤ記一七ノ九）である。口先では心にもない謙遜ぶつたことを語ることもある。心の貧しさを神の聖前に訴へてゐる間でさへ、その反面に於て、自己の義を誇り謙讓の德の豐である事を鼻にかけて慢心してゐることがある。我らはキリストを眺むることによつてのみ、然り唯この一つの方法によつてのみ自己なるものゝ眞相に觸れることができるのである。彼――キリストに對する無智は人間をして徒らに己が義を認めしむるに過ぎないのである。我らは彼が如何に卓越したる方に在し如何に純潔なる方にて在すかを知ることによつてのみ、自己の弱さ、窮乏、缺陷を觀ることができるのである。されば我らは自分が他の罪人と同樣自己を義とする念に滿さるゝ絶望と墮落の狀態にあることを承認すると共に、よしんば我らが救はれてゐるにしてもそれは己れの善行によらずして一重に神の限りなき御慈愛によるものであることを認めなければならない。

稅吏の祈禱が聽許せられたのは、彼が全能者の聖手に全然より縋つたからである。この稅吏にとつて自己は恥づべきそれの他何ものでもなかつた。凡て神に求むるものも之と同樣でなければならない。必要感に充され祈り求むる者は、唯信仰――一切の自己信賴を否定するそれ――によつてのみ、全能力に觸れることができるのである。

所謂外部的なる遵奉行爲に如何程熱心であつても、それを以て純眞なる信仰、絶對なる自己否定の代りにすることはできない。何人も人間の力では自己を虛うすることはできない。この事はたゞキリストによつて成就して頂くの他はないのである。故に我らは衷心より『神よわが心を受け給へ、我自らこれを投げ出し得ざれば。こはたゞ爾の有な

れば潔く保ち給へ、我自ら之を爲し得ざれば。願くはこの利己的なる我が如きものを救ひ給へ。爾の豐けき愛の流れの我が心より溢るゝため、この我を形成し潔くして聖なる雰圍氣の中に引きあげたまへ』と言はねばならない。

單に信仰生活の開始にのみ自己否定を行ふだけでは十分ではない。聖國を目指して歩む凡ての歩みに於て刻々これを行はなければならない。元來善行なるものは我ら以外のある權能より發するものであるから、絶えず心を神に向け熱烈切實に罪の告白をなし、聖前にその靈をへりくだらすることをせねばならない。自己を否定しキリストに倚賴するものゝみが安全なる歩みを執ることができるのである。

イエスに近づけば近づく程彼の人格の純潔なることを認むると共に、顧つて自分はと言へば罪のかたまりであることを知り、頓に自己稱揚の念は失せ去るのである。最後まで自己の善行を誇らざるものこそ神が聖なりと認め給ふところのものである。

使徒ペテロはキリストの忠實なる役者であり、神より大いに崇められ其の光榮ある權能に與り、教會の興隆のため盡すところのあつた人物であつたが、然し寸刻と雖も、自己の恐怖すべき不面目極まる經驗を忘れることができなかつた。勿論彼の罪は赦されはしたが、自分を失墜せしめたる性格上の弱さに就ては、唯キリストによる恩寵のみが益あることを知つてゐた。彼は自分には何一つとして崇めをとるべき材のないことを知つてゐた。

使徒にしても豫言者にしても自ら罪なしと揚言したものは誰一人としてない。神に最も近く生活したるもの、知りつゝ惡を犯すよりも寧ろ自らの生命を損つるを快しとせしもの、或は又神より大いに崇められ、その榮光と權能に浴したるものゝ悉くが、何れも自分の罪深きものであることを告白してゐる。彼らは己が肉に何一つ信賴をおかす

己が義に就て何等揚言するところなく、キリストの義に對して絶對の信頼を置いた。キリストを仰ぐものは何人もこれと同一の態度に出でなければならない。

信仰經驗に於ける一歩々々に於て、悔改めが深められなければならない。神より赦を受け、其の民とせられたるものに對して主は次の如く仰せ給うてゐる。『汝らはその惡しき途とその善からぬ行爲を憶えてその罪とその憎むべき事のために自ら恨みん。』（エゼキエル書三六ノ三一）『我汝と契約を立てん、汝すなはち我のヱホバなるを知るに至らん、我なんぢの凡て行ひし所の事を赦す時には汝憶えて羞ぢ、その恥辱のために再び口を開くことなかるべし、主ヱホバこれを言ふ。』（エゼキエル書一六ノ六二、六三）と。我らの 唇 は絶えて自己稱揚のために啓かるべきではない。我らは唯キリストに於てのみ充足はせらるゝのである。『わが肉の内に善の宿らぬを知る。』（ロマ書七ノ一八）『されどわれには我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ、之によりて世は我に對して十字架につけられたり、我が世に對するも亦然り』（ガラテヤ書六ノ一四）との使徒の告白を己がものとすべきである。

如上の體驗と其の軌を一にせるものとして我らには次の訓諭が與へられてゐる。『されば我が愛する者よ、なんぢら常に服ひし如く、わが居る時のみならず、わが居らぬ今もますます服ひ、畏れ戰きて己が救を全うせよ、神は御意を成さんために汝らの裏にはたらき、汝らをして志望をたて、業を行はしめ給へばなり』と。（ピリピ書二ノ一二、一三）恰も神がその御約束を成就し給はざる如く、又その忍耐と同情とには限りあるものゝ如く戰慄畏懼せよとは神は仰せ給うてゐない。寧ろ我々はその心意がキリストの心意に服せしめられてゐるか否か、先天的後天的性癖のあるものによつて自分が支配されてゐはしないかと戰慄畏懼せねばならぬのである。『そは神その善旨を行はんとて爾曹

の裏にはたらき爾曹をして 志 をたて事を行はしむればなり。』 所謂自己なるものが主と我々との間の障碍物となつて居りはしないか、或は又それが神の我々を通して成就せんことを 希 ひ居らるゝ高邁なる御目的を阻るものではないかと懼れ慄くべきである。或は又己が能力に頼ることゝ、主の聖手より手を離すこと、彼なき人生行路を辿らんとするが如き企圖に對して我らは懼れ慄くべきである。

是故に我らは傲慢或は自己滿足を助長する如きことを 悉 く斥け、所謂追從・阿諛の類に動かさるゝことなきやう警戒せねばならない。元來この媚び詔ひなるものはサタンが好んで用ふる手管であつて、彼はあるひは責め訴へ、あるひは媚び詔ひつゝ靈魂を滅亡に導くのである。故に徒らに人に媚び詔ふものはサタンの配下であると云はねばならない。キリストの從者たるものは斯る言辭を弄することなく、私心を去り、主のみを崇めねばならない。凡てのものゝ眼は『我らを愛し其の血を以て我らを罪より解放ち』（モクシロク一ノ五）給へるものゝ上に注がれ、衷心より彼を讃美しなければならぬ。

主を懼るゝの生涯は何ら陰欝・悲哀の生涯ではない。キリスト無きことが人生をして歎息・悲哀に陷れるのである。自己稱揚と利己主義のかたまりであるものはキリストとの個人的なる活ける教會の必要を感じない。未だ岩に落ちて碎かるゝことなきものは傲慢・自負のものである。人は兎角尊大なる宗教を好み、我儘勝手なる路を歩みたがるものである。斯る利己主義・自己稱揚を求むるの念が、心中よりキリストを斥くるものであつて、而も彼なくしては憂欝と悲哀とに陷らざるを得ぬのである。之に反しキリストにしてひとたび心中に住み給はんか、心は歡喜と喜悅の泉と化するのである。

『至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此いひたまふ、我はたかき所きよき所に住み、亦こゝろ碎けてへりくだる者と共にすみ、謙くだる者の靈をいかし、碎けたる者の心をいかす』と。（イザヤ書五七ノ一五）

昔モーセが岩間にかくれて神の御榮光に接したる如く、裂れし岩卽ちキリストの穿たれし聖手によつて抱かるゝとき、我らは神の聖聲を耳にすることができるのである。斯る者に神はモーセに對する如く自らを啓し『ヱホバ、ヱホバ憐憫あり恩惠あり怒ることの遲く恩惠と眞實の大なる神』（出エジプト記三四ノ六、七）たることを啓示し給ふのである。

『錄して神の己を愛する者の爲に備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり』（コリント前書二ノ九）とある如く、贖罪事業の中には、到底我らの思ひ及ばざる結果がこめられてゐるのである。罪人がキリストの聖力によりて牽引せられ、十字架の許に走り、之に跪伏するとき、其處に新しき創造が現れるのである。卽ち斯くの如き者に對して新しき心が與へられ、彼はキリスト・イエスによりて新たに造られたるものとなるのである。斯くして彼は全く潔きものとなるのである。

實に神こそは『イエス・キリストを信ずる者を義とし給ふ』（ロマ書三ノ二六）方、斯くの如くにして『義とする者には光榮を得させ給ふ』（ロマ書八ノ三〇）ところの方である。人類は罪のために甚だしきまでに恥辱を蒙り、墮落したが、これと共に彼らが贖罪愛を通して崇められ高められたることも前者に比べて遙かに大なるところの事實である。神の像にまで合體・融合せんことを希ふ人類に對し、絶えて墮落せしことなき天使よりも更に高き位地に座せしめんがため、全天の凡ゆる寶は傾けられ、あらゆるすぐれて貴き權能は注がれてゐるのである。

『ヱホバ、イスラエルの贖主イスラエルの聖者は人にあなどらるゝもの、民にいみきらはるゝ者……にむかひて如此いひたまふ、もろ〳〵の王は見てたち、もろ〳〵の君はみて拜すべし、これ信實あるヱホバ、イスラエルの聖者汝を選びたまへるが故なり。』（イザヤ書四九ノ七）『凡そ己を高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるゝなり』と。

第十三章　祈禱の能力

——ルカ傳一八ノ一—八に基く——

神は久しく忍ぶとも終に救はざらんや

キリストは再臨直前の危機のことを豫言し給うたが、本章の比喩は特に斯る時代に關するものであると共に『落膽ぜずして常に祈るべき』爲に語り給うたものである。

『或町に神を畏れず、人をかへりみぬ裁判人あり、其の町に寡婦ありて、しばしばその許に行き、「我がために仇を審きたまへ」といふ、かれ久しく聽き入れざりしが、其ののち心の中にいふ、「我神を畏れず、人を顧みねど、此の寡婦われを煩はせば、我彼がために審かん、然らずば絶えず來りて我を惱さん」と』主いひ給ふ『不義なる裁判人の言ふ事を聽け、況して神は晝夜呼ばはる選民のために、たとひ遲くとも終に審き給はざらんや、我なんぢらに告ぐ、速みやかに審き給はん、然れど人の子の來る時地上に信仰を見んや』（ルカ傳一八ノ二—八）

この比喩の中に描かれてゐる裁判人は、冷酷・無情の人物であつて、熱心に願ひ出づる寡婦の訴へ事の如きは一向に省みなかつた。寡婦は屈することなく、再三再四彼の許に行つたけれども、至極冷淡に取扱はれ、その都度逐返さ

れてしまつた。尤も裁判人は彼女の訴への正當であることを認め、すぐにも彼女を救濟することもできたが、これをとりあげなかつたのである。事實彼は自己の專擅振りを示したかつたので、寡婦の訴へを取りあげなかつたのであるけれ共彼女は失望落膽せず、裁判人の冷酷かつ無情にひるむことなく、しきりに願ひ出で、遂に裁判人をして受理せしめ審かしむるに至つた。『我神を畏れず人を顧みねど、此の寡婦われを煩はせば、我かれが爲に審かん。然らずば絶えず來りて我を惱ますん』と言つたのは、一面また自己の體面を保ち偏頗不公平のそしりを免るゝため、熱心に願ひ出でたる寡婦の仇を報ゆるに至つたのである。

『主いひ給ふ、不義なる裁判人の言ふ事を聽け、況して神は夜晝呼ばはる選民のために縱ひ遲くとも遂に審き給はざらんや、我なんぢらに告ぐ、速かに審き給はん』と。キリストは玆で神と不義なる裁判人との天壤月鼈的の對比をなし給うた。裁判人は寡婦が再三訴へに來て餘りにも煩はしかつたから、それを免るゝため、單なる自己の都合から彼女の訴へを受理したまでゝ、別に寡婦に同情して之を憫み斯る態度に出でた譯ではなかつた。彼女の悲慘なる狀態に毛程でも同情した譯ではなかつたのである。然し乍ら凡て求むるものに對する神の態度は之とは如何に相違したものであらう！　神は缺乏と困苦の裡にあるものに同情し無限の憐憫を以て祈に答へ給ふのである。

譬にある婦は、夫に死に別れ、知るべもない極貧な者であつたから、自分では如何する見込もないのであつた。斯くの如く人類は、罪のために神との關係を絶たれた者で自分を救ふことのできないものとなつてしまつたのである。然しながら我らはキリストにありて神に近づくことができる。又神に於てはその選びたるものほど可愛いものはない本當にキリスト者は暗き權力より召して奇しき妙なる光に入らしめられしもの、彼を讃へ暗き世の中に光として照り

輝かしめ給ふところのものである。不義なる裁判人は何一つとして寡婦に興味を有たず、只煩はしさを免れんがために願ひを聴許したが、神は正反對にその子らを窮なき愛を以て愛し給ふのである。神にとつては地上の教會ほどに愛ほしきものはない。

『ヱホバの分はその民にして、ヤコブはその產業たり、ヱホバはこれを荒野の地に見、これに獸の吼ゆる曠野に遇ひ、環りかこみて之をいたはり、眼の球のごとくにこれを護り給へり』（シンメイ記三二ノ九、一〇）『萬軍のヱホバかく言ひたまふ、ヱホバは汝等を擄へゆきし國々へ榮光のために我等を遣し給ふ、汝らを打つ者は彼の目の球を打つなればなり』（ゼカリヤ書二ノ八）と。

この比喩にある寡婦の祈禱――『我を我が仇より救ひ給へ』――『我に義を行ひ給へ』――は、神の民の祈禱を表示するものである。サタンは彼らの仇であり、彼こそは『我らの兄弟を訴へ、夜晝われらの神の前に訴ふる』（モクシロク一二ノ一〇）ものである。彼は絶えず神の民を誤表して訴へ、之をあざむき陷れてゐるのである。されば斯るサタンとその部下の權能よりの救濟こそ、本章の比喩に於て、主が弟子達に祈り求めよと仰せ給うた題目である

ゼカリヤの豫言には、訴ふる者サタンと神民の仇をふせぎ給ふキリストのことが錄されてゐる。『彼祭司の長ヨシユアがヱホバの使の前に立ち、サタンのその右に立ちて之に敵しをるを我に見す、ヱホバ、サタンに言ひ給ひけるはサタンよ、ヱホバ汝をせむべし、卽ちエルサレムを簡びしヱホバ汝をいましむ、是は火の中より取出したる燃柴ならずやと、ヨシユア汚なき衣服を衣て使の前に立ちをりしが』と。（ゼカリヤ書三ノ一―三）

玆では神の民が審問に附せられてゐる罪人として表示せられてゐる。民の祝福を求むべき大祭司ヨシユアは非常な

る苦境に陷つた。彼が神に歎願してゐるとき、サタンは之に敵對する者としてその右に立ち、神の民を全然救はるゝ望なき者として訴へてゐた。神の聖前に彼らの惡行と缺陷とを曝露し、失態と過談とを擧げ、キリストですら彼らを助け給ふ事の出來ないものであるかの如く思はするに努めてゐた。ヨシユアは斯る神の民の代表者として汚れたる衣服を身に纏ひ、非難攻擊せられてゐた。彼は己が民の罪を知るにつけ全く絶望せるもの丶如くであつた。サタンはさう思はせることに努めてゐた。にも拘らず尙ほヨシユアは歎願者として立ち、サタンも之と並んで訟へてゐたのである。

元來何處までも誹謗して止まざるサタンの行爲は、天上に於てその端を發したのであつて、人類の墮落以來この地上に於ても續けられ、世の終りの切迫するに從ひ愈々激烈となり行くところのものである。己が時の幾何もなきことを知る彼は、人々を欺き之を滅さんがため、その全精力を傾倒してゐる。特にこの地上に於て神の律法を重んずる團體――薄弱にして罪深きものではあるが熱心に救を求むるものに對し忿怒をもつてゐる。彼らをして神に服從せしめざらんがためにサタンは斷然たる態度に出でつ丶あるのである。サタンは彼らの缺陷多き有樣を見て喜び、之を神より引き離さんがために、日頃奸策を弄してゐる。

神の力がその民によつて顯さるゝ場合、サタンは信者を嫉視し怨恨の念を懷き、以前に倍したる勢力を以て襲擊する。彼はキリストに信賴する者を嫉視する。彼の目的とするところは、人々に惡行を敎唆し、成功の曉には却つてその全部の咎めを誘惑されたるもの丶上に浴せかくるにある。サタンは彼らの汚れたる衣服――その性格上の缺陷、弱點、不品行、キリストの榮を汚すところの悖德、忘恩を指摘する。斯くの如きものは當然滅ぼさるべきものである

と主張する。一方に於て彼は、彼らに自分如きものは到底救はるべきものではなく、到底洗ひ潔めらるゝ資格なきかの如くに思はせる。彼らが信仰を放棄し全然誘惑に降服し神に對し反逆することを希望する。

神の民は斯くの如きサタンの訟へに對し自己辯護に當る譯にはゆかない。飜へつて己を顧みるとき絶望するのである。只神の民は眞の代言者に歎願し救主の功績に縋る。神は『イエスを信ずる者を義とし給ふ』（ロマ書三ノ二六）

『我を我が仇より救ひ給へ』で言盡されるのである。而してキリストは偉大なる十字架の事實を以て之が辯護となし、臆面もなく告訴するサタンを沈默せしめ給ふ。

『ヱホバ、サタンに言ひたまひけるは、サタンよヱホバ汝をせむべし、即ちエルサレムを簡びしヱホバ汝をいましむ、是は火の中より取出したる燃柴ならずや』と。サタンが神の民を絶望に陷れ滅さんとしてゐるとき、キリストは之を阻み給ふのである。勿論彼らは罪深きものではあるが、キリストはその罪を己が身に引き受け『火の中より取出したる燃柴の如き』民を取出し給ふのである。彼は己が人性を以て人類に合體し給ふと共に、己が神性を以て無限の神と結合し給ふのである。故に滅ぶべき靈魂も茲に救はれ仇なるサタンは譴責せられるのである。

『ヨシュア汚なき衣服を衣て使の前に立ちをりしが、ヱホバ己の前に立てる者等に告げて、汚なき衣服を脱せよと宣ひ、またヨシュアに向ひて、觀よ、我なんぢの罪を汝の身より取りのぞけり、汝に美服を衣すべしと宣へり、我また潔き冠冕をその首に冠らせよと言へり、是に於て潔き冠冕をその首に冠らせ衣服をこれに衣す。』次いで萬軍のヱホバの權能に基づき天使は神の代表たるヨシュアに嚴然たる契約をなし『汝もし我が道を歩みわが職守を守らば我が

幼兒サムエルの祈

家を司り我が庭を守ることを得ん、我また此に立てる者等――（神の玉座を圍繞せる天使等）――の中に往來する路を汝に與ふべし』（ゼカリア書三ノ三―七）と語つた。

神の民は缺陷多きものであつても、キリストは彼らを放置し給ふ如きことがない。彼らの衣服を變ふる權能を有することを示し、汚れたる衣服を脱せ給ふ。自己の非を悔い彼を信ずるものに、義の衣を着せ天の記錄には赦せりとの記號を附し、全宇宙の前に己が屬たることを明言し給ふのである。玆に神の民の仇――サタンは訴ふるもの又欺くものなる事が明瞭になる。神は己が選べる民の爲に公義を行ひ給ふのである。

『我を我が仇より救ひ給へ』との祈禱は、たゞにサタンに對してのみならず、神の民を誤表、誘惑し之を滅さんと企圖する凡てのものに適用される。神の誡命に服從することを決心せるものは、その體驗上より、地上の權威に支配さるゝ敵對者のある事を知つてゐる。實に斯る敵對者にキリストは幾度となく常に襲擊せられ給うたのであるから、弟子たるものも其の師と同じく斯る誘惑に襲はるゝことを覺悟しなければならない。

聖書にはキリスト再臨直前に於ける世上の狀態が種々と描寫されてゐるが、其の中でも特に使徒ヤコブは社會的に瀰漫せる惡虐・貪慾に就て次の如く言つてゐる。『富める者よ、汝らの上に來らんとする艱難のために泣きさけべ…汝らこの末の世に在りてなほ財を蓄へたり、視よ汝らが其畑を刈り入れたる働人に拂はざりし價は叫び、其の刈りし者の呼聲は萬軍の主の耳に入れり、なんぢらは地にて奢り、樂しみ、屠らるゝ日に在りて尙その心を飽せり、なんぢらは正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼はなんぢらに抵抗することなし』（ヤコブ書五ノ一―六）と。今日これは現に目擊するところの光景であつて、凡ゆる惡虐なる手段のもとに富の蓄積がますゝ行はるゝと共に、一方飢

ふたる同胞の叫びは神の聖前に騰りつゝあるのである。

『公平はうしろに退けられ、正義ははるかに立てり、そは眞實は衢間にたふれ正直はいることを得ざればなり、眞實はかけてなく惡をはなるゝものは掠めらるばはる』（イザヤ書五九ノ一四、一五）と。これはキリストの御在世當時にも成就したことである。其當時キリストは一般の人々が重要視してゐた傳說を排斥し、神の誡命を忠實に守り給うたため迫害と憎惡とを以て酬いられたのである。今日も人間的の傳說や律法よりも神の律法を尊重し、神の誡命を忠實に遵奉するものは嘲笑侮辱又迫害のため苦しむのである。キリストは神に忠實なりしため却つて安息日を犯すもの、神を瀆すものと指彈され、鬼に憑かれたるもの、ベルゼブル等散々に罵詈惡口された。同じく彼の僕も誤表・指彈せられる。サタンは神の民を誘ひ御榮を汚さしめんと企てゝゐるのである。

比喩にある神を畏れず人をも顧みざる裁判人のことからキリストは當時執行はれてゐた世上の裁判が如何なる性質のものであり、軈て自分がまた捕へられ取調べを受くるとき、その審判は如何なる內容のものであるかを表示し給うた。又彼は、各時代に亘る神の民が奸惡なるこの世に於て爲政者及び有司達の如何に賴り離きものであるかを知るに到らんことを希望し給うたのである。屢々神に選ばれたる者は、神の言を規準、指導とせず、聖別せられざる自己的衝動に從つて處斷する者の前に立たしめらるゝのである。

又この不義なる裁判人の比喩によつて、我らの爲すべきことをキリストは示し給うた。『況て神は夜晝呼ばはる選民のためたとへ遲くとも遂に裁き給はざらんや』と。我らの模範たるキリストは自己救濟自己辯護に努むることなく一切を擧げて神に委ね給うたが、我々も之と同樣の態度に出で、徒らに人を責め腕力沙汰に出づるが如きことがあつてはならない。

よし又豫期せざる訊問、取調を受くる場合にも、心の安靜を破らるゝことなく、如何に不當なる取扱を受けても激怒し自らを害ふと共に、神に對する信賴を破り聖靈をして憂へしめるべきでない、我らの傍には天使が證人として立ち、義の太陽の輝きを以て庇護の任に當つてゐるのであつて、サタンも如何とも爲し能はないのである。

世は益々奸惡となりゆくのであるから、我らは徒らに樂觀して困難なきものゝ如く考ふることなく、襲ひ來る困難こそ、我らをして神に向つて祈らしめ、その限りなき智慧を仰がしむるものなることを知るべきである。

『なやみの日にわれをよべ、我なんぢを援けん』（シヘン五〇ノ一五）とあるが如く、彼の許に己の困難・必要を訴へ、上よりの助力を仰ぐやう、神は待ち給うてゐる。困難に遭遇する場合は直ぐ誠實、熱心なる祈りを神に捧げ沮喪することなき熱烈なる祈禱を捧ぐるならば、神は之に動かされ給ふのである。

屢々迫害と侮蔑を蒙り、苦しめられると、恰も神より見捨てられしかの如く考へる人がある。しかし迫害は信仰上試みであつて寧ろ練達を生ずるのである。人間の見地からすれば彼らは數も少く、一見仇するものが勝ち誇る如くであらう。然し決して絕望することはない。彼らのために苦しみ悲しみと惱みとを擔ひ給へる主は、血をもて贖へる民を捨て給ふ如きことはない。實に祈禱こそは全能の神の聖腕を動かし『國々を服へ、義を行ひ、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢力を消し（殉教者の經驗によつて之が實證せられてゐる）……戰爭に勇ましくなり、異邦人の軍勢を退か』（ヘブル書一一ノ三三）すのである。

我々が神のため全く獻身するならば、神の備へ給はぬ如き立場に置かるゝことは絕えてなく、如何なる境地に在つ

ても我等を指導し給ふものがある。主は如何なる困難に際會しても確實なる相談相手である。又如何なる悲哀・愁歎寂寞の中に在つても眞の同情者に在すのである。よし我々が途を過つた場合にも、キリストは我々を去り給ふことなく、明確なる聖聲を以て『我は道なり、眞理なり、生命なり』（ヨハネ傳一四ノ六）と仰せ給ふのである。げに彼こそは『乏しき者をその叫ぶときにすくひ、助けなき苦しむ者をたすけ給ふ』（シヘン七二ノ一二）方である。

主は彼に近づき忠實に働くものを尊ぶと仰せ給うてゐる。『なんぢは平康に平康をもて心志かたき者をまもり給ふ彼はなんぢに依賴めばなり』（イザヤ書二六ノ三）とある如く、大能の聖手は我らを前へ前へと導き、往け我爾を助けん、爾わが名のために求めよ、爾これを享けん、爾の失態を待ち設くる者の前に我はあがめられん、彼等は我が言の榮ある勝利を見るに至らんと仰せ給ふのである。『祈のとき何にても信じて求めば、ことごとく得べし』（マタイ傳二一ノ二二）とは今も變らない約束である。

されば惱みと虐げの裡に苦しむものは神を呼び求め、冷酷無情なるものより顏をそむけて、造物主なる神に求むるところを告ぐべきである。碎けたる心の持主にして斥けられ、切なる祈禱の聽かれざる例としてはない。神はその讃め歌の中に在してすら、いと弱き人の子の祈りをきゝとり給ふのである。我らが密室に入りて心のねがひを主に打明ける時も、又途上に於て求むるときも、一切は天津大君の御座に達するのである。よし人の耳にはきかれずとも空しくはならない。又人生の雜音のために失せ去るものではないのである。斯る靈魂の希求を沒却せしむるものとてはないそれは街上の如何なる雜音又大衆の騷音にも打消さるゝことなく、皆神の御座に達するのである。我らの呼びかくるは天の父なる神であり、また神は斯の如きものゝ祈禱を聽き給ふのである。

自己の無力・無能を痛感するものも、己の事件を神に委ぬることを畏懼してはならない。世の罪のためキリストによりて己を與へ給へる神は、凡ゆる靈魂に關はる事件を引負ひ給ふのである。『己の御子を惜まずして我ら衆の爲に付し給ひし者は、などかこれに併へて萬物を我らに賜はざらんや』（ロマ書八ノ三二）と。されば我らを支持し鼓舞せんがために、斯る惠み深き聖言を彼の成就し給はぬ事があらうか？

キリストはサタンの手中より己が嗣業を贖ひ出すべく熱求し給ふ。然し乍ら我々人類は外部に現れたるサタンの權能より救濟さるゝ前に、先づその內部に働く彼の權力より救出されねばならない。かゝるが故に神は俗念・我慾に充ちたる粗暴なる我等の性格を潔めんがために試練の臨むことを容し給ふのである。卽ち吾等をして神とその遣し給へるイエス・キリストを知らしめ、罪の汚れより潔めらるゝことを熱望せしむべく、苦惱の深淵中に陷らしめ、幾度も試練を經た後潔く聖にして福なるものとなりて現れ出でしめ給ふのである。屢々神は自負と我慾によつて穢れたる靈魂を試練の爐中に投じ給ふことがある。然し乍ら我らはさうした嚴しい試みに堪ふるとき始めて神性を反映することができるのである。この故に苦惱と試練によつて神の企圖し給ふことの成就するとき『光のごとくになんぢの義をあきらかにし午日のごとくなんぢの訟をあきらかにし給はん』（シヘン三七ノ六）との言が成就する。

故に我等は神がその民の捧げる祈禱を閑却し給ふ如く危惧する必要はない。寧ろ我らは襲ひ來る試惑・試練に際會した時、失望に陷り、熱烈なる祈禱を中斷することなきやうに注意せねばならない。

キリストがフエニキヤの女に憐憫同情を表示し給うた時、彼は心痛せる彼女の樣に心動かされ、直ぐにも彼女の祈りがき〻入れられたと云ふ確證を與へんことを希はれたのであつたが、一面之を弟子達の敎訓たらしむるため暫時

の間、彼女の悲痛なる叫びを馬耳東風の如くにしたのであつた。にも拘らず屈することなき彼女の信仰が表され、キリストは之を稱賛して彼女の願意を聽許し家に歸らしめ給うた。この教訓は弟子達にとつて忘るべからざるものであつたので、斯る不屈の祈禱の結果の何たるかゞ記錄せられたのである。

斯くまで母の心をして確固不動のものたらしめしはキリストである。又比喩中の寡婦をして裁判人の前に斷然たる決心と勇氣を持たしめしものもキリストである。その昔ヤボクの渡場にて、不思議な苦闘に際してヤコブに同じ不拔の信仰を與へしものもキリストである。されば我らの中にキリスト御自身の扶植し給へる信仰の應驗なくして終るの理はない。

又天上の聖所に在し給ふキリストが公義を以て審きを行ひ給ふことは疑ふべくもない。彼は己が玉座を圍繞せる聖天使達よりも、罪の世の誘惑試練に惱む人類を愛しく思ひ給ふのである。

全天の視聽は此地球に集注されてゐる、そは此處にはキリストが無限の値を以て贖ひ給ひし靈魂の在るが故である又既に主は自らの體驗によつて天と地とを結合し給うたが、之は此地上には救主によりて贖はれしものが居住してゐるからである。昔アブラハム、モーセなどの時代天使達が彼等と語り、その中を歩みたる如く、今日とても彼等はこの地上を訪れるのである。忙はしき大都市の中を、市場取引の雜沓中を、朝から晩まで商賣、競技、享樂などを生活の全部であるかの如く行動し、見えざる實在に就て念慮を寄するものゝ殆どなき大衆の中を歩み、人々の凡ゆる言動に注意してゐる。時として彼等は見えざる世界の幕をかゝげ、我らの思惟をこの騷々しき人生より轉じて、我らの凡ゆる言動に注意しつゝある見えざるものゝ存在に向はしめる。

我等は是等の天使の來訪が如何なる目的であるかを、よりよく知らねばならぬ。我らの參與せる一切の業務に於て斯る天使の協力支持のある事を知るは悅ばしい。見えざる光明と權能の軍旅は、御約束を信じこれを己が有とする謙虛なる人の庇護に當る。千々萬々の天使——大なる權能の持主たるケルビム、セラビムは、『みな事へまつる靈にして救を嗣がんとする者のために職を執るべく遣されたるもの』（ヘブル書一ノ一四）に他ならぬのである。而も之等の天使によつて人の子等の言行は洩れなく記錄せられ、神の民に對する慘虐不義もその記錄にとゞめらるゝのである『況て神は晝夜祈る所の選びたる者を久しく忍ぶとも終に救はざらんや、我なんぢらに告げん、神は速かに彼等を救はん』

『されば大いなる報を受くべき汝らの確心を投げすつな、なんぢら神の御意を行ひて約束のものを受けんために必要なるは忍耐なり、今暫くせば、來るべき者きたらん、遲からじ』（ヘブル書一〇ノ三五—三七）『兄弟よ、主の來り給ふまで耐忍べ、視よ、農夫は地の貴き實を、前と後との雨を得るまで耐忍びて待つなり、汝らも耐忍べ、なんぢらの心を堅うせよ、主の來り給ふこと近づきたればなり』（ヤコブ書五ノ七、八）と。

神の永き忍びは驚くべきものであつて、罪人のため慈悲的哀願の行はるゝ間神の義の待てるも久しきものである。然し乍ら『義と公平はその寶座のもとゐなり』（シヘン九七ノ二）とある如く、『ヱホバは怒ること遲く在す』とは云へ、『能力の大なる者また罰すべき者をば必ず赦すことを爲さざる者』であり『ヱホバの道は旋風に在り、雲はその足の塵なり』（ナホム書一ノ三）と豫言者は言つてゐる。

世は神の律法を犯して憚らず、その永き忍びの故に人々は彼の權威を蹂躙して止まない。而もその嗣業たるものを

虐遇壓迫して、互に『神いかで知りたまはんや、至上者に知識あらんや』（シヘン七三ノ一一）と云つてゐる。然し乍ら何人も過り得ざる一線がある。既に彼等がその定められたる限度に達するの時は近づき、今や將に神の忍耐、恩惠、慈悲の限界を超えんとしつゝある。エホバが己が榮譽を擁護し己が民を援け出し、高ぶるもの不義なるものを壓伏し給ふ日は間近である。

昔ノア時代に、人類は神の律法を無視して遂に創造主を憶ゆるものゝ殆ど無き狀態にまで墮落し果てたので、遂に神は洪水を以て地上の住民を拭去り給うたのであつたが、之は何れの時代にも見るところの事實であつて、危機の到來する毎に、神は自らを表し、サタンの計畫企圖を阻止せんがためその聖手を伸べ給ふのである。同樣民族としても家族個人としても、この理に洩れず、神は常に律法を奉ずるイスラエルに神の在すことを顯し、己れのために報復を爲し給ふのである。『わが民よゆけ、なんぢの室に入り、汝のうしろの戸をとぢて忿恚のすぎゆくまで暫時かくるべし、視よエホバはその處をいでて地にすむものゝ不義をたゞしたまはん、地はその上なる血をあらはにして、殺されたるものをまた掩はざるべし』（イザヤ書二六ノ二〇、二一）よし現にクリスチヤンと自稱するところのものが貧しきものを壓迫搾取し、寡婦孤兒より奪ひ、神の民の良心を支配し得ざるの故をもつて嫌忌憎惡を逞くしても、之等を悉く神は審判給ふのである。彼等に對して『あはれみを行はぬ者は、憐憫なき審判を受けん』（ヤコブ書二ノ一三）との聖言が成就するのである。彼等が神の豪前に立ち、その所業に就て審かるゝ時は遠くない。よし彼等は現在事實無根のことを訟へ、神の御用に當るものを輕侮し、甚だしきに至つては神の僕を投獄、拘縛、追放、死に處するが如きことを敢てしても、そのため流されたる凡ゆる涙又悲痛・悲慘に對して神に答ふるところがなければならぬので

ある。軈てその犯せる罪に倍したる應報が臨むのである。背信墮落教會の象徴たるバビロンに就き、神は其刑罰を執行ふ天使に對し『かれの罪は積りて天にいたり、神その不義を憶え給ひたればなり、彼が爲しゝ如く彼に爲し、その行爲に應じ、倍して之に報い、かれが酌み與へし酒杯に倍して之に酌與へよ』（モクシロク一八ノ五、六）と仰せ給ふのである。

今や印度、支那、阿弗利加、海の島々より、痛ましき叫は天に迄擧げられつゝあるが、之の聽許せらるゝ日は間近い。腐敗墮落せる地上をノアの時の如く水の海でなく、如何なる人間の案出工夫に由つても消す能はざる火の海を以て潔め給ふ日が近い。

『その時汝の民の人々のために立つるところの大なる君ミカエル起ちあがらん、是艱難の時なり、國ありてより以來その時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべし、その時汝の民は救はれん、卽ち書にしるされたる者はみな救はれん』（ダニエル書一二ノ一）と。

屋根裏、茅屋、牢獄、刑臺、山岳、曠野、洞窟、海底から、キリストはその御許に己が子等を聚め給ふのである。彼らは地にありては凡ゆる困苦、窮乏、苦惱を經驗せるもの、サタンの虛妄なる要求に應ぜず之を拒みたるため、罪名を蒙りて墓穴に下り、地上の審士より最も惡虐なる罪囚の如く判決せられしものである。然し乍ら『神がみづから審士たり』給ふ時は近づいた。その時到らば斯る地上での決定は全然くつがへされ、玆に『其民の凌辱はのぞかれ』彼等には『白衣を與へられ』『きよき民またエホバに贖はれたる民と稱へ』（イザヤ書二五ノ八、モクシロク六ノ一一、イザヤ書六二ノ一二）らるゝのである。

彼らの受けたる如何なる苦難、損失、迫害も、又その死すら、この時神によりて全く報はれ、彼等は『その御顏を見、その御名は彼らの額にある』（モクシロク二二ノ四）に到るのである。

第十四章　此人は罪人と食を共にす

—ルカ傳一五ノ一—一〇に基く—

『取税人・罪人等みな御言を聽かんとて近寄りたれば、パリサイ人・學者ら呟きて言ふ「この人は罪人を迎へて食を共にす」』と。（ルカ傳十五章）パリサイ人達はこの言によつて、キリストは所謂罪ある穢らはしきものと交るのが好きだから、その邪惡不行跡に無關心で居給ふのだと諷したのである。彼等はキリストに失望してゐた。高潔なる人格の持主と云はるゝ彼が、ラビ達と行動を共にすることなく、人を教ふるに當つてもその方式に據らぬは何故であるか？　又何ら拘泥することなく自由に凡ゆる階級に向つて働きかけるのは何故であるか？　彼にして眞實の豫言者であるならば、我らと行動を一にし、斯る税吏・罪ある者に對しては我らと同樣冷然たる態度に出づるが至當ではないか？　と彼等は云つたのである。又彼——彼等の絶えず反抗し乍らそれでゐて其生涯の純聖さに畏懼せしめらるゝ——が、社會的に除外せられてゐる者達に對し斯る同情を表示せる事實は、所謂社會の看視者を以て自任せる彼等の憤を招いたのである。彼等はキリストの態度を是認する事が出來なかつた。彼等は自ら教養あり氣品ある宗教家を以て任じてゐたが、キリストの御行動は、彼等が如何にも自負我慾であることを曝露した。

同時に又、彼等は、從來ラビ達を輕んじて、會堂に絶えて出席したこともない者達が、イエスの許には蝟集し、そ

の言ふところに耳を傾くる事實を見て怒つた。又學者パリサイ人などですら、純なる彼の前に立つと良心の責を受くるのに、稅吏・罪あるものどもがか程に惹き寄せらるゝのは何故であるか？　と不審がつたのである。

彼等は之に對する說明が、彼らの發せる言『この人は罪ある人と交れり云々』なる嘲侮そのものゝ中にあることを知らなかつた。イエスの聖前に出づる靈魂は、自分如きものでも陷れる罪の陷穽より免るゝ途のある事を實感した。又パリサイ人は彼等を慢罵叱責するのみであつたが、キリストは彼等を神の子供らとして受け、彼等がよし父の家からは離れてゐるにしても、決して父の心には忘られてゐないこと、彼等が罪と悲慘に惱んでゐるだけに、愈々神の同情の注がれてゐる事、御許より迷ひ出でたる彼等に對し、愈々之を戀ひ求め、如何なる犧牲をも意とし給はぬことを語り給うた。之等は悉く、イスラエルの敎導者を以て任ずる彼等が、常に誇りとして奉持・解釋せる聖經で學んだに違ひないものであつた。ダビデ――一度異常なる罪に陷りたる――も、『われは失はれたる羊の如く迷ひいでぬ』（シヘン一一九ノ一七六）と錄してゐた、豫言者ミカも、罪人に對する神の御愛を示顯して『何れの神か汝に如かん汝は罪を赦しその產業の遺餘者の愆を見過し給ふなり、神は憐憫を悅ぶが故にその震怒を永く保ち給はず』（ミカ書七ノ一八）と言つてゐるのであつた。

迷羊

此の時キリストは聖書の語を以てせず、直接彼等の經驗せる事象に訴へ給うた。ヨルダンの東なる高原地方には到る所放牧に適する場所があり、屢々羊が谷間や山林に迷ひ込み、漸く牧羊者の苦心によつて探し出され、伴ひ歸らる

迷へる羊を探ぬる善き牧者

ことが多かつたのである。又イエスの許に集れる群衆中には、牧羊者や牧畜事業に投資せるものもあり、何人にもイエスの譬は理解されたのである。『なんぢらのうち誰か百匹の羊を有たんに、若その一匹を失はゞ九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらん乎』と。

こゝにイエスは、君達が輕蔑してゐる之等の靈魂は、神の財産であるのだと仰せられたのである。げに創造と贖罪とによつて彼等は神の屬にして、彼の眼からは價値あるものであり、恰かも牧羊者が羊を愛しその一つが迷ひ出ても晏如とはして居られぬ如く、否之とは絶對に比較し得られぬ程度に神は凡ゆる迷へる靈魂を愛し給ふのである。人は斯る御愛を否み、彼より迷ひ出で他の主に仕ふるに至るにしても、依然として神の屬であり、神は之が復歸をのぞみて止み給はぬのである。故にイエスは『牧者がその散たる羊の中にある日にその群を守るごとく我わが群を守り之がその雲深き暗き日に散たる諸の處よりこれを救ひとるべし』（エゼキエル書三四ノ一二）と仰せ給うてゐるのである

譬に於て牧者は唯の一匹――數へ得る最少單位であるところのもの――を探ね出すために出で往く如く、唯一つの靈魂が迷ひ出でたにしても、キリストは悅んで其の一のために生命を捐て給うたにちがひないのである。

群から迷ひ出でた羊は、數ある獸の中でも最も助けを要するもので、牧者が探ね出さなければ歸り來ることは出來ないのである。同じく神の許を迷ひ出でた靈魂も、此の種の迷羊と同じく、神の御愛によつて探ね出されなければ、御許に歸り得ぬものである。

己が羊群の一つが失せてゐることに氣附いた牧羊者は、羊檻にある群を眺めながら『まだ九十九匹ゐる。一匹位失せたのを探すのは厄介でもある。それに歸つて來るだらう、門を開けて置いてやるから、それから這入つて來るがよ

い』とは云はない。羊が失せたと知ると、牧者は憂慮しはじめ、再三再四羊群を算へ、愈々一匹失せたことが確められると睡眠もせず、九十九匹を羊檻に置いて、失せた一つを探しに出る。外が暗く、嵐が烈しく、路が險しければ險しいだけ、牧羊者の不安もつのり、愈々熱心に探し求める。彼は失せた一匹のため全力を傾注するのである。遙か遠く始めて幽かな泣聲を耳にしたとき、牧羊者は如何に勢づくことであらう！　その泣聲をたよりに斷涯をもよじのぼれば、己が身の危險をも顧みず、絶壁をも下り探し求める。その間に聲は次第に細り行き、羊が死に瀕せることを告げる、遂に彼の苦心は報はれ、失せた羊が見出される。此の場合牧羊者は羊が隨分厄介をかけたと云つて彼を叱りはしない。又鞭で打擲もしない。又家に引ずつて歸らうともしない。寧ろおゞ懼れてゐる羊を己が肩にのせ喜び勇んで歸るのである。若し傷でもしてゐる場合には、それを腕にかゝへ、胸にひきよせ、そのあたゝまりで羊を活氣づけてやる。そして探索の徒勞に終らなかつたことを感謝しつゝ羊群の許につれ歸る。

此の場合、牧羊者が羊を手にせず、悲しみつゝ空しく歸る光景を呈示してゐないことを神に感謝したい。この譬では失敗となつて終らず、成功――見出し得た喜が語られてゐる。一面これは神の羊檻よりたゞ一つが迷ひ出でても看過にはされず、その唯一つと雖も救濟されずして終る事がない保證である。主の御贖を信ずるものにして、墮落の深淵、罪の荊棘より救助せられざるなきは疑ふ可くもない。

故に罪を犯し絶望せる靈魂も之によつて勇氣づけらるべきである。自分如きものゝ罪を神が赦し、聖前に出づることを御許容下さるものかどうかと危ぶむ必要はない。既に神はその一歩を踏み出して居られる。人が神に逆つてゐる間に、彼の方から之を探ね、牧者のもの優しき心情を以て、九十九を置いて、荒野に失せたるものをたづね給ふのである。而して打碎かれ傷つき瀕死となれる靈魂をその愛の腕にて抱き、安らけき羊檻に携へ歸り給ふのである。

罪人は神の愛に浴する前に、先づ悔改めが必要であるとユダヤ人は說いてゐた。かうした彼等の見解によると、悔改めとは、人間が神の恩惠に與る手段となつてしまふ。而して斯くの如き觀念が、パリサイ人をして『此の人は罪人を迎へて食を共にす』と驚き且つ憤らしめたのである。彼等は、イエスは悔改めたる者の他何人をも己れに近づくべきでないと考へてゐたのである。然し乍らこの迷へる羊の比喩によつて、キリストは救とは我らが神を求むるの故に齎さるゝものではなく、寧ろ神が我らを招き給ふことによつて來る事實を敎へ給うた。『聰き者なく、神を求むる者なし、みな迷ひて相共に空しくなれり』（ロマ書三ノ一一、一二）とある如くである。されば神をして我々を愛せしめんがため、我らの方で悔改むるのではなく、我々をして悔改めに到らしめんがため、神が御愛を我らに顯し給ふのである。

迷ひ出でし羊を家に携へ歸ることが出來た時、牧者は嬉しさのあまり、己が友人知己を招いて『我と共に喜べ、失せたるわが羊を見出せり』と叫んだが、同樣さ迷へるものが、羊の大牧者なるキリストによつて探ね出さるゝとき、天と地は期せずして感謝と喜悅に溢るゝのである。

『われ汝らに告ぐ、此の如く悔改むる一人の罪人のためには悔改めの必要なき九十九人の正しき者に勝りて天に歡喜あるべし』恰かも天の寵兒であるかの如く自己を看做してゐる爾曹パリサイ人よ！　爾曹は如何にも義人であり自分は大丈夫であるかの如く考へてゐるが、若し爾曹自身が悔改むる必要がないと云ふならば、わが使命は爾曹に對するものではない。己が貧窮と罪惡を實感してゐる心の貧しい靈魂こそ、わが救に來たところの當の人達である。爾曹

が蔑んでゐる之等の迷ひ出た人達には、天使等も興味を懷いてゐるのである。爾曹は斯る靈魂の一つが、このわが許に來ることを呟き嘲るが、天使達が如何にそれを歡び、天上に於て凱歌を奏してゐるかを知らねばならない。

神に逆ふ罪を犯すものが滅ぶるとき、天に於て大なる歡喜あるべしとラビ達によつて言傳へられて來てゐたが、神にとつて滅すことは異常行爲であり、その創造になる靈魂が神の像に恢復せらるゝことを全天は歡びとするものであることを主は明かにし給うた。

一度罪の中にさ迷うた者が神に立歸ることを希ふ場合、之に批評と疑念の浴せかけられる事が屢々ある。『あの人はいつでもぐらついてゐるのだから、私にはどうも長持がするとは思はれない』などゝ私語して、悔改めの純眞さを疑ふものがある。斯樣な人達は神に動かされず、兄弟を訴ふる者なるサタンに動かされてゐるものと云はねばならない。サタンは、彼等が斯樣な批評的態度に出づることによつて當人をして失望せしめ、愈々神と希望より遠ざけんとするものである。斯る場合、悔悟せる罪人に、失はれしものゝ一人の立歸つたことが、天上に於て如何に喜びとなつてゐるかを想はしむるとゝもに、彼をして全く神の愛の中に安んぜしめねばならない。パリサイ的な疑念輕侮を表示して氣を挫くごときことがあつてはならない。

ラビ達はキリストの語り出で給へる比喩が稅吏、罪ある者に當嵌るものであることを了解した。然しそれにはなほ一層廣義な意味が含められてゐる。キリストはこの迷へる羊によつて個々の罪人を表徵し給へるのみならず、罪によつて汚され亂されたるこの地球をも表示し給うたのである。この地球は神の統べ給ふ宏大無邊なる宇宙の一微小分子に過ぎない。然し神の御眼には、羊檻より迷ひ出でたる九十九よりも尙この小なる墮落せる世界――一匹の迷へる

羊の方が貴いのである。さればキリストは斯の失はれし世界を救はんがため、その父と偕なる榮光を捨て天の御座より降り給うたのである。このため彼は、罪なき諸世界――愛する九十九に別れを告げてこの地上に現れ、而も『われらの愆のため傷つけられわれらの不義のため碎かれ』（イザヤ書五三ノ五）給ふに至つたのである。げに神は失はれし羊を携へ歸るの歡びに會せんがためその聖子を通し自らを與へ給うたのである。『視よ、父の我らに賜ひし愛の如何に大なるかを、我ら神の子と稱へられる』（ヨハネ第一書三ノ一）然しなほ又キリストは『汝我を世に遣し給ひしが如く、我も彼らを世に遣せり』（ヨハネ傳一七ノ一八）と仰せ給ふのである。さればキリストにより救はれたる凡ての靈魂は『又キリストの體なる教會のために我が身をもてキリストの患難の缺けたるを補』（コロサイ書一ノ二四）はせんが爲に失はれしものを救はんがため、その聖名のもとに働くべき召しを受けてゐるのである。然るに之はイスラエル人によつて閑却せられたが、今日の基督者も同一の過誤に陷つてゐはしないか？

我等は果してこれまで迷ひ出でし幾人を群に歸すために努力したであらうか？　到底見込なく匂しからぬものゝ如く見ゆるものを見放すことは、キリストの探し求め給ふ靈魂をおろそかにすることなるを自覺したことがあらうか？

彼等より身をそむけるときこそ彼等が痛烈に我等の同情を求めてゐる時かも知れない。又何れの集會にも安息と平和を求める靈魂が必ず居るものである。よし彼等は輕佻浮薄な生活を營むやうに見えても、聖靈に動かされざる程、無感覺なものではない。その多くがキリストに導かれ得るのである。

又迷ひ出でた羊は羊檻に歸らされなければ、遂に滅ぶるの他はない。事實無數の靈魂は、あたら救の手のさしのべられざるため滅びの深みに落込んでゐる。之等の誤てる靈魂は强情、疎漏の如く見える事もあらう。然し他のものと

同様の機會が與へられたならば、遙か高尚有爲の材たることを示す事が出來たかも知れぬのである。天使達は彼等を憫れみ、彼等に對する人間の餘りの無情に泣いてゐるのである。

嗚乎、誘惑過誤に陷れる者に對する衷心からなる深き同情の缺乏が思はれる。もつともつと利己を棄てゝかゝり、もつとキリストの御精神が欲しい!!

パリサイ人は、キリストの語り給へる比喩が彼等に對する譴責であることを知つた。此の場合キリストは彼等の批評批難に動ずる事なく、稅吏及び罪ある者に對する彼等の怠慢無情を責め給うた。然し彼等がその心を閉すことなきため、公然とは責めず、斯る譬を以て、神が彼等に要求し給ふところのこと、又彼等が眞の牧者であるならば、イスラエルの指導者として、その非を改め、牧者の務めに服し、キリストの愛と慈悲を現し、當然キリストのその御使命に加はる筈である事、然るに彼等が之を否認した事實は、日頃敬神振つてゐたことの虛僞なることを立證し給うた。多數のものは斯るキリストの苦言を受くることを否んだが、仲にはその聖言を心中に銘記するものもあつた。彼等はキリストの昇天後の聖靈降下に當り、この迷へる羊の譬によつて概述せられたる働に加はり、弟子達と行動を一にするに到つた。

失はれし銀貨

迷羊の譬の後で、キリストは猶一つの比喩を語り給うた。『又いづれの女か銀貨十枚を有たんに、若しその一枚を失はゞ、燈火をともし、家を掃きて見出すまでは懇ろに尋ねざらんや。』

東邦（ユダヤ）では貧しい人達の家屋は、大抵は一つの部屋になつてゐて、時としては窓もない暗いへやであつた而も部屋を掃くことなどは稀で、金子が床の上に轉がり落ちようものなら、直ぐうづ高くたまつてゐる塵埃中に沒して見えなくなり、之を探し出すには晝間ですら燈火を點じて隈なく部屋を掃除しなければならなかつた。

結婚のとき妻となるものは持參金として幾枚かの金子を持ち來ることが例になつてをり、彼女はそれを秘藏して置いて更に自分の娘に讓る習慣があつた。萬一その一枚でもなくなると、これを不祥事の如く思ふし、又これを見出した時の喜び樣も非常なもので、近所隣まで云ひふらす位であつた。

故に『遂に見出さば、其の友と隣人とを呼び集めて言はん、我とともに喜べ、わが失ひたる銀貨を見出せり』とキリストは仰られたのである。

この比喩も前の譬と同じく、何ものかゞ失はれ、而も懇ろに探ぬる事によつてそれが見出され、且見出された時に非常なる喜びを與ふる處のものゝ事を語つてゐる。然し乍らこの兩者の比喩によつて表示せられてゐるものは同じ部類のものではない。迷ひ出し羊は己れの失はれた事を知つてゐる。卽ち前者は神より離れ雜踏零落して甚だしき誘惑の下にある事を自覺せる者達を代表し、後者は自分が罪と愆の中に失はれ乍ら己れの眞相に就て知ることなきものを表象してゐる。彼等は神より遠ざかつてゐるにも拘らず、自分では知らず、靈魂が危險狀態にあるに拘らず一向無關心でゐるのである。而も斯る比喩を通してキリストは、神の御要求に無知でゐるものすら、その憐憫愛の對象であることを敎示し給うた。故に彼等は尋ね出され神の許に携へ歸られねばならぬのである。

羊は羊舍から迷ひ出で、荒野か山中に失はれたのであつたが、この一枚の銀貨は家の中で失はれたのである。極め

て手近にあるのではあるが、然し懇ろに探ねなければ容易に見出され得ぬのである。

この比喩は家庭にあるものゝ教訓となる。往々にして我々は、家族の靈魂に對して無知不注意であることがある。その中の一人が神から遠かつてゐ乍ら、その血を分けたものが一向に之を憂へず、斯樣にして神より委託せられし賜物の一つを失つてしまふ事がある。

銀貨は塵埃中に埋もれてゐても、依然として銀貨たることに變りはないのである。所有主がそれを探すのも價値があるからである。是の如く、よし如何に頽廢墮落狀態にあつても、凡ゆる靈魂は神の御眼からは貴いのである。貨幣には、その國の元首の像なり統治權力を示す記號が刻まれてゐるが、同樣人類は、その創造られし當初に於ては神の像と記號とを佩びてゐたものである。後罪の結果、甚だしく害はれて不分明になつたとは云ふものゝ、未だその跡が遺つてゐるのである。然れば神は、斯る靈魂を元に歸し己が義と聖とを以て再び印する事を希求し給ふのである。

比喩にある女は、失へる銀貨を懇ろに尋ね求めた。そのため、燈火をともし、家を掃除し、探すに邪魔となるものは悉く除いた。たゞの一枚だけが失せたのではあるが、それが發見されるまで探すことを止めなかつた。同樣家庭に於て數ある一人が神から離れたにしても、之を元に歸すため最善を盡さねばならない。とゝもに家族のものは何れも深く自らを省み、己が日常行爲に就て吟味し、彼をして强情頑固ならしめた過誤、取扱上に於ける失態の有無に就て點檢しなければならない。

子女の一人が自己の犯した罪に無自覺である場合、その兩親たるものは安閑としてゐてはならない。燈火をともし聖言を探り、その光によつて家中を嚴密に吟味し、何故彼が失はれたかを調べなければならない。先づ兩親は心の裏

を顧み、己が習慣行爲に就て省察しなければならぬのである。子供達は神の嗣業であるから、斯る賜物の取扱に就て、我々は神に答辯しなければならぬのである。

世には海外傳道を熱望したり、家庭を外にして盛んに福音事業に活動したりし乍ら、子供達には一向救主とその愛を知らせてゐない親たちがある。多くの親たちは子供達の救靈に關しては牧師や安息日學校教師に委せきりにして顧みないでゐる。然し斯る態度は神より委ねられたる責任を忽にしてゐるものと云はねばならない。實にこれは並ならぬ苦心忍耐力を要する仕事ではあるが、之を閑却することは、その當人をして不忠の家宰たらしむるとゝもに、斯る怠慢に對し如何なる口實をも神は容認し給はぬのである。

とは云へ斯樣な怠慢に陷れるものも敢て失望するには當らない。譬にある女が、失つた銀貨を得るまでは尋ね求めた如く、『視よ我とヱホバが我にたまひたる子輩を』（イザヤ書八ノ一八）と云ひつゝ歡び聖前に出で得るやう、愛と信仰と祈禱の三者によつて家族のものゝために働くべきである。

家族の者に對する傳道は自他共に益するところのものである。家族のものゝため興味を有つて忠實に務めを果す時は自分自身神の大家族の一員たる資格が得られ、忠實にキリストのために務むるならば、永遠に存らふることが出來る上に更にキリストに在る兄弟姉妹に對して、家族の一員として盡すことが出來るのである。

斯る經驗を通して神は更に又廣い範圍の人々のため働くことを望んで居られる。我々の愛と同情とが增大するにつけ、到る處に働きを見出すことが出來るのである。神の大家族は全世界を含むものであるから、それらの一人に對してすら之を看過しにすることは許されないのである。